修士論文

太宰治『斜陽』論

教育学研究科　教科教育専攻　国語教育専修　国文学分野
一一ＧＰ二〇二　山本　亘

目次

はじめに
第一章　作品について
第一節　初出及び梗概
第二節　作品成立事情
第二章　研究史
第一節　主要先行研究史
第三章　作品の周縁と主題としての「滅び」
第一節　作品の同時代について
第二節　貴族について
第一項　華族制度
第二項　『斜陽』に見る貴族
第三節　滅びという見方について
第四章　かず子という人物
第一節　かず子の語る（書く）行為に関する『斜陽』先行研究
～高田知波・島村輝・榊原理智・中村三春の論から～
第二節　かず子の思考変遷と連想性
第三節　飛躍性を持つかず子の思考
第五章　聖母子
第一節　「マリヤ」「聖母子」について
第二節　かず子のマリヤ意識
第六章　『斜陽』と『斜陽日記』の比較
第一節　『斜陽日記』と『斜陽』の比較からの語るかず子と書くかず子
第二節　『斜陽』と『斜陽日記』の対応
第三節　『斜陽』と『斜陽日記』の差異
結論
おわりに
テキスト
参考・引用文献一覧

はじめに

「斜陽」は戦後に発表された太宰の作品である。戦後の貴族一家を描いた作品である。

「斜陽」は初版で一万部、その後二万部増刷という高い人気を得た。これは、太宰自身のそれまでの作品の部数の中で群を抜いており、太宰は人気作家となっていく。

作品の力に加え、発表当時の時代状況などが相まって、多くの人に受け入れられたと推察できる。

「斜陽」の先行研究は数多く存在する。かず子が貴族から市井の人間として再生していくという見方、道徳革命を掲げて生きる果敢な姿、かず子一家のそれぞれの死に向かっていく様、四人の登場人物が作者の分身であるという見方、かず子の「恋と革命」に向かう力強さなどの主題や作者の問題の他に、蛇の意味や聖母子についての論などが存在する。

また、「斜陽」を読み解いていく方法として、「貴族」「戦後の時代状況」、「斜陽日記」も含めた太田静子、「太宰の生家の状況」など多く参照されてきた。

多くの読みの方法が存在したのは、「斜陽」に太宰の様々な手法が多く入っているためと考える。奥野健男が「この作品は、作者の玩具箱をひっくり返えし、並べたてた感」[一]と述べている通り、「斜陽」には、これまでの太宰の手法やモチーフが多く存在する。

これまでの先行研究において、多方面から論じられてきた「斜陽」であり、作品の評価も他に余地がないかのように思われるかもしれない。

しかし、「斜陽」研究において、一九九〇年代から「語り」という点から評価がされてきた。かず子が「斜陽」において語り、また手記や書簡を書いている。

これまでの作品の評価に加えて、かず子の語る（書く）という視点で作品を読んだときに、どのようなかず子が浮かび上がってくるのかを考えたい。

かず子が「斜陽」を語る（書く）ということは、かず子が自己について語る（書く）行為が多い。かず子自身が「斜陽」の中で、自己のことについて、どのような素材を取り込み、論理を形成していくのかを見ていくことで、かず子像というものが明確になってくるのではないだろうか。

かず子の語る（書く）という視点から、かず子の思考と論理について明らかにしたい。

まず、これまでの先行研究でどのような論じ方がなされてきたのか整理する。そして、作品の周縁にある、戦後という時代背景と貴族についておさえていく。

その上で、かず子の語る（書く）行為に関する「斜陽」先行研究をふまえながら、かず子の語る（書く）行為について詳細に検討を行い、かず子像を探っていきたい。

また、かず子は「マリヤ」や「聖母子」という言葉を用いて、人物を捉えている。かず子が「マリヤ」や「聖母子」を用いることについて、かず子の語る（書く）視点から、考察を進めて行く。

さらに、「斜陽」の底本として使われた「斜陽日記」にも目を向け、「斜陽」と「斜陽日記」を比較することを通して、そこから浮かび上がる、かず子の語る（書く）行為についても論じていく。

一　奥野健男「作品研究「斜陽」小論」（『近代文学』一九五三・六）

第一章　作品について

第一節　初出及び梗概

研究作品

太宰治『斜陽』

テキスト　ちくま文庫『太宰治全集９』（一九八九年五月　筑摩書房）

初出

昭和二十二年七月一日発行の『新潮』第四十四巻第七号から同年十月一日発行の『新潮』第四十四巻第十号まで、「長篇連載」として四回にわたって発表された。

梗概

貴族階級のかず子とお母さまは、日本が無条件降伏した年の十二月のはじめ、西片町の邸宅を売り、伊豆の山荘に引越す。かず子と病身のお母さまは弟の直治が戦場から帰ってくるのを待ちながら生活していた。かず子は、蛇の卵を焼いたことに不吉な感じを抱く。直治が戦争から帰ってきたが、小説家上原二郎のもとへと行ってしまう。かず子は、六年前直治が麻薬中毒で苦しんでいた頃の「夕顔日誌」を目にする。当時かず子は直治に薬代をねだられていた。かず子は多額のお金をねだれるようになり、心配になって上原をたずねた。かず子は上原とお酒を飲みに行った折り、不意にキスをされる。そのことがかず子の「ひめごと」になった。その後、かず子は夫の山木と離婚した。

「夕顔日誌」を目にした後、かず子は上原に三通の手紙を出す。一通目は、いまの生活から逃れ出たい。私は或る人に恋をしていて、愛人として暮らすつもりという上原への思いを綴る。二通目は、上原にお金がほしいのではなく、赤ちゃんがほしいことを綴る。三通目は、お母さまに上原のことを不良と言うと、肯定的な返事で、そのことが私にはうれしく、私も不良になりたい、上原に逢いたいと綴る。

しかし、三通とも返事はこない。かず子は上原のもとへ行こうと決意した時、お母さまの様子が悪くなり、亡くなる。かず子は家に帰ってきた直治と入れ違いに上原のもとへと赴く。かず子は、上原の家行ったが上原は不在だったが、そこで上原の妻に親切にされる。しかし、かず子は「人間は、恋と革命のために生れて来た」と思いを持ち直し、西荻のチドリで上原と再会する。六年前とは違う上原の姿を感じたが、上原と夜を共にして、朝を迎える。

その朝、直治は自殺していた。遺書には、上原の妻への思いと「僕は、貴族です。」と記されていた。かず子は上原に最後の手紙を綴る。小さな生命が宿ったこと、かず子も上原も道徳の過渡期の犠牲者であること、「こいしいひとの子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成」であること。そして、私の子を上原の妻に抱かせ、「これは、直治が、或る女のひとに内緒に生ませた子ですの。」と言わせてほしいことだった。

各章の内容

一章（手記）

ある朝、お母さまがスウプを一さじ吸って、「あ。」という声をあげる。かつて、ヒラリとスウプをいただく姿に弟の直治はかつて本物の貴族はお母さまくらいと言った。お母さまの食事は礼法からはずれているが、骨つきのチキンなど指先でつまんで食べる姿は、可愛らしいばかりかエロチックに私は思う。また、奥庭でお月見をしている時、お母さまは萩のしげみの奥でおしっこをするような人である。戦中、直治は召集され南方の島に行ったが、消息が絶えていた。お母さまは直治に逢えないと言っているが、私は逢えると思っていた。直治は高校に入った頃から文学にこって、不良少年みたいな生活をはじめお母さまに苦労をかけた。

ある日、近所の子供たちが蛇の卵を見つけてきた。私は蝮の卵と思い、燃やしてしまう。お母さま

は、お父さまの臨終の直前に枕元に蛇がいたことから蛇を恐れていた。私もその時、庭の木に蛇が上っていたのを見ていた。この二つのことでお母さまは蛇に対して畏怖の情を持った。庭に蛇がいて、お母さまがあれは蛇の母親で卵をさがしていると言った。私は、お母さまの顔が悲しい蛇に似ていると思い、私の胸の中にいる蛇が母蛇をいつか食い殺してしまう気がした。

戦後、生活が傾いてきたため家を売って伊豆に引っ越すことになった。お母さまは私がいるから伊豆に行くと言い、西片町の家で死んでしまいたいと言って泣いた。伊豆の山荘での安穏は、全部いつわりの見せかけにすぎないと、私は思うことがあった。

恋と書いたら、書けなくなった。

二章（手記）

蛇のことがあってから十日ほど経った日、私は風呂のかまどの火の不始末で火事を起こす。お母さまの励ましの言葉のおかげで、おわび廻りができた。翌日から畑仕事をする。戦争の時、ヨイトマケをした。戦争はその記憶以外はつまらないものだった。ヨイトマケのおかげでからだが丈夫になったと思った。軍事労働では、外国人に思われたり、将校からトロイカを渡され特別の待遇を受けたりした。火事の頃からお母さまは病人くさくなり、私は粗野な下品な女になっていく気がした。

お母さまから直治が生きている話を聞かされた。叔父さまからお金が無くなったことと私が嫁に行くか奉公したほうがよいと言われたことをお母さまが私に告げる。私はお母さまの傍にいたら貧乏はなんでもないと考えていた。私はお母さまに暴言を言い、泣いた。私は或る人が恋しくなった。私はお母さまにひめごとがあることを言った。

三章（手記・「夕顔日誌」）

お母さまに物を擬人化していることを指摘され、私は子供がないからと言った。直治が戦争から帰ってきた。まもなく直治は東京へ行った。私は、直治の部屋で直治の日記を見る。直治が麻薬中毒の頃の日記であり、借金のこと、戦争のことが書かれていた。六年前、直治の薬代を作家の上原に届けた。私は上原とお酒を共にした。上原から帰り際にキスをされた。私は世間が急に海のようにひろくなった気がした。私は、そのころ細田の絵に夢中になり、細田が好きだと公言していた。そのこともあり、山木と離婚した。

四章（手紙）

私は上原へ手紙を書く。一通目は親子三人が生きていけそうもない。私は女大学にそむいてもいまの生活から逃れ出たい。私は或る人に恋をしていて、愛人として暮らすつもりである。ということを書く。二通目では、上原にお金がほしいのではなく、赤ちゃんがほしい。愛人となりたいことを書く。三通目では、私がお母さまに上原のことを不良と言うと、肯定的な返事が返ってきた。そのことが私にはうれしかった。私も不良になりたい。上原に逢いたいことを書く。

五章（手記）

三通の手紙の返事は来なかった。私は上京して上原に逢おうとしたところ、お母さまの様子が悪くなる。私はローザルクセンブルクなどの本を読み、お母さまのように天性の教養を持っている人は当然の事として革命を迎えることができると思った。その時、奇妙な興奮を覚える。旧来の思想を破壊する、道徳を反しても恋する人のところへいく人妻の姿が重なった。破壊思想は哀れで悲しくて、美しいものと思った。

私は十二年前、友達から更級日記の少女と言われた。私はその時から一歩も進んでいないと思った。戦前、戦中に世間の大人達は革命と恋を愚かしく、いまわしいものとして教えなかったと考え、戦後、私は、人間は恋と革命のために生まれてきたと考える。

お母さまが蛇の夢を見たと言い、言われたところを見ると蛇がいた。私は、お母さまのことをあき

らめ、悲しみの心の底を突き抜けた心の平安というべき心のゆとりができた。お母さまの傍にいようと思った。私は人と争わず、憎まずうらまず美しく悲しく生涯を終わることができるのはお母さまが最後であり、生き残るという事は醜くて血のにおいのする、きたならしい事のような気がする。私はそれでも、思う事をしとげるために世間と争っていこうと思う。そして、お母さまが亡くなった。

六章（手記）

戦闘、開始。恋。私は、お母さまの葬儀を済ませた。ある日、直治がダンサア風の人を山荘につれてきた。私は直治の弱みにつけこみ、上原のもとへと向かう。上原の家へ行くと、奥さんと娘がいた。奥さんに親切にされ、動揺するが、恋と革命のため上原のもとへ向かう。六年ぶりに逢った上原は違う人だった。そこでは、上原にたかって酒を飲む人たちがいた。私は上原と二人きりになった時、上原に可愛がられていることを意識した。私は上原にキスされたが、仕方が無いという気持ちを感じた。寝ていると上原が隣にいた。抵抗したが、可哀想になり放棄した。私の恋は消えていた。

明け方、上原の顔を見て、犠牲者の顔、貴い犠牲者。美しい顔に思われ、恋がよみがえった。私は幸福感が飽和点だった。直治はその朝に自殺していた。

七章（手記・直治の遺書）

直治の遺書。直治はこの世の空気と陽の中に生きにくい、生きて行くのにどこか一つ欠けている。下品になりたかった、強暴になりたかった。それが民衆の友になり得る唯一の道だと思ったと書く。家を忘れなければ、父の血に反抗しなければ、母の優しさを拒否しなければ、姉に冷たくしなければ、民衆の中に入っていけなかった。しかし、お母さまの生きているあいだは、死ぬわけにはいかなかった。それはお母さまを殺してしまうことになる、お金の事で人と争う力が無かったと記していた。

直治は人妻に思いを寄せていた。私に迷惑をかけないようにと私がいない時がチャンスだった。直治は僕は貴族ですと書いていた。

八章（手記・手紙）

私は直治の死の後始末をして一ヶ月、上原に手紙を書く。赤ちゃんができたこと、この世に戦争・平和・貿易・組合・政治があるのは、女がよい子を生むためで、私は勝ったこと。私は古い道徳を平気で無視して、よい子を得たという満足があり、私も上原も道徳の過渡期の犠牲者だということ。しかし、古い道徳と闘うには、もっと貴い犠牲が必要であること。今の世の中で一番美しいのは犠牲者ということ。上原に一つゆるしていただきたいことがある、それは、上原の奥さんに私の子を抱かせ、その時、この子は直治が或る女の人に生ませた子だと言わせてほしいということであった。

第二節　作品成立事情

『斜陽』の成立事情について整理する。

太宰は昭和二十年七月三十一日に甲府から金木へ疎開先を移す。二金木での疎開、終戦を経て、昭和二十一年十一月十五日に三鷹に帰る。

『斜陽』の執筆は、昭和二十二年二月下旬から始まり、三月七日まで静岡県三津浜の安田屋旅館で一章と二章が書かれたとされる。『斜陽』の執筆が始まる昭和二十二年二月までの太宰について見ていきたい。作品のモチーフが窺われるものを示しながら論考する。

二　「太宰治年譜　岸睦子編」（『太宰治大事典』勉誠出版　平成十七年一月十日）

以下、山内祥史「解題」[三]を参考にする。太宰は、戦後、疎開先から三鷹に帰ってきた時には、すでに『斜陽』についてある程度の構想を持っていた。

津島美知子「後記」(『斜陽　太宰治全集第十四巻（近代文庫）１３』創元社　昭和二十七年三月一日発行）の「斜陽」の項には、つぎのように記されている。

その年（昭和二十一年）の十一月十五日、太宰は疎開先から三鷹の旧居に帰りました。「斜陽」の執筆にとりかかったのはその翌年の二月下旬のことでしたが、作品の構想は既に金木にゐる間に芽生えてゐて、「斜陽」といふ題名も定まつてゐたやうです。（前註二）

亀井勝一郎「斜陽〔鑑賞〕」(『太宰治（近代文学鑑賞講座１９）』角川書店　昭和三十四年五月十日発行）にも、つぎのように記されている。

この生家の没落を「桜の園」風の仕立で書きたいとは、太宰が洩らしていたところである。（前註二）

津島美知子『回想の太宰治（講談社文庫）』(講談社　昭和五十八年六月十五日発行）所掲の「三月二十日」には、つぎのようにも記されている。

二十一年の十一月半ばに帰京するまでの一年四カ月の間、地主であった太宰の生家の没落の様相は私どもの目の前に在った。

かつて三百戸近い小作人がぞくぞく小作米を運び入れて俵の山をいくつか築いたタタキは、ガランとしてはした米をはかるのに使った台秤が一隅に当時の名残りをとどめているばかりで、小学生の姪のボール遊びの場と化している。

帳場は厳重に鍵を管理していて無用のものが出入りすることはなかったという米蔵の扉は開き放しで内部は空っぽ、金庫を据えカウンターを備えて帳場さんが小作人と交渉した店はＹ一家に貸していて、帳場の老人は毎日通ってきてはいるが手持ちぶさたの様子である。このような様を目にして太宰は「『桜の園』だ、『桜の園』そのままではないか」と口ぐせのように言った（貴族の没落をテーマにした小説の構想はそのころすでに芽生えていたのであろう）。（前註二）

金木の私の生家など、いまは「桜の園」です。あはれ深い日常です。私はこれに一票いれるつもりです。（昭和二十一年一月十五日付井伏鱒二宛手紙）（前註二）

農地改革は、「すべての土地を時価で、いったん国が買いあげ、それをさらに小作農に売り渡す。その事務を各地に設置される農林省の出先機関、農地事務所によって行うというものであった。（中略）農地の九割が農民の手中に帰する結果となった。しかも、折からのインフレーションのために、農地の買上げ・売却価格は著しく低いもの」[四]であった。

野原一夫[五]は、当時の津島家について述べている。

日本の民主化政策を推し進めようとした連合軍総司令部（ＧＨＱ）が真先に着手したのは、地主の所有地の大半を自作農地化しようとする農地改革であった。二次にわたる農地改革案により、在村耕作地主は三町歩を残し、非耕作地主は一町歩を残し、不在地主はその全所有地が、強制買

三　山内祥史「解題」『太宰治全集第九巻』（筑摩書房　一九九〇年十月二十五日）
四　中村隆英『昭和史Ⅱ』（東洋経済新報社　一九九三年四月三十日発行）
五　野原一夫「「斜陽」と「斜陽日記」」『新潮』九十五巻第七号（新潮社　一九九八年七月一日発行）

上げの対象となった。二百五十町歩の大地主津島家も、その所有地の大半を失うに至ったのである。

太宰は戦後の農地改革により、大地主であった津島家の没落の様子を見た。それまで賑わっていたかつての生家とそこで育った自身の姿、生家に対する反発した姿が今まであったであろう。その生家が今までとは違う様相となった時、太宰はかねて読んでいた『桜の園』が重なった。生家が「桜の園」と同じような様相になったことに一種の高揚感やあわれを感じた。『桜の園』のような作品を作る上での契機の一つして大きな意味のことであったであろう。

この生家の没落と『桜の園』は前述の通り関連してくるが、〈斜陽〉という言葉はどこからきたのか。

東郷克美が「太宰治とチェーホフ―『斜陽』の成立を中心に」（『国文学　解釈と鑑賞』第三十七巻第十二号「芥川龍之介と太宰治」昭和四十七年十月一日発行）で指摘しているように、「春の枯葉」の「ト書きに三か所にわたって背景としての『斜陽』が書きこまれていること」が注目されよう。左の「三か所」である。

下手のガラス戸から、斜陽がさし込んでゐる。（第一場）
舞台すこし暗くなる。斜陽が薄れて来たのである。（第一場）
斜陽は既に薄れ、暮靄の気配。（第二場）

「春の枯葉」の起稿は、すでに見てきたように、五月一日と推定される。「斜陽」の語に対する関心の芽生えは、五月以降ということになるのだろう。ただし、杉森久英「苦悩の旗手太宰治」（「別冊文藝春秋」第九十八号、昭和四十一年十二月五日発行）に紹介されたように、生家津島家二階の八畳間の襖には、「蒹葭緑老満陂塘秋社村園野飯香風峭客衣初欲冷砧声断続響斜陽」とあって、「斜陽」の二字は、子供のときから見馴れたものであったようだ。（前註二）

戦後に発表された戯曲「春の枯葉」に〈斜陽〉という言葉が繰りかえし用いられている。また、高田知波が指摘するように、戦時中の小説「竹青」にも〈斜陽〉という言葉は用いられている。〈斜陽〉という言葉は『斜陽』成立以前に太宰が用いていた言葉であることがわかる。生家の襖にも〈斜陽〉の二字が含まれており、子供のときから目にしていた字（言葉）であったと推察できる。太陽が沈む様が生家の没落と重なったと考える。その太陽の様子が傾いた陽の光である。

〈斜陽〉という言葉について、高田氏は「桜の園」を踏まえて「希望の比喩表現」としての意味を含むと捉え、『斜陽』という題名について、

『斜陽』のタイトリングにこめられていたのは「滅びの宴」だけでもなければ、「道徳革命」に向かうかず子の生き方が「題目とは裏腹」なのでもない。卵を焼かれた母蛇を「お母さま」が哀れむ場面に出てくる「夕日がお母さまのお顔に当つて、お母さまのお眼が青いくらゐに光つて見えて（略）飛びつきたいほどに美しかつた」という「夕日」と、最終章でかず子が自分は「太陽のやうに生きるつもりです」と宣言するその「太陽」の双方を内包する両義性において『斜陽』の題名のメッセージは解読されるべきであり、この題意に対応するかたちでかず子が小説全体の語り手として選ばれているのではないか[六]

[六] 高田知波「『斜陽』論―ふたつの「斜陽」・変貌する語り手」（『国文学』一九九一年四月）

とする。

かず子の語りについては、後章で論じていく。

また、齊籐理生[七]も〈斜陽〉という言葉の意味として、「夕陽」だけでなく「朝日」という意味を見る。〈斜陽〉という言葉から、これまで「滅び」や「没落」という解釈が多い。しかし、かず子の再生という側面で捉えると、「滅び」や「没落」だけとは言えないところがある。

「朝日」については、かず子が上原を一夜を共にした後の朝の場面がある。

夜が明けた。

部屋が薄明るくなって、私は、傍で眠っているそのひとの寝顔をつくづく眺めた。ちかく死ぬひとのような顔をしていた。疲れはてているお顔だった。

犠牲者の顔。貴い犠牲者。

私のひと。私の虹。マイ、チャイルド。にくいひと。ずるいひと。

この世にまたと無いくらいに、とても美しい顔のように思われ、恋があらたによみがえって来たようで胸がときめき、そのひとの髪を撫でながら、私のほうからキスをした。

かなしい、かなしい恋の成就。

上原さんは、眼をつぶりながら私をお抱きになって、

「ひがんでいたのさ。僕は百姓の子だから。」

もうこのひとから離れまい。

「私、いま幸福よ。四方の壁から嘆きの声が聞えて来ても、私のいまの幸福感は、飽和点よ。くしゃみが出るくらい幸福だわ。」（第六章）

齊籐氏は、「夜明けの光のなかで、かず子の上原に対する見方は急速に変化」していることや、かず子が幸福を感じ、そのさいに「東から斜めの光が射している」ことを示す。

野原一夫は『斜陽』と太宰の持っていた〈日本の「桜の園」〉の構想について、『新潮』連載までの経緯から次のように示している。

十一月二十日の夕刻、『新潮』への小説連載と、完結後の単行本刊行の件で、太宰は新潮社に来てくれた。そのとき太宰は、意気込んだ口調で言った。

「傑作を書きます。大傑作を書きます。小説の大体の構想も出来ています。日本の『桜の園』を書くつもりです。没落階級の悲劇です。もう題名は決めてある。『斜陽』。斜めの陽。『斜陽』です。どうです、いい題名でしょう。」

しかし、没落階級と口にしたとき、その三カ月余りのちに筆を起した「斜陽」にあるような華族階級を太宰が想定していたのかどうかは、疑ってみてもよい。あるいは、その時点においては、没落してゆく生家津島家をモデルとする悲劇を、もちろんたぶんに虚構化しながら、太宰は書きたいと思っていたかもしれないのである。[八]

七　齊籐理生「太陽と言葉――『斜陽』試論」（『太宰治スタディーズ』第一号　太宰治スタディーズの会　二〇〇六年六月）

八　野原一夫「「斜陽」と「斜陽日記」」（『新潮』九十五巻第七号　新潮社　一九九八年七月一日）

ここから、『斜陽』は元々は「日本の『桜の園』」という構想をもつ作品であったとわかる。そこには、生家の没落の様子も作品のモデルとしての役割を果たしたかもしれない。しかし、こうした『斜陽』の構想に、愛人である太田静子の日記が関わってくる。

野原一夫の「回想太宰治」によれば、その日は「二十二年一月六日」のこととして記されている。その日太宰治は、太田静子を吉祥寺のコスモスに案内した。『あはれわが歌』によれば、「マダム、向ふに行つて呉れないか。このひとに、大事な話があるんだ」と治はいい、「行かう」と園子の手をとった、という。（中略）

治はうれしさうに微笑して、園子に近づき、両掌を握りしめ、

「園子の日記が欲しい」と言った。あぁ、このひとが言ひたかったのは、これだけのことだつたのだ、このひとが欲しかつたのは、日記だけだつたのだ、園子は自分のあはれさを身に沁みて感じた。

「わかつた？」

「今度の没落貴族の小説に、どうしても園子の日記がいりようなんだ。津軽の家を舞台にして、主人公を僕に、さうしてその愛人を園子にするつもりなんだ。だいたいの筋は出来てゐる。最後は死」、治は急にだまつてしまつた。園子は死といふ言葉を聴いたけれど、何も尋ねなかつた。

「小説が出来上つたら、一万円あげるよ」

園子は一万円もらへたら、どんなにいいだらうと思つた。

「じやあ、これで話は澄んだ」

治は悲しげに微笑した。（前註一）

太宰の昭和二十二年一月（日付不詳）太田静子宛書簡である。

同じ思ひでをります。

二月の二十日頃に、そちらへお伺ひいたします。そちらで、二、三日あそんで、それから伊豆長岡温泉へ行き、二、三週間滞在して、あなたの日記からヒントを得た長編を書きはじめるつもりでをります。

最も美しい記念の小説を書くつもりです。[九]

『あはれわが歌』によれば、この手紙は「二月七日」付となっている。それはともあれ、『あはれわが歌』など、太田静子の回想的小説によれば、この時点では、まだ太宰治に「日記」を見せていなかったという。だが、この手紙の「あなたの日記からヒントを得た長編を書きはじめるつもり」という記述は、「日記」を見ないで書いていると思えない。（前註一）

鳥居邦明は、「二十二年一月のうちに、すでに日記は太宰の手元に渡っていたということになる。」[一〇]とする。

昭和二十二年二月二十一日午後、太宰治は、神奈川県足柄下郡下曾我村原の大雄山荘に到着したようだ。（中略）その二十一日夜のこととして、『あはれわが歌』には、つぎのように記されている。

「日記は、どこにあるの？」しばらくして、治が尋ねた。

「二階に、……」と答へて、それから少し改まつた声で、

「園子の、いままでの生活、ほんたうに泥沼のやうな生活だつたのね。だから、園子の日記は」

九　『太宰治全集１２』（筑摩書房　一九九九年四月二十五日）

一〇　鳥居邦明『斜陽』（『作品論太宰治』双文社出版　昭和四十九年六月二十日）

「いいんだよ」と言ふなり、彼は園子を抱きしめ優しく唇づけて、離し、
「じやあ、僕、先にあがつて待つてゐる」
リュックを持つて、ひとりで二階へあがつて行った。
（略）
「いま、日記を読んでゐたんだよ。紅薔薇のところまで読んだのだけど、僕が思つてゐた通りの日記だつた。おかあさんが死ぬところでおしまひになるんだね。（略）」
「弟子」には「それから六日目の朝」のこととして、太田静子「『斜陽』の子を抱きて」（「婦人公論」第三巻第八号、昭和二十三年八月一日発行）や「『斜陽』前後」（「小説公園」第一巻第四号、昭和二十五年七月一日発行）や『あはれわが歌』には、「五日目の朝」のこととして、つぎのように記されている。
支那間の机の上に原稿用紙をひろげて、
斜　陽　　太宰　治
それだけをお書きになって、伊豆へ立たれることになりました。（「『斜陽』の子を抱きて」）（前註一）

太宰が『斜陽日記』を手に入れた時期については、鳥居氏の見解や太宰が『斜陽日記』を手に入れてから『斜陽』を書き始めるまでの時間から、太宰が太田静子のもとに訪れる昭和二十二年二月二十一日以前とする見方がある。一方、太田静子の回想によれば、昭和二十二年二月二十一日となる。時間的な差異が生じている。太宰が『斜陽日記』をいつ手に入れ、見たかについて詳細な考証は本論の趣旨から外れるため行わない。
着目したいのは、いずれにしても『斜陽日記』を読んだことである。そして、この『斜陽日記』が『斜陽』に少なからず影響を及ぼしたと見られる。
太宰が持っていた〈日本の「桜の園」〉という構想、〈斜陽〉という言葉、そして『斜陽日記』。これらが、作品のモチーフの大きな部分である。『桜の園』・〈斜陽〉・『斜陽日記』が融合、そして虚構化されて作品『斜陽』が生み出されている。そのことから、『斜陽』の諸々の問題を解明していく上で、『桜の園』、〈斜陽〉という言葉、そして「斜陽日記」に注目されてきたのである。

第二章　研究史

第一節　主要先行研究史

ここでは、『斜陽』の同時代である一九四年代から現在までの研究内容と作品の評価についてみていきたい。

同時代（一九四十年代）

須田章「太宰治・斜陽」（『東北文学』一九四七・一一）

「斜陽」の新潮誌連載中に「この娘だけは「貴族転落」という歴史的位置を感覚的にせよ若干つかみ得る近代性（人間性）を持たされている」として、「貴族的属性を失っても遂に喪失しない人間性の不敵な成長」をかず子に見る。

香川明「文芸時評『斜陽』その他」（『若草』一九四七・一二）

「女主人公が世馴れない生活感情なりに自我に眼醒める過程は、母にたいする明暗二様のあらはれ方に鮮かに描かれてゐる」とする。

手塚富雄「作品から浮いた思想　概念の苦悶が何の苦悶ぞ！」（『日本読書新聞』一九四七・一二）

「読者の多くも、何かの意味で滅び行く「貴族的なるもの」を自分の中に持っているだろう。そこがこの作を人につなぐのである」と評価する一方、「作者が概念的な言葉で思想のようなものをいう時、多くはそれは浮いている」とする。

小原元「斜陽の挽歌　解体に瀕する太宰治」（『新日本文学』一九四八・一）

「宿命の不可知と、意志的自我とのきびしい対立を、対立のままに統一を欲することが、主体の分裂をはらんだ危機的様相」、つまり、「宿命を宰領とするがゆえの不透明の現実と意志的人間の確執に近代の悲運を見、すでに人間であることに宿命を見て、確執をそのものとして統一しようとする者の生にいどむ決闘」とする。また、蛇という象徴的手法については、「その神秘性が現実と直結する苦悩や絶望の印象を希薄化」されているとする。「郷愁、寂寥、絶望、虚無に、それなりの生をさぐろうとした四人の太宰治の分身のうち二人が解体した」とする。この二人はお母さまと直治であり、さらに「のこされた二人の男女の解体も遠からぬことであろう」として、この二人は上原とかず子である。つまり、四人の登場人物が終焉へと向かっていくことが示される。また、四人の登場人物が太宰の分身であるという点も注目される。

伊藤整「『斜陽』と『処女懐胎』」（『人間』一九四八・二）

太宰が「明治末期の通俗小説にしか描かれなかった貴族の生活」を描いたことを肯定しながら、「女主人公の手記として見れば、さういふ貴族らしい用語、考へかたなどは、細部にはかなり気を配って使はれてゐる。しかし、その骨組み、告白、手紙、日記、思い出などから出来てゐる作品構成は、反自然的」である。「女の言葉、女の考へかたで捕へられる或種の思想、日記体の面白さ、手紙の文の効果、批評的な寸言の味、さういふさまざまなスタイルのアラベスクを生かした現代式の作品」とする。作品の構成について示している。

神西清「斜陽の問題」（『新潮』一九四八・二）

「斜陽」を「ハ長調の弦楽四重奏曲」に譬える。第一主題は「新しい母性倫理へめざめたかず子が、みづからを美しい犠牲として新道徳の祭壇に捧げるため、まつしぐらに突き進んでゆく勇ましい姿」、第二主題を「虚無にむしばまれて、まつさかさまに死の淵へ転落してゆく弟直治の姿」と

する。また、かず子に聖母の姿が描き出されるということにも注目される。太宰文学の本質は祈りとする。

亀井勝一郎「作家論ノート　太宰治編」（『文学界』一九四八・六）

「悲しく、凝った挽歌だ。戯曲性を巧みにとりいれた叙事詩」ととらえ、直治は「プロテストのために死ぬ。かず子はプロテストのために生きる。いづれも自分自身の運命に対してプロテストするのだ。自分の身と心を滅ぼして。自殺と云えば、かず子の恋愛も自殺である」とする。そして、「四人四様の斜陽。死の四重奏。無頼派の悲しい祈祷」とし、挽歌とする。

扇畑忠雄「人間への脱出―太宰治『斜陽』について―」（『ペン』一九四八・七）

「母対かず子、弟対かず子、上原対かず子それぞれの場合のかず子がそれぞれの場合に応じながら変化しつつ、しかも三つの場合は微妙にかさなり合いながら一人のかず子を発展の形で結びつけている」。「かず子の果敢な道徳革命を通しての人間的成長」に主題があり、「うしろ向きの人生ではなく、前向きの人生を、精神の解放をさらに社会的な「或るもの」ときびしく対決させることによって描いていくことが太宰文学に必要とする。「日記や手紙などの持つ自照的真実性を逆に利して、虚構の真実性を強調する手法でもあるが、「斜陽」においては相当の効果をあげている」と考える。

豊島与志雄「解説」（『太宰治全集』第十四巻　八雲書店　一九四八・一〇）

「母親にしても、娘の女主人公にしても、小説的に検討すれば、大貴族の人柄としては形が崩れてゐる」、「作者は、彼女等を自分から遠く引き離して描くことが出来なかった」とする。

一九五〇年代

長谷川泉「「斜陽」とモデル」（『解釈と鑑賞』一九五〇・七）

「太田静子の「斜陽日記」は「斜陽」の背景をなす没落貴族の生活環境と生き方の肉づけをなした」。「「斜陽日記」は「斜陽」に扮飾を与えたけれども「斜陽」の魂は与えなかった。「斜陽日記」には「斜陽」の中に見られる革命のはげしさも恋愛のきびしさ、はげしさ、つらさもない」。

亀井勝一郎「解説」（『太宰治作品集』第5巻　創芸社　一九五一・五）

「「斜陽」は四人四様の斜陽である。貴婦人の病死、直治の自殺、上原の残骸のごとき生、そして和子の恋愛もまた一種の自殺と云える。愛する人の子を生みたいといふ和子の欲望は、この場合はむしろニヒルである。既成の道徳を破壊しようといふ意志は、同時に自己破壊の破れかぶれの意志である。いかなる希望がこの作品にあるだらうか。四人はみな犠牲者だ。そして死の四重奏がかなでられる。この音楽が斜陽を貫く雰囲気だと云ってよい」。

奥野健男「作品研究「斜陽」小論」（『近代文学』一九五三・六）

「この作品は、作者の玩具箱をひっくり返えし、並べたてた感」。文体についても、女性一人称形式は中期の手法、直治の日記や遺書の形式は前期の手法、作品後半のテンポの違いは後期の手法と分析している。「この物語に登場する四人の主要人物は皆作者の分身であると云えます」。「直治は、前期の、上原は後期の作者自身」、「母とかず子は、中期の太宰の、精神の表裏」。「「斜陽」はこの四人四様の滅びの宴です。敗滅の歌です。」

長谷川泉「斜陽（太宰治）―現代文の鑑賞・その九―」（『解釈と鑑賞』一九五三・一二）

「没落してゆく貴族の生活と心理を描いた「斜陽」の中の救い、やがておとずれる朝日の光を含むものは、かず子の生き方である。彼女はすでに貴族ではない。彼女の背に負うものは落日ではな

い。没落し、破滅してゆく弱々しい斜陽の中に、僅に、明日の若々しい気息と新鮮な陽光を期待させる暁の光を弁別させるものは何かといえば、それは舊いモラルと闘い、生き方の革命を高唱する主体的な意志である。エゴを歪曲するものに対しては何物も仮借しない激しさである」。「斜陽」のかず子は、素朴な性的素朴さで、舊道徳をかなぐり棄てる革命を求め、それを意志的に実行した。人間性を抑壓し歪曲するものをはねのけ、ヴァイタル・フォースを高らかに前面におしだすのがかず子の生き方であった」。

臼井吉見「太宰治論」(『展望』一九五四・七)

『斜陽』は没落貴族の家庭を背景にして、老母と姉と弟と小説家と四人を登場させ、だいたい姉の日記と手紙を通して語られる、にぎやかなロマン」であるとする。

小山清「名作鑑賞「斜陽」」(『文芸』一九五五・六)

登場人物について「ほかの人物はみなかず子をとおして描かれている。作者が強く主張しているものも、云うまでもなくこのかず子である」。

ドナルド・キーン「日本と太宰治と「斜陽」」(『文芸』一九五六・一二)

「家族間の信頼は殆ど不可能なために、和子とその母及びその弟は、ほとんど互に明白に意志を疎通し合うことなく生活している」。

三枝康高『太宰治とその生涯』(現代社　一九五八・九)

「いうまでもなく直治とかず子は、作者自らの二つの分身と考えられるが、この二つをつなぐ「作家」上原は、この作品ではもはや疲れきった残骸にすぎない」。「女主人公のかず子もまた、自らの運命にたいしてプロテストする。「人間は来いと革命のために生れて来たのだ」―かの女のこの結論は人生観でも何でもない、世俗にたいするプロテストなのである」。「直治は前期、上原は後期の作者自身であり、母とかず子は中期の精神の表裏を現わしていて、そのエッセンスが強調されて終末へ急いでいる」。

また、一九五〇年代には津島美知子や太田静子の当時の回想が発表されている。

一九六〇年代

田中保隆「「斜陽」の基底」(『解釈と鑑賞』一九六〇・三)

「「ほんものの貴族」は、実は爵位なんかに関係がない。それは、およそ世俗の「悪」、傲慢、虚栄、詐偽、卑屈と対照的である。「無心」で、なにものをも疑わず、気取らず、天衣無縫である。既成の正式礼法などは無視するが、しかも優美で気品がある。」「太宰は、心正しく美しい「滅亡の民」の典型を「斜陽」の母に造形しようとした。」「「斜陽」は、しかし、滅びの美しさを讃えるために書かれたのではない。作者は滅びの美しさに心惹かれながら、それを踏み越えるものを求めている。「斜陽」は、「滅亡の民」の母体に生れながら、それを踏み越えようとする人々の苦悩の物語と言ってもよかろう。」「太宰という作家を考えると、太田静子の「日記」がなかったら、「斜陽」のテーマはもつと違った形で表わされただろう」。

鳥居邦明「斜陽―太宰治―」(『国文学』一九六三・九)

「主題として最も強く表面に出ているのは、主人公かず子における「道徳革命」すなわち古い道徳を破壊し、みずからの身と魂を滅ぼすことによる新しい人間性の再生であろう。この主題は敗戦後の太宰が「パンドラの匣」「冬の花火」「春の枯葉」などの作品を通じて追求して来た自己肯定的

姿勢の線上にある。そしてその裏側をなすものとして、直治の手記・遺書を中心にした黄昏の情緒の自己否定的姿勢があり、この主題は初期以来の太宰文学の底流をなしているものである。それら二つのものの背景として金木の生家から持ち帰った「桜の園」のイメージがある」「それぞれに観念的、主情的、現世的であるこの三つの主題はいずれも太宰自身のものであったことは紛れもないが、極めて困難なものであり、それと相俟って、素材となった太田静子の日記が、太宰の作品構成の意識の下を潜り抜けて生のまま作品中に姿を出している面もないとは言えない。」「そういう構成の乱れを辛うじて支えているのは主人公の独白という文体である。太宰の全作品において独白体の占める割合は異常に大きいが、太宰文学の文学性が、客観的リアリティの方向にはなく、客観的には脈絡のない対象を同一の主体において受け止めることによって、その主体の人間性の内部においてのみリアリティを持つような方向に働いていることを考えねばなるまい。」

小笠原克「斜陽―その運命への素描―」（『国文学』一九六七・一一）

『『斜陽』は、まさしく新しい時代の曙光の中にあって、ただちに黄昏を感受した者の、〈満身に斜陽を浴び〉た姿であった」「『斜陽』にあらわれた“斜陽”とは、天皇の地位の変化を憂い悲しむという、日本的にプリミティヴな心情の位相であった。」

柳富子「「斜陽」について―太宰治のチェーホフ受容を中心に―」（『比較文学年誌』一九六九・三）

「太宰が「桜の園」においてチェーホフに学んだのはこの滅びの側に目を据え、そこから目を放たず描く方法であったろう。」「太宰が焼かれたへびの卵と火事によって主人公の滅びを象徴している」。「チェーホフは「かもめ」では、殺されたかもめによって主人公の滅びを象徴」。

一九七〇年代

佐藤泰正「〈斜陽〉における太宰治―危機における美意識」（『太宰治論』　翰林書房）（『国文学』一九七〇・六）

「「斜陽」は二人の「マリア」（あるいはふたつの「聖母子」）の物語とよぶことが出来るかもしれない。ひとつは言うまでもなくかず子とその子であり、いまひとつはかず子の母と直治である。「直治が上原の妻への想いを、その「正しい愛情のひとがこひしくて、したはしくて」という時、その恋情はもはや肉の情念を脱した、一種中性的な、抽象化された何かであり、母性への思慕と同質同根のものであることは明らかであろう。」

東郷克美「太宰治とチェーホフ―『斜陽』の成立を中心に」（『解釈と鑑賞』一九七二・一〇）

「「斜陽」の世界には根本的にはなんの対立も葛藤もない。あるのは作者の性急で感傷的な自己告白だけである。だから、「斜陽」の四人の登場人物はすべて作者の分身であるという説はまったく正しい。」「たしかに作者はかず子によって既成道徳への反抗を表現しているといえるかもしれない。しかし、その「道徳革命の完成」もたかだか「悪徳」作家の私生児を生むことでしかない。」

浦田義和『『斜陽』論―母・娘の葛藤および〝子〟の位置」（『太宰治　制度・自由・悲劇』　法政大学出版局　一九八六・三）（『熊本大学国語国文学９』一九七三・一二）

「「犠牲者。道徳の過渡期の犠牲者。あなたも、私も、きっとそれなのでしょう。」という「上原」と「かず子」、それに「小さい犠牲者」である「直治」の共通の〝子〟、それは、まさに、〝罪〟のイメージなのであろう。この〝罪〟を、正しい愛情の人で、家庭をつつましく守っている「上原の妻」に抱かせることによって、「かず子」は、可能な限りの反抗を示しているのである。正しい愛情の人、に〝罪〟を自覚してもらいたいのである。これは、太宰の「かず子」に託した、「世間」に対する、せいいっぱいの反抗である。」

鳥居邦明『『斜陽』』（『作品論太宰治』双文社出版　一九七四・六）
「第一の主題「没落への挽歌」を全存在をもって体現しているのは母である。」「第二の主題「かず子の復活」という点から見るならば、かず子の反抗の対象であるべき母が、一面でかず子の良き理解者であるということになって、かず子の反抗がそれだけ的を失った弱々しいものとなっているのである。」

東郷克美「死に行く『母』の系譜―敗戦後の太宰治」（『太宰治の世界』　（『太宰治という物語』筑摩書房　二〇〇一・三）　冬樹社　一九七七・五）
「「恋」とは存在の衝迫であり、それに忠実に生きようとするとき、それを拒む一切の既成概念を破壊してやまぬ「革命」となる。」

三好行雄・梶木剛・東郷克美・渡部芳紀「共同討議『斜陽』をめぐって」（『国文学』一九七九・七）
梶木「女がよい子を生むための革命というのは、大変な価値転倒になるわけで、もしこの点が見落とされると「斜陽」の評価は大いにまちまちになってくると思うんです。」
東郷「本質的に母のやさしさというのはいわば道徳を超えているわけでしょう。すべてを受け入れるというか、すべてを許容するという意味で、母性は本来的に不良、あるいは道徳を超えた存在であるわけですね。」

渡部芳紀「『斜陽』試論」（『近代小説の読み方2』（『太宰治　心の王者』　洋々社　一九八四・五）有斐閣　一九七九・九）
「この作品には二つの主題があると考えられる。一つは、作品の縦軸、プロットの展開の上に主として託されている。主人公かず子の変貌を通して、〈恋と革命〉のために、力強く生きていく積極的主題である。他の一つは、作品の横軸、主人公かず子、その弟直治、姉弟の母親、かず子の恋人上原の四人の人物に四様に託された主題である。」「そのうち、かず子が、第一の主題に深くかかわって異質だとすれば、他の三人を中心としたこの第二の主題は、『斜陽』という題目とも通じ、〈滅びの宴〉（奥野）であり〈没落への挽歌〉（鳥居邦明「斜陽」、東郷克美・渡部芳紀編『作品論太宰治』）ともいえる主題である。

須田喜代次「『斜陽』論ノート―朝を迎えるかず子を中心に」（『近代文学論11』一九七九・一一）
「作品の叙述を追う限り、二章を書くかず子の執筆時間は、三、四章と同じく昭和二十一年の夏ということになるはずなのだ。」「作中のかず子は、二章から三章へと同じ視点に立って語っていることになるわけなのである。」「第一章末尾の一文は、かず子の行動宣言とでもいうべきもの」「「女がよい子を生む」こと、「こひしいひとの子を生み、育てる事」というものこそ、まさに自然の情以外の何ものでもないはずだ。それは倫理以前のものである。そして、倫理を越えたものである。いわば正しい情とでも言うべきものだ。

一九八〇年代
江種満子『『斜陽』の女性―かず子を中心に―」（『解釈と鑑賞』　一九八一・一〇）
「「斜陽」は五章でひとまずワンサイクルめぐり終える。母とかず子の裏切りのドラマとして。つぎに新しく、かず子と上原夫人のドラマが展開するはずである。上原をめぐる愛人と妻、かず子と上原夫人とが対位されつつ、上原夫人の聖母子化を完了したうえで、かず子の聖母子化が試みられる。」「私は、勝ったと思ってゐます。／マリヤが、たとひ夫の子ではない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあったら、それは聖母子になるのでございます。」（八）かず子のこの断言は、上原

夫人の聖母子化を介さないでは生れてこない。いわば上原夫人の聖母子像を描くことによってはじめて、かず子の裏切りが、裏切りなどというひけ目っぽい陰気さから解き放たれ、「ピエタのマリヤ」となった母のゆるしを第一階梯とする聖化の道をさらに昇りつめ、自らが輝く許しを胸に抱いた聖母子たらんと欲するにいたるのである。」

社本武「『斜陽』と『斜陽日記』―私小説の変貌―」（『信州白樺』　一九八二・一〇）

「かず子に視点をおき、かず子によって認識された〈自立の世界〉として読むべきです。」

瀬戸内晴美・前田愛「『斜陽』と太宰治」（月刊カドカワ　一九八三・九）

瀬戸内「文体も三つか四つ、だんだん移っていきますね。太宰の得意とする文体を全部集めている。そういうところがおもしろい。」「太宰の中には。日本の文学の伝統の一つの「かるみ」というものをちゃんと紹介した人でしたね。」

大森郁之助「『斜陽』結尾の混乱―直治の恋人の設定をめぐって―」（『札幌大学女子短期大学部紀要』一九八七・二）

「ただ上原の妻に抱かせるだけなら、「捨てられ、忘れかけられ（上原に）た女の唯一の幽かないやがらせ」として、単純だが判りやすかろう。」「だが、直治の子と称すれば上原自身は妻の面前で免責されたことになり、通常の単純ないやがらせとしては無意味な細工という以上に意味の滅殺である。」

千葉宣一「『斜陽』試論―『斜陽日記』の剽窃をめぐる問題」（『解釈と鑑賞』一九八八・六）

「「斜陽」の独創的価値の構造やその意義を解明するためには、何よりも先ず、基礎作業として、「斜陽」と太田静子の「斜陽日記」との貸借関係の分析が必要である。」「創作動機を始め、主題の発展、構想の展開、ヒーローやヒロインのコア・パーソナリティーや運命の設定をめぐって、「斜陽日記」は、いかなる位置を占め、どのような役割を果たしたのであろうか？」「〝斜陽〟は単なる落日の意ではなく、新しきものに圧倒されて、古きものが没落していく意である。」

一九九〇年代以降

高田知波「『斜陽』論」（『国文学』一九九一・四）

「『斜陽』の特色は、この《出来事》の時間とかず子の《語り》の時間とが、単純な進行形でもなければ単純な回想でもないダイアレスティックな関係を形成しているところにある。」「「道徳革命」の実体はほとんど問題ではなく、かず子が自己表現としての「革命」という言葉を手に入れたという点にこそ、意味の中心があるのである。」「かず子が本当に求めていたものは生身の上原でも「赤ちゃん」でもなく、「革命」実践者として自己表現するための根拠にほかならなかったという作品の仕掛けである。」

島村輝「《書くこと》への意志」（『太宰治』洋々社　一九九二・六）

「このテクストは、「書く」行為の痕跡を何重にも写し取り、組み換えることによって成り立っているともいえるのである。」

榊原理智「語る行為の小説」（『日本文学』　一九九七・三）

「語り手としてのかず子と語られている対象としてのかず子にまず二分することにしよう。これは一人称の回想的手記の最も単純化された構造モデルである。この場合、語り手はいくらかの時間を経て過去の自分を対象化して語っているのであるから、語り手が現在、対象が過去ということに

なる。」「しかし、『斜陽』は単純な回想的手記の形をとっていない。おおまかに言って章ごとに語り手の時間位置が異なるのである。」

相馬正一「『斜陽日記』のオリジナリティー」（『国文学』一九九九・六）

「作中に描かれている一人称の〈静子〉は現実の太田静子ではなく、作者によって虚構化された理想の姿である。」「『斜陽』全八章のうち、純粋にオリジナルな箇所は七章の全文と三章の中の〈直治〉の「夕顔日誌」だけということになる。」

中村三春「斜陽のデカダンスと〝革命〟」（『国文学』一九九九・六）

「かず子の手記なるものは、いかに手記のように見えたとしても手記ではなく、手記形式の物語部分に過ぎない。」「虚構の貴族の代表としての母の死が、このコミュニティの喪失を表している。あるコミュニティを否定し、別のコミュニティを打ち立てることが、すなわち「革命」だからである。」

安藤宏「文献学の中の太宰治」（『国文学』一九九九・六）

「〈恋と革命〉という言葉は当初から必ずしもキーワードとして用意されていたわけではなく、むしろ原稿を推敲し、言葉を反芻するうちに、次第に煮詰められ、醸成されていった語である事情をうかがい知ることができるだろう。」

安藤宏「太宰治における〝滅びの力学〟」（『解釈と鑑賞』二〇〇一・四）

「『斜陽』の語りは全てが終わった時点からの統一的な回想ではなく、事件の進行と共に経緯を語っていく現在進行形の形がとられている。従って読み手は結果論的なかず子の自己分析ではなく、彼女の認識が変容していく過程そのものを追いかけていくことができるわけである。」

山崎正純「『斜陽』」（『国文学』二〇〇二・一二）

「「上原」の妻の絵画のようなカットの中に、「直治」（実は「かず子」）の私生児を描き加えることによって、近代が近代の自意識によって緊縛される以前のヒューマニズムの完成を願ったからである。」

第三章　作品の周縁と主題としての「滅び」

第一節　作品の同時代について

時代状況と同時代についての言説

『斜陽』は、一九四七（昭和二二）年に刊行され、初版一万部、再版五千部、三版五千部、四版一万部と増刷され三万部という人気を得、太宰は流行作家となった。『斜陽』が戦後という苦境の状況にもかかわらず、多くの人に受け入れた。

かず子たちが、「東京の西片町のお家を捨て、伊豆のこの、ちょっと支那ふうの山荘に引越して来たのは、日本が無条件降伏したとしの、一二月のはじめ」である。そして、かず子が上原に送った最後の手紙の日付は「昭和二十二年二月七日」である。

『斜陽』はかず子たちの一九四五（昭和二〇）年一二月から四七年二月までの出来事を軸にして描かれている。『斜陽』に描かれる時代と『斜陽』の読者が経験した時代は重なっている。『斜陽』の時代と読者の時代は同時代で言ってよいだろう。『斜陽』における時代は作品と読者の双方に関わっている。

戦後という時代は『斜陽』のそれぞれの人物のもつ思想や思考に関わっている。また、『斜陽』を受け入れた当時の読者との関わりもある。

まずは、『斜陽』をとりまいている戦後という時代状況と言説をみていきたい。

人々は、「玉音放送」で終戦を知り、どのように終戦を受け入れたであろうか。

歴史学研究会『日本同時代史1　敗戦と占領』（青木書店　一九九〇年九月一日発行）

日本人で敗戦を喜ぶことができたのは、マルクス主義や自由主義の思想をもった年長の世代の人たちである。彼らはなんらかの程度で世界的な視野をもっており、敗戦とともに主体的な行動を開始できたわけではないが、ともかく戦後まで生き延びえたことを喜んだのであった。

敗戦にもっとも大きな衝撃を受けたのは、戦時下の社会しか知らず、皇国臣民教育を叩きこまれた青少年たちであった。彼らにとって日本の降伏はその想像を越えた事態であった。しかも敗戦後の大人や教師たちの、これまでと打ってかわった発言や行動は、彼らの不信感をさそうものであった。

これによると、年長の世代は敗戦を喜ぶことができた。それは、世界的な視野をもっていたために、個人の人間性を大事とする思想があったのではないかとしている。一方、青少年たちにとっては、戦時下の社会しか知らなかったために、衝撃が大きかった。他の社会の姿を想像することが難かった。さらに、敗戦後に大人や教師の発言や行動が変わったことは、身近な人に対する不信感となり、人間不信をも感じたことであろう。敗戦の受け止め方が世代という面だけでも違っている。

終戦後、ＧＨＱマッカーサー総司令官は、「民主化に関する五大改革、すなわち婦人の解放、労働組合の結成の奨励、学校教育の自由主義化、秘密審問司法制度の撤廃、経済制度の民主主義化の必要を指摘」[二]する。このような民主化政策のなかで、「経済制度の民主主義化」は財閥解体や独占禁止法、農地改革と進んだ。

ＧＨＱ主導により新しい制度づくりが行なわれていくことになるのだが、人々にとっては終戦から

二　中村隆英『昭和史Ⅱ』（東洋経済新報社　一九九三年四月三十日発行）

間もない時である。当時の人々の内面について見ていきたい。

歴史学研究会『日本同時代史１　敗戦と占領』（青木書店　一九九〇年九月一日発行）

哲学者の出隆は、戦争末期の国民の状況を評して「自己喪失」していると述べている（『出隆著作集』第三巻）。そこにはもっぱら国家の物理的強制と、窮乏による経済的強制に突き動かされるばかりで、未来に連なる自主的な計画性をもった生活というものは存在していなかったといえよう。「終戦」という実感は、時代状況に対する主体性を欠いた、国民のこうした「自己喪失」に根ざしたものであった。だからこうした国民が「自己」を再発見したとき、はじめて「戦後」というものがやってくることになる。

人々にとっては、戦後末期から将来を見据えた生活は存在せず、終戦の際も自己喪失状態であったという。これは、戦争により人々が個としての主体性を持つことができなかった、持っていなかったことを指す。終戦がすぐ戦後というものではなく、それぞれ個として主体性を認識できたときに戦後を認識できるというわけである。つまり、ＧＨＱ主導によって新たな制度が示され、新しい社会が出来上がっていく。しかし、人々の中にはすぐ受け止められないことでもあった。

歴史学研究会『日本同時代史１　敗戦と占領』（青木書店　一九九〇年九月一日発行）

しかし全体として見ると、多くの国民にとって自由は、反抗も闘争もなしに一方的に与えられたものであった。そしてこの与えられた自由は、戦時中に禁圧されていた、おしゃれからジャズに及ぶあらゆる私的なものを享受する自由として開花していくことになる。だがそれでもなおこの時代においては、私的な自由への没頭することの裏には、戦時中の抑圧に対する反発の感覚がこめられていた。また物的条件の乏しいなかでは、私的な自由の享受のなかには、生き生きとした活力がはらまれていたといえよう。

新しい制度、ここでは自由というものが戦時下に禁圧されていたため、戦後自由が開花していくまでに時差があった。戦時前の社会を体験の有無に関わらず、戦時中の禁圧の与えた影響があった。その影響による自由の開花の時差、また戦時前の社会を体験の有無という世代の違いによる個の差による時差があった。

人々は新しい制度、そして自由を享受していくのであるが、新しい制度によるさまざまな問題も存在する。そこには人々新しい制度や自由に対する見方やその陰にある力がからんでいる。

歴史学研究会『日本同時代史１　敗戦と占領』（青木書店　一九九〇年九月一日発行）

国家の没落は、その国家と結びついていた華族、軍人、財閥、大地主などの没落をも意味した。また国家によって保証されていた学歴などの権威の低下も意味した。そのため人々は、物質生活上で窮乏平準化していっただけでなく、権威や精神的価値の保有の点でも平準化していくことになる。伝来の財産も地位も失われるなかで、個々人はその身についた肉体的・精神的能力にだけ頼って生きていくことになった。またこのなかで唯一信じられる価値として、金銭・物質万能の風潮が風靡していくことになる。

新しい制度により、特権階級が無くなった。それはこれまでの権威が有効性を失い、人々にとって身分的・経済的な面で平等になることである。特権が無いということは、これまで特権を有した人、有さない人両方に、これからは自己の肉体的・精神的能力を頼るべきものと示すことになる。

また、終戦から新しい社会への移行期はまさに社会は混乱していた。無政府状態の時期もある。

その最大の特徴は、近代日本史上空前の規模での無政府的状況の出現にある。そこでは各個人は、自己の欲望の実現のために全く自由平等な主体として、無規制のなかで向かい合っているのである。窮乏化のなかで、ポッカリ花開いた自由平等の無政府的状況は、各個人の肉体的欲望と精神的・文化的欲求をいっきょに解放するものであった。ここに解き放たれた欲望実現のエネルギーは、旧権威の破壊と結びついて爆発的なかたちで展開していった(猪野健治編『東京闇市興亡史』)

終戦を迎え、人々は無規制の状況となる。そこでは、社会制度による自由とは別の自由を経験している。終戦後の混乱期、新しい社会へと移行していく過程では社会的統制が弱まり、戦時下の強い統制の反動もあり、人々の欲望や欲求のエネルギーが大きさを増している。そのエネルギーの矛先が旧権威の破壊に対して向けられたということである。

これらのことをまとめると、人々はこれからは平等であり、自己の肉体的・精神的能力を大事とする思考が高まった。そして、自由のうねりのなかで人々の欲望や欲求のエネルギーが増大し、それが旧権威の破壊に対して向けられたということである。

新しい制度により人々は自由と平等を手にいれていくのだが、終戦後の混乱期から新しい社会への移行期においては、人々は自由と平等をどのように感じていたのかを見ていく。

歴史学研究会『日本同時代史1　敗戦と占領』(青木書店　一九九〇年九月一日発行)

むろん自由平等の状態の出現といっても、この時代のそれは外発的な民主化ということに照応して、主に外的拘束の撤廃や社会的地位の平準化として実現されたものであった。だからそれは必ずしも、人間の自主性を尊重する考え方が身についていったことを意味するものでもないし、基本的人権の一つとしての平等観が十分自覚されていたわけでもない。つまり自由平等の実現といっても、おもに外的なそれにとどまり、未だ自由平等な社会を創り出し支える主体が成熟していたわけではないのである。

しかしこうした無政府的状況は、逆に国家の制度や人間の社会の秩序はどんなものであるべきなのかを、根本的に考える想像力を生みだすものであった。しかもその未来の秩序への構想力は、戦時中の自己とは全く異なった新たな人間的な生き方を模索する志向と強く結びついていた。もちろん現実の焼跡・闇市状況は、エゴイズムの跳梁する醜くく貧しい世界でもあった。しかしそこには、ちょうどあらゆる悪徳が世界に飛び散ったあとのパンドラの箱のように、希望だけは確かに残されていたのである。

ＧＨＱ主導の新しい制度は、終戦直後には人々にとって一方的に与えられた制度であり、実感の薄いものであった。人々にとって実感されていたのは、体制の崩壊とそれによる無政府的状況の中での生である。戦時中まで人々を支えていたものが無くなり、無政府的状況の中で生そのものを模索する。その中で生きるということが答えとなる。戦後の混乱期の中で生きることは、倫理などとはかけ離れたエゴイズムの満ちた世界に足を踏み入れることである。

当時の市民の目線での言説からも見ていきたい。

鴨下信一『誰も「戦後」を覚えていない』(文春新書　二〇〇五年十月二十日発行)

ぼくは戦後日本の、特に終戦直後の日本の基調音となったものの重要な一つは〈不公平〉という感覚だったと思う。この感覚が、戦後の不安感、危機感、あるいはイライラ感や暴力衝動の根本にあった。すべてはそこから生じたのだ。

戦死した人間と無事で帰った人間、抑留された人間と帰国出来た人間、戦犯に指定された人間

と逃れた人間、闇で儲けた人間と儲けられなかった人間、……何もかもが公平でなかった。餓えている人間とたらふく食べている人間、着るものがなく震えている人間とぬくぬく着ぶくれている人間……そして焼け出された人間と焼け残った人間。

たまさかそのとき運の良さそうに見えた人も、その後長いこと〈生き延びた者の罪悪感〉を味わうことになる。おそらく日本人はこのSurvivor's Guiltの人一倍強い民族にちがいない。

新しい制度としての自由と平等はあくまでも制度的なことであり、市民においては実感がないことがここからも窺われる。無政府状態的な状況下で人々はとにかく生きることであった。自由ということを見ると、社会制度に支えられた秩序と倫理のある自由ではなく、悪の暗躍やエゴイズムを含む自由である。制度では平等とはいっても、現実として不公平なことばかりであり、すべてが公平＝平等というものではなかった。新しい制度で謳われる平等は遠くで囁かれているものであり、現実として不平等ではないことが周知のことのように感じられたであろう。

倫理などとはかけ離れたエゴイズムの満ちた世界で生きることの中には、生きるために止むを得ないこともあり、そこに倫理や道徳などを持ち出していられない。

人々は、様々な罪悪感を内に詰め込み、生きるためにそれが外に出ないようにしながら必死に生きていた。必死な日々の生の中で、必死に生きることでいつかはという希望や実感できる自由と平等が来る希望を微かな望みとしてあったのではないだろうか。

第二節　貴族について

第一項　華族制度

かず子一家は貴族である華族としての面も描かれる。かず子一家が持つ貴族という一面がそれぞれの人物にとって重要な位置を占めている。ここでは華族とはどのようなものであったのかについておさえていきたい。

直治がかず子に向かって言った言葉の中に〈爵位〉や〈華族〉が出てくる。〈華族〉制度が戦後廃止されるのだが、〈華族〉についてここで整理をしたい。

小田部勇次『華族　近代日本貴族の虚像と実像』[二]より摘記する。

華族の成立

一八六九年華族設置　公卿・諸侯の称を廃して「華族」に統一。一般に公卿から列せられた者は「公家華族」、諸侯から列せられた者は「武家華族」と呼ばれた。

一八八四年華族令制定　公・侯・伯・子・男の五爵を制定。

「選ばれた階級」の基盤構築

一八六九年に華族が設置されてから、一九四七年に廃止されるまでの七十八年間に華族と称されたのは一〇一一家ある。華族の数は、新たな叙爵者がいたり、爵位を返上する者がいたり、あるいは婚姻や養子縁組による移籍があったりと、時期により変動が激しく、同時期に一〇一一家あったことはない。

公・侯爵家の数が伯・子・男爵家と比較するといかにも少ない。公爵家は華族の中でも最上層であり、天皇に近い選民集団であった。

二　小田部勇次『華族　近代日本貴族の虚像と実像』三（中公新書　二〇〇六年三月二十五日発行）

日本的「貴族」の終焉――敗戦・戦後

華族たちにとってアメリカに敗れる以上に危惧したのは、天皇を頂点とする日本の体制が覆ることだったのかもしれない。

敗戦時、九二四家およそ六〇〇〇人を数えた華族は、その人数から八月十五日の迎え方は、もちろん多様であった。あえて言えば、近衛文麿や徳川義親など、権力に近い華族たちにとっては、体制維持への危機感が強く、権力から離れれば離れるほど、悄然としたとでも言えようか。もはや彼らには華族制度というものより、自らの生活の維持という意識しかなかったのかもしれない。

爵位の返上は、一八八七年から一九四七年までに一二七家におよんだ。その理由は、没後に後継者を欠いた家、女戸主となり継承権を喪失した家、本家を継承して廃絶した家、襲爵手続きをしなかった家などさまざまである。

一九二六年以後、とりわけ四二年以後に圧倒的な返上があったことがわかる。太平洋戦争後、敗戦後に爵位返上が集中していることがわかる。

日本国憲法の施行によって華族制度は効力を失い廃止となった。

敗戦、そして新憲法の施行によって華族制度は廃止になるが、この時代を生きた華族にとって爵位返上以上に大きな打撃は、財産税の適用であった。華族のなかには経済的困窮を重ねて資産が乏しい家もあったが、資産家の華族も少なくなかった。財産税の課税率は高く、多くの資産家華族を直撃することになる。

一回限りの臨時税であったが、資産家の華族を直撃することになる。この財産税は、徴収の円滑化のために物納が認められ、邸宅や別荘を納める華族も少なくなかった。

華族制度による特権を失い、財産税課税によって生活基盤の多くを失った華族たちは、敗戦下の疲弊した日本のなかで、さまざまな職に手を染め生き残りを模索する。

これらのことで大事なところは、華族には爵位の種類があること。そして、それぞれの華族は爵位や家の事情により紆余曲折があることである。華族によっては裕福な家もあれば、経済的に苦しい家や爵位を返上をする家もあった。さらに、戦後の財産税課税は華族にとって大きな打撃となった。

その辺りの華族の戦後の様子について作品に次のところがある。

「戦争が終って世の中が変り、和田の叔父さまが、もう駄目だ、家を売るより他は無い、女中にも皆ひまを出して、親子二人で、どこか田舎に小奇麗な家を買い、気ままに暮したほうがいい」（一章）

「叔父さまのお話では、もう私たちのお金が、なんにも無くなってしまったんだって。貯金の封鎖だの、財産税だので、もう叔父さまも、これまでのように私たちにお金を送ってよこす事がめんどうになったのだそうです。」（二章）

まさに戦後の華族制度の廃止や財産税により、華族の生活は一層苦しくなっていく様子であり、かず子一家にもその影響が出ている。

さらに、華族制度についてかず子一家にあてはめて見ていく。

直治が「おれたちのように爵位だけは持っていても」（一章）と言っていることから、かず子一家は爵位を持っている。さらに、直治は「貴族どころか、賤民にちかいのもいる」と言う。爵位や華族の種類について、次の所説でもって見ていきたい。

浅見雅男『華族たちの近代』[一三]より次のことがわかる。

爵位については、

爵位は華族の戸主しかもてない。前述のように戸主とおなじ戸籍にはいっている者はすべて華族であるが、かれらは爵位をもてなかった（さらに爵位をもてない者のなかでも、華族としての礼遇をうけられる者とうけられない者の区別があった）。（中略）また、戸主であっても女性は爵位をもてなかった。

華族の特権については、

爵位をもてる、またそれを世襲できるというのは華族の権利の最たるものだが、それ以外にも華族はいくつかの特権があった。（中略）貴族院議員になれること、世襲財産を設定できること、天皇から一時金、年金をもらえることなどであろう。

と述べている。

まずは、かず子一家の場合、直治は「おれたちのように爵位だけは持っていても」と言っている。浅見氏によると、爵位は華族の戸主であり、戸主であっても女性は爵位はもてない。爵位をもっているのは直治になる。

また、かず子一家は華族といえども裕福な生活ではない。

華族の中でも、戦前に経済的困窮から爵位を返上した家もある。ごく一部の華族は富裕であったが、経済的に苦しい華族が多い。直治が「じっさい華族なんてものの大部分は、高等御乞食とでもいったようなものなんだ」と品性の問題としてこの言葉を口にしているが、華族の中にはこの言葉の経済的と同じ状況のものがあった。

華族には「公家華族」と「武家華族」がある。かず子にお母さまが奉公を勧める際、「あの宮様なら、私たちと血縁つづきだし、姫君の家庭教師をかねて、御奉公にあがっても（以下略）」とあることから、かず子一家は「公家華族」といえる。「武家華族」は世襲財産がある場合が多く、「公家華族」には世襲財産が少なかった。そのため「武家華族」には、土地の資産や金禄公債[一四]による富裕な金利生活をしていた家があった。それに対し「公卿華族」は「武家華族」と家録の差があり、金禄公債も少なかった。そのため、「公家華族」の多くは経済的に困窮していた。

華族といえども、格差が存在し爵位をもっているだけで中には経済的に困窮している家もあった。

第二項　『斜陽』に見る貴族

『斜陽』では、かず子一家は華族という貴族階級の設定である。当時の華族については「華族制度」の項で述べた。ここでは、『斜陽』に描かれている貴族の姿を考えたい。実際の貴族（華族）が持っている貴族性と『斜陽』の貴族の姿に設定されている貴族性は同一ではない。『斜陽』では、登場人物の振舞いや言動から「貴族」の姿を窺い知ることができる。

かず子一家の貴族性は上流貴族でイメージするような所作や言動ではない。かず子自身が「私のような高等御乞食」と述べ、直治も「おれたちのように爵位だけは持っていても、貴族どころか、賤民

一三　浅見雅男『華族たちの近代』（中公文庫　二〇〇七年三月二十五日発行）

一四　小田部勇次『華族　近代日本貴族の虚像と実像』（中公新書　二〇〇六年三月二十五日発行）
金禄公債は家録（明治初年に旧来の俸禄に代わり政府が給与した禄米）や賞典禄（戊辰戦争、王政復古の功労者に支給した米）に代えるために発行した公債。

にちかいのもいる」と述べている。かず子や直治は自分たちはほんものの貴族でないと感じている。かず子や直治はほんものの貴族はお母さまぐらいのものだろうと思っている。実際にかず子は食事作法でも正式礼法どおりにしているが、形式のみといったところである。

かず子や直治はほんものの貴族という姿を形式だけではないものだろうとする。かず子や直治が上流貴族でないためにほんものの貴族の姿を知り得ないのか、逆に上流階級的な貴族の生活の中で形式を重んじる貴族に対するアンチテーゼとして形式以外の部分の重要性を示す。形式の真似であればだれでも貴族となり得る。ほんものの貴族は体に染みついているかの如く、すべてが上品であることである。

直治が「じっさい華族なんてものの大部分は、高等御乞食とでもいったようなものなんだ。」と口にしている。実際の当時の華族では、大部分が経済的に裕福であったわけでない。また、その意味ではなく、直治は当時の大部分の華族の資質として問題視している意味もある。

本筋に戻すと、『斜陽』のかず子や直治に描かれる貴族性は一般的に言う上流貴族ではない。言動や振舞いを見ると直治の言葉の末尾の「だぜ」「じゃねえか」などやかず子の形式にとらわれた食事作法がある。直治の場合は、自身の脱貴族との闘いのためにわざと庶民的な言葉を使っているということも考えられるが、かず子の何でも丁寧語化しようというところはいささか上品とは違ったところがあり不自然である。形式によってつくりあげている貴族性が感じられる。かず子や直治は実際の上流貴族ではなく『斜陽』の世界における貴族と言うべきところであろう。

かず子や直治は上流貴族の資質性が弱い。かず子はお母さまのようなほんものの貴族ではなく、言葉遣いや食事の正式礼法のように形式だけの貴族であることを示される。直治は「しんの貴族は、あんな岩島みたいな下手な気取りかたなんか、しやしないよ。おれたちの一族でも、ほんものの貴族は、まあ、ママくらいのものだろう。あれは、ほんものだよ。かなわないところがある」と言っていることから、ほんものの貴族とはどういうものかという価値基準を持っている。かず子は直治の言葉によって、自分の感じるほんものの貴族像に力を得ている。

かず子や直治の考える貴族はお母さまに向けられている。かず子や直治によってお母さまにあるほんもの貴族の姿が示される。このお母さまをほんものの貴族と見ていくベクトルの意味については別問題としてある。

直治が「爵位があるから、貴族だというわけにはいかないんだぜ。爵位が無くても、天爵というものを持っている立派な貴族のひともあるし、おれたちのように爵位だけは持っていても、貴族どころか、賤民にちかいのもいる」と言い、それをかず子が引用している。それを考えるとかず子や直治の考える貴族は「爵位」の有無ではなく、素質としての面が貴族、さらに天性的な資質の有無にある。

田中保隆は次のように述べる。

「「ほんものの貴族」は、実は爵位なんかに関係がない。それは、およそ世俗の「悪」、傲慢、虚栄、詐偽、卑屈と対照的である。「無心」で、なにものをも疑わず、気取らず、天衣無縫である。既成の正式礼法などは無視するが、しかも優美で気品がある。」[一五]

一般的な上流貴族とかず子一家の貴族性は異なっている。

『斜陽』がかず子の眼を通して綴られたとすれば、客観性が薄くなる。かず子が自分たちの上流貴族の言動や振舞いをしているように描いたとしても、それが本当に上流貴族のようなのかはわからない。かず子自身が一般的な上流階級の姿を知り得ていたどうかはわからない。あくまでも、かず子と直治によって規定されるほんものの貴族が示されるだけである。

かず子一家を通して『斜陽』の貴族世界を詳しく見ていきたい。

一五　田中保隆「「斜陽」の基底」（『解釈と鑑賞』一九六〇・三）

かず子や直治はお母さまをほんものの貴族として見ていくのだが、かず子や直治とお母さまがどのように違うのか具体的に見ていきたい。お母さまはほんものの貴族だが、かず子や直治はほんものの貴族という自信が無い。かず子や直治が見るお母さまの具体的な姿を挙げる。

お母さまの食事作法について。

お母さまは、何事も無かったように、またひらりと一さじ、スウプをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スウプを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。ヒラリ、という形容は、お母さまの場合、決して誇張では無い。婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などとは、てんでまるで、違っていらっしゃる。（一章）

スウプのいただきかたにしても、私たちなら、お皿の上にすこしうつむき、そうしてスプウンを横に持ってスウプを掬い、スプウンを横にしてしたまま口元に運んでいただくのだけれども、お母さまは左手のお指を軽くテーブルの縁にかけて、上体をかがめる事も無く、お顔をしゃんと挙げて、お皿をろくに見もせずスプウンを横にしてさっと掬って、それから、燕のように、とでも形容したいくらいに軽く鮮やかにスプウンをお口と直角になるように持ち運んで、スプウンの尖端から、スウプをお唇のあいだに流しこむのである。そうして、無心そうにあちこち傍見などなさりながら、ひらりひらりと、まるで小さな翼のようにスプウンをあつかい、スウプを一滴もおこぼしになる事も無いし、吸う音もお皿の音も、ちっともお立てにならぬのだ。それは所謂正式礼法にかなったいただき方では無いかも知れないけれども、私の目には、とても可愛らしく、それこそほんものみたいに見える。（一章）

お母さまの食事作法は礼法からはずれている。しかし、お母さまはスウプもこぼさず、音も立てない。

スウプに限らず、お母さまのお食事のいただき方は、頗る礼法にはずれている。お肉が出ると、ナイフとフオクで、さっさと全部小さく切りわけてしまって、それからナイフを捨て、フオクを右手に持ちかえ、その一きれ一きれをフオクに刺してゆっくり楽しそうに召し上っていらっしゃる。また、骨つきのチキンなど、私たちがお皿を鳴らさずに骨から肉を切りはなすのに苦心している時、お母さまは、平気でひょいと指先で骨のところをつまんで持ち上げ、お口で骨と肉をはなして澄ましていらっしゃる。そんな野蛮な仕草も、お母さまがなさると、可愛らしいばかりか、へんにエロチックにさえ見えるのだから、さすがにほんものは違ったものである。（一章）

お母さまはお肉でも骨つきチキンでも礼法にはずれているが、かず子には野蛮には見えない。

お母さまは礼法を無視し、自分の食べたいがままに食べている。しかし、下品ではない。お母さまは食べ物をおいしく食べる方法で食べている。礼法などの形式から逸脱しているが、下品さや野蛮さを微塵も感じさせない天性のものがある。それに対して、かず子は「お母さまのようにあんなに軽く無雑作にスプウンをあやつる事が出来ず、仕方なく、あきらめて、お皿の上にうつむき、所謂正式礼法どおりの陰気ないただき方」をし、「本当に、手でたべたら、おいしいだろうな、と私は思う事があるのだけれど、私のような高等御乞食が、下手に真似してやったら、それこそほんものの乞食の図になってしまいそうな気もするので我慢している」。

お母さまは正式礼法を逸脱しても上品というほんものの貴族としてかず子や直治と差別化されている。

これについて石井洋二郎は次のように述べている。

つまり「お皿をろくに見もせずに」「あちこち傍見など」しながらスープを啜るとか、肉を「全部小さく切りわけ」たり、骨つきのチキンを「お口で骨と肉をはなして」しまうといった、本来ならば庶民的身体の持主にこそふさわしい「野蛮な仕草」が、母親にあっては逆説的に自由闊達な貴族的身体の正統性を証しだてる標識へと裏返るのだ。そして「お母さまがなさる」というフレーズが端的に物語っているように、この逆転を成立させるのはあくまでも「お母さま」という人物の存在それ自体であり、その所作は他の人間ではおよそ真似できないものして定義されている。一六

お母さまは貴族としての天性の素養を持っている。「野蛮な仕草」であっても「お母さま」がなさると野蛮ではない。それはお母さまはほんものの貴族だからである。かず子はほんものの貴族ではない自分と違う存在としてお母さまを見ている。このお母さまの振舞いと貴族について、石井はさらに述べている。

ここに見られるのは、貴族は貴族的な振舞いをするがゆえに貴族なのでなく、貴族であるがゆえにその振舞いが無条件的に貴族的なのだという考え方、いわば「貴族的本質主義」とでも言うべきものである。一七

本質的に貴族性をもっているのかという問題である。お母さまは本質的に貴族であり、形式的な礼法の有無に関わらず、上品さを表出させて食事ができる。このことは食事には限らない。

いつか、西方町のおうちの裏庭で、秋のはじめの月のいい夜であったが、私はお母さまと二人でお池の端のあずまやで、お月見をして、狐の嫁入りと鼠の嫁入りとではどうちがうか、など笑いながら話合っているうちに、お母さまは、つとお立ちになって、あずまやの傍の萩のしげみの奥へおはいりになり、それから、萩の白い花のあいだから、もっとあざやかに白いお顔をお出しになって、少し笑って、

「かず子や、お母さまがいま何をなさっているか、あててごらん。」

とおっしゃった。

「お花を折っていらっしゃる。」

と申し上げたら、小さい声を挙げてお笑いになり、

「おしっこよ。」

とおっしゃった。

ちっともしゃがんでいらっしゃらないのには驚いたが、けれども、私などにはとても真似られない、しんからの可愛らしい感じがあった。

けさのスウプの事から、ずいぶん脱線しちゃったけれど、こないだ或る本を読んで、ルイ王朝の頃の貴婦人たちは、宮殿のお庭や、それから廊下の隅などで、平気でおしっこをしていたという事を知り、その無心さが、本当に可愛らしく、私のお母さまなども、そのようなほんものの貴婦人の最期のひとりではなかろうかと考えた。（一章）

お母さまは食事作法にしても放尿にしても、自分のやりたいことを自由に行っている。しかも、その行為には上品さが感じられ、かず子はお母さまがほんものの貴族と思う。

お母さまの自由な振舞いと貴族性は本質的なものである。それを対比的なものとしてとらえていく

一六　石井洋二郎『身体小説論―漱石・谷崎・太宰』（一九九八年一二月　藤原書店）
一七　同右

のはかず子である。この時点ではかず子のお母さまのとらえ方には貴族の母娘という点がある。かず子にとってはお母さまの姿は参考であったり憧れであったりすることが考えれる。しかし、かず子はお母さまの貴族的なところはかなわない。かず子は階級としては貴族であるが、お母さまのような本質的なものは持っていない。そのため、「所謂正式礼法どおりの陰気ないただき方」とあるように食事作法では体裁を気にして、自分の思うままに食べることができないことがある。貴族であるがための不自由さを感じる。お母さまの自由さと対比して、かず子の不自由さが表れる構図となっている。これが、食事のことだけでなくかず子の人生全般において不自由さの影響が出てくるとなると、かず子にとっては耐えがたい。お母さまの貴族性と自由さの中に、かず子の現状況下に潜む不自由さを打破しなくてはならない問題がある。

しかし、お母さまとかず子という母娘の関係で特異なとらえがある。かず子はお母さまの骨付きチキンの食べ方が「可愛らしいばかりか、へんにエロチックに見える」。この特異な事態について石井洋二郎は、「貴族性の概念が往々にして女性的特質と結びつけられる」[一八]ことにあるとする。かず子一家は貴族階級であるが、お母さまを本質的な貴族性を持った人として差別化した場合に、さらに「二次的な差異をさらに導入する必要」[一九]があるためである。

このように一章において、かず子や直治とお母さまの差異化が図られている。かず子や直治の形式のみの貴族性である「にせもの」貴族とお母さまの「ほんもの」の貴族である。かず子一家という貴族家庭内において、その差異化がされている。言いかえると「庶民性」と「貴族性」である。まずはかず子の家庭内という閉鎖的な空間においてその差異が提示される。貴族家庭内においてその差異を際立たせている。母娘の関係で特異なとらえ方をするのもこの差異を際立たせる。

しかし、この差異はかず子や直治によってつくられていることをおさえたい。あくまでもかず子や直治がお母さまをほんものの貴族として価値づけているだけである。家庭内という狭い空間、お母さまは粗野な振舞いするが上品に見えてしまうことが関係する。かず子や直治のほんものの貴族とする論理は形式ではない本質的なものを大事とすることを一章において意味づけられている。かず子によって語られることは、よりかず子の論理が強く出ている可能性は否定できない。

この家庭内の差異が社会との関係の中でどのような意味を成していくのか。「庶民性」と「貴族性」ということでかず子や直治は苦悩する。貴族家庭内で差異と貴族階級と庶民という社会的な枠での差異に注目したい。

かず子や直治にとっては、お母さまとの貴族性の違いは大きいことである。「ほんもの」の貴族か「にせもの」の貴族かである。しかし、一歩外に出た社会では違うところがある。かず子や直治の側から見た場合と社会の人たち、『斜陽』では庶民の側から見た場合で違う。

二章のかず子が火事のお詫び周りをしている場面である。

「これからも気をつけてくださいよ。宮様だか何さまだか知らないけれども、私は前から、あんたたちのままごと遊びみたいな暮し方を、はらはらしながら見ていたんです。子供が二人暮しているみたいなんだから、いままで火事を起さなかったのが不思議なくらいのものだ。」（二章）

庶民の人はかず子たちは自分たちとは違う貴族として見ている。庶民の人たちのこのとらえは自然であろう。

次に同じく二章の戦時中の労働の場面である。

二度、三度、山へ行くうちに、国民学校の男生徒たちが私の姿を、いやにじろじろ見るように

一八 石井洋二郎『身体小説論―漱石・谷崎・太宰』（一九九八年一二月　藤原書店）
一九 同右

なった。或る日、私がモッコかつぎをしていると、男生徒が二三人、私とすれちがって、それから、そのうちの一人が、
「あいつが、スパイか。」
と小声で言ったのを聞き、私はびっくりしてしまった。
「なぜ、あんな事を言うのかしら。」
と私は、私と並んでモッコをかついで歩いている若い娘さんにたずねた。
「外人みたいだから。」
若い娘さんは、まじめに答えた。（二章）

かず子はスパイや外人みたいと思われている。庶民の人から見た場合、かず子は異質な存在と映る一端である。
また、かず子が上原の居場所を探し出し、「チドリ」でおかみさんとチエちゃんの会話の場面。

「ダンスのほうが、すきになったんですって。ダンサアの恋人でも出来たんでしょうよ。」
「直さんたら、まあ、お酒の上にまた女だから、始末が悪いね。」
「先生のお仕込みですもの。」
「でも、直さんのほうが、たちが悪いよ。あんな坊ちゃんくずれは、……」（六章）

この場面では、直治の人間性に対する評価が大きい。だが、上原の仕込みという上原を引き合いに出した上で、直治のたちの悪さを「あんな坊ちゃんくずれ」と言う。
上原の貴族意識も見ていきたい。

「僕は貴族は、きらいなんだ。どうしても、どこかに鼻持ちならない傲慢なところがある。あなたの弟さんの直さんも、貴族としては、大出来の男なんだが、時々、ふっと、とても附き合い切れない小生意気なところを見せる。」

「けれども、君たち貴族は、そんな僕たちの感傷を絶対に理解できないばかりか、軽蔑している。」（六章）

このように庶民の側からはかず子や直治は「貴族」という枠でとらえている。「貴族」と「庶民」という二項である。注目したいのは、「貴族」に対する見方はどれもよいものではない。「スパイ」や「外人」の中には、異質な存在や敵意が含まれている。
庶民の人が「ほんもの」か「にせもの」の貴族というレベルまで見ることはあまりなく、「貴族」としかみなさない。上原の「ほんもの」か「にせもの」の貴族という判断基準とかず子や直治の判断基準も異なっている。
かず子や直治の「ほんもの」の貴族ではない意識と庶民の人がかず子や上原をみる貴族意識にジレンマがある。

本質的に貴族性をもっているかということは、直治にも関わってくる。直治にとっては、本質的な貴族ということが自身を苦しめる要因となる。資質としての貴族性と身分階級的な貴族性がある。
直治の夕顔日誌から階級意識がわかるところを挙げてみたい。

しかし、僕たちの階級にも、ろくな奴がいない。白痴、幽霊、守銭奴、狂犬、ほら吹き、ゴザイマスル、雲の上から小便。（三章）

人から尊敬されようと思わぬ人たちと遊びたい。
けれども、そんないい人たちは、僕と遊んでくれやしない。（三章）

人間は、いや、男は、（おれはすぐれている）（おれにはいいところがあるんだ）などと思わずに、生きて行く事が出来ぬものか。（三章）

夕顔日誌から同じ貴族階級の人に対する減滅感、そして直治自身に選民意識がある。直治の選民意識は社会的なものがある。「人から尊敬されよう」「人間は、いや、男は」というのは、社会的な評価を意識しているものである。人間の本質は社会的評価で決まるものではない。一章の「爵位があるから、貴族だというわけにはいかないんだぜ。爵位が無くても、天爵というものを持っている立派な貴族のひともあるし、おれたちのように爵位だけは持っていても、貴族どころか、賤民にちかいのもいる」のところにある「爵位」という社会的身分によるものではないところにほんものの貴族を求めているところと同じ構造と言える。直治は身分階級という形式ではなく、人間の本質に価値を見ている。
自分で身分階級を否定的に見るが、その身分が常に自分につきまとう。その闘争は直治の遺書に具体的に見ることができる。

僕は、僕という草は、この世の空気と陽の中に、生きにくいんです。生きていくのに、どこか一つ欠けているんです。（七章）

僕は高等学校へはいって、僕の育って来た階級と全くちがう階級に育って来た強くたくましい草の友人と、はじめて附き合い、その勢いに押され、負けまいとして、麻薬を用い、半狂乱になって抵抗しました。（七章）

僕は下品になりたかった。強く、いや横暴になりたかった。そうして、それが、所謂民衆の友になり得る唯一の道だと思ったのです。（七章）

僕は、家を忘れなければならない。父の血に反抗しなければならない。母の優しさを、拒否しなければならない。姉に冷たくしなければならない。そうでなければ、あの民衆の部屋にはいる入場券が得られないと思っていたんです。（七章）

僕は下品になりました。下品な言葉づかいをするようになりました。けれども、それは半分は、いや、六十パーセントは、哀れな付け焼刃でした。へたな小細工でした。民衆にとって、僕はやはり、キザったらしく乙にすました気づまりの男でした。（七章）

僕はあの、所謂上流サロンの鼻持ちならないお上品さには、ゲロが出そうで、一刻も我慢ができなくなっていますし、また、あのおえらがたとか、お歴々とか称せられている人たちも、僕のお行儀の悪さに呆れてすぐさま放逐するでしょう。捨てた世界に帰ることも出来ず、民衆からは悪意に満ちたクソていねいの傍聴席を与えられているだけなんです。（七章）

直治には社会的身分としての貴族階級がつきまとう。庶民の中に入るとそれが浮き出てしまう。逆に上流貴族の中に入るとほんものの貴族でないために浮き出てしまう。つまり居場所がない。直治の言葉で言う「僕は、僕という草は、この世の空気と陽の中に、生きにくいんです。生きていくのに、どこか一つ欠けているんです」ということになる。
直治は貴族と庶民の間で闘争した。遺書の最後に「僕は、貴族です。」と残す。直治はほんものの貴

族ではないが、貴族階級の人間であったということになる。庶民の中に入れなかった。貴族階級と庶民いう身分形式、資質のある貴族と形式上の貴族という二つの闘争に勝ち得なかった。

高貴、とでも言ったらいいのかしら。僕の周囲の貴族の中には、ママはとにかく、あんな無警戒な「正直」な眼の表情の出来る人は、ひとりもいなかった事だけは断言できます。（七章）

直治のお母さまに対する貴族性、ここでは「高貴」という言葉であらわされるが、天性の資質であったことを確認したい。お母さまの振舞いは自由奔放な面があったが、上品であった。それは天性のものによるが、お母さまが気取ることなく自分に正直であったからこそである。お母さまの「高貴」性と洋画家の奥さんは「正直」という線でつながる。形式のとらわれない者が持つ美しさが直治にとって「高貴」なのである。形式と闘争した直治にとっては、輝いて見えたに違いない。純真で無垢な姿に憧れている。

直治はお母さまと洋画家の奥さんに共通性を「高貴」「無警戒」「正直」という言葉で見い出していく。ところが、「高貴」だから「無警戒」「正直」というのは一般的に断言できない。その逆も同じである。直治は純真で無垢なことを言おうとしている。ただ、「高貴」にお母さまも結びつけていることから、そこに貴族性が入っている。直治の論理によって貴族性と「正直」が結び付けられているが、お母さまの場合と同じにするには異和感がある。「高貴、とでも言ったらいいのかしら。」とあるように、直治自身も曖昧さを示している。

お母さまと洋画家の奥さんで違うのは、直治は洋画家の奥さんに恋をしているからである。直治の恋する思いにより洋画家の奥さんのやさしさを「正直」さととらえた。恋でとらえているためにそこに今までの直治の言う貴族性とは違うところがある。

第三節　滅びという見方について

『斜陽』では「滅び」が主題の一つとして論じられてきた。まずは、先行研究から「滅び」について言及されきたところを見ていきたい。

小原元「斜陽の挽歌　解体に瀕する太宰治」二〇

「宿命の不可知と、意志的自我とのきびしい対立を、対立のままに統一を欲することが、主体の分裂をはらんだ危機的様相」、つまり、「宿命を宰領とするがゆえの不透明の現実と意志的人間の確執に近代の悲運を見、すでに人間であることに宿命を見て、確執をそのものとして統一しようとする者の生にいどむ決闘」とする。また、蛇という象徴的手法については、「その神秘性が現実と直結する苦悩や絶望の印象を希薄化」されているとする。「郷愁、寂寥、絶望、虚無に、それなりの生をさぐろうとした四人の太宰治の分身のうち二人が解体した」とする。この二人はお母さまと直治であり、さらに「のこされた二人の男女の解体も遠からぬことであろう」として、この二人は上原とかず子である。つまり、四人の登場人物が終焉へと向かっていくことが示される。また、四人の登場人物が太宰の分身であるという点も注目される。

亀井勝一郎「作家論ノート　太宰治編」二一

「悲しく、凝った挽歌だ。戯曲性を巧みにとりいれた叙事詩」ととらえ、直治は「プロテストのために死ぬ。かず子はプロテストのために生きる。いづれも自分自身の運命に対してプロテストす

二〇　小原元「斜陽の挽歌　解体に瀕する太宰治」（『新日本文学』一九四八年一月）
二一　亀井勝一郎「作家論ノート　太宰治編」（『文学界』一九四八年六月）

るのだ。自分の身と心を滅ぼして。自殺と云えば、かず子の恋愛も自殺である」とする。そして、「四人四様の斜陽。死の四重奏。無頼派の悲しい祈祷」とし、挽歌とする。

亀井勝一郎「解説」[二二]

「「斜陽」は四人四様の斜陽である。貴婦人の病死、直治の自殺、上原の残骸のごとき生、そして和子の恋愛もまた一種の自殺と云える。愛する人の子を生みたいといふ和子の欲望は、この場合はむしろニヒルである。既成の道徳を破壊しようといふ意志は、同時に自己破壊の破れかぶれの意志である。いかなる希望がこの作品にあるだらうか。四人はみな犠牲者だ。そして死の四重奏がかなでられる。この音楽が斜陽を貫く雰囲気だと云ってよい」。

奥野健男「作品研究「斜陽」小論」[二三]

「この作品は、作者の玩具箱をひっくり返えし、並べたてた感」。文体についても、女性一人称形式は中期の手法、直治の日記や遺書の形式は前期の手法、作品後半のテンポの違いは後期の手法と分析している。「この物語に登場する四人の主要人物は皆作者の分身であると云えます」。「直治は、前期の、上原は後期の作者自身」、「母とかず子は、中期の太宰の、精神の表裏」。「「斜陽」はこの四人四様の滅びの宴です。敗滅の歌です。」

柳富子「「斜陽」について—太宰治のチェーホフ受容を中心に—」[二四]

「太宰が「桜の園」においてチェーホフに学んだのはこの滅びの側に目を据え、そこから目を放たず描く方法であったろう。」「太宰が焼かれたへびの卵と火事によって主人公の滅びを象徴している」。「チェーホフは「かもめ」では、殺されたかもめによって主人公の滅びを象徴」。

同時代評から小原元や亀井勝一郎が「滅び」、登場人物四人（かず子・直治・お母さま・上原）の「滅び」について提示している。

四人の「滅び」だが、「滅び」の定義について整理したい。お母さまは病で、直治は自殺で死を迎えることになる。死によって滅ぶということである。かず子と上原は死を迎えていない。これについて亀井勝一郎は「上原の残骸のごとき生、そして和子の恋愛もまた一種の自殺」ととらえる。上原は虚無感に覆われ「死ぬ気で飲んでいる」ことや喀血からいずれ死を迎えること、かず子は独善的で無謀ということで来たる結末として、死を迎えないだろうがかず子の行為や思想について自滅の意味と考えることは難しくない。

小原元は太宰の分身論として注目している。太宰自身の問題として「宿命」と「自我」との対決を見、「宿命」に対して勝ち得ることができないことを示している。

奥野健男はこの分身論を太宰という作家と作品の方向からとらえ、それぞれの時期の作家太宰が登場人物に表出されているという見方をする。

柳富子は「桜の園」に注目し、モチーフとして没落していくことがあり、「斜陽」内部では蛇の卵を焼く行為や火事が不吉なものとして暗示され、「かもめ」のニーナも出されていることから主人公の滅びが象徴されているとする。

かず子や上原を見るとかず子は道徳革命の継続を言ってはいるものの「犠牲者」という言葉を用いるなど以前のような意欲的な姿勢が感じられず、そもそも道徳革命そのものが独善的であり、上原は

二二 亀井勝一郎「解説」（『太宰治作品集』第5巻　創芸社　一九五一年五月）

二三 奥野健男「作品研究「斜陽」小論」（『近代文学』一九五三年六月）

二四 柳富子「「斜陽」について—太宰治のチェーホフ受容を中心に—」（『比較文学年誌』一九六九・三）

虚無と退廃そのものであり、将来的な生を感じることができない。

「滅び」について安藤宏は「いうまでもないのだが、人は一人で「滅ぶ」ことはできない。このことばはすでにそれ自体の中に「個」と共同体の問題を内在させているのであって、家、階級、国家といった概念の崩壊にいかに立ち会い、これを引き受けていくのか、という課題を避けて通ることはできない」とし、「おそらくマルクス主義的世界観における「階級」の問題と、戦時の運命共同体的な「国体」の観念とが、共に「滅亡」というテーマのもとに重ね合わされているところに『斜陽』の特異な性格があり、この二つのパラダイムの崩壊を「戦後」という状況そのものへの批判に転じてみせた点に、太宰文学の歴史的な役割を探る事ができる」[二五]とする。

お母さまにとっては、華族制度という戦中までの旧国家によって支えられた家や階級の崩壊の流れに不安を感じながらも旧制度とともに滅んでいった。直治は階級闘争の苦しみがあった。高等学校の時から階級がつきまとい、戦後の体制になっても直治は自分につきまとう階級に苦しむ。お母さまと直治は「滅び」の様は違っているが、貴族という共同体の中に根源的な「個」があったということである。

旧制度の共同体によって規定されている「個」の部分が、戦時体制によって「国体」として増幅され、戦後の旧制度の崩壊が制度の崩壊だけでなく、アイデンティティーの崩壊にも波及したということである。

しかし、旧制度で共同体に規定されていた「個」が新制度では「人間は、みな、同じものだ。」というすべてが同列の共同体組織ができあがり、その中に「個」が規定されていく。階級差は滅び、「個」のすべてを同じものとして扱うこの強力な制度は直治のアイデンティティーを脅かすものである。直治の遺書の中には、直治内部の「階級闘争」の苦しみが書かれる。新制度では平等になることは、直治の言う「民衆」になり得ることができる。しかし、これは制度上であり社会の視点で行なわれることである。個の人間性まで平等にする力は無い。少なくとも直治にとっては旧制度の下で作られた人間性は変えることができなかった。「人間は、みな、同じものだ。」ということは直治が民衆に入るには都合のよいものであるが、実際には直治を見る他者の目は違っていた。直治はこれまでの経験から、この平等思想に対してアンチテーゼを唱える。

> 人間は、みな、同じものだ。
> なんという卑屈な言葉であろう。人をいやしめると同時に、みずからもいやしめ、何のプライドも無く、あらゆる努力を放棄せしめるような言葉。（七章）

> けれども、この言葉は、実に猥せつで、不気味で、ひとは互いにおびえ、あらゆる思想が姦せられ、努力は嘲笑せられ、幸福は否定せられ、美貌はけがされ、光栄は引きずりおろされ、所謂「世紀の不安」は、この不思議な一語からはっしていると僕は思っているんです。（七章）

直治にとっての「個」は「貴族」という共同体に依るところがあり、そのため「貴族」共同体の滅びとともに、直治の「個」も滅び、それは直治自身の滅びとつながっていく。

> 僕は、僕という草は、この世の空気と陽の中に生きにくいんです。生きて行くのに、どこか一つ欠けているんです。（七章）

直治の「個」は「貴族」の中にあることを示している。「階級闘争」の結果である。自分の持つ「貴

二五 安藤宏「太宰治における〝滅び〟の力学―『斜陽』を中心に」（『国文学　解釈と鑑賞八三九号　二〇〇一年四月』

族」階級は脱ぎ捨てることができないものである。直治の共同体が「貴族」にあることは次のところからも窺われる。

しかし、「母」の生きているあいだは、その死の権利は留保されなければならないと僕は考えているんです。それは同時に、「母」をも殺してしまう事になるのですから。（七章）

直治はお母さまを「貴族」として定義している。同じ「貴族」として、生きる不安を持っている。直治が先に死を選ぶことは「貴族」の限界を示すことになり、「貴族」であるお母さまにも及ぶという考えである。別な見方では、直治内部のこととして自分が死を選んで「貴族」で生きることを否定することは、同じ「貴族」の母も否定することになる。

上原は新制度により貴族などの「階級」を無くなることをどのように受けとっているか。上原にとっての共同体は「ギロチン」の言葉を言いながら飲む人たちである。かず子の言葉を借りて言えば、「不良」の共同体である。「不良」という共同体の中に「個」を規定することで生きている人々である。さらにその人たちは新制度における社会という一つの大きな共同体に入り込めない、または拒否する共同体である。社会という共同体がある以上、「不良」の共同体は存在していくことができない。新制度は「平等」という言葉の下に、すべてを一つの共同体に置くからである。そのように考えると上原たちも戦後新制度の犠牲者であり、上原たちの共同体も滅んでいくことになる。

また違う方向で上原について見ると、上原は貴族がきらいと口にする。上原は田舎の百姓の息子で貴族に対するひがみを持っていた。上原の置かれていた「階級」は旧制度で言えば階層は下になる。上の階級に対して否定的な目を持ち、それと対峙する形になる。上層階級として「貴族」がある。上原はその反対側の「階級」である。階級構造は上層階級の「貴族」があって、下層がある。一方の貴族という「階級」が無くなった時、下層の「階級」の位置は新しく捉え直される。下層階級も不安定な状況になる。戦後新制度においてすべてが平等になった場合、下層階級も無くなる。上原の「階級」も失う。上原にとって対峙してきたものが無くなった場合、上原のアイデンティティーも滅びやすくなる。それが、上原の虚無や退廃につながっていると考える。上原は戦後新体制に力強く対峙しない。それは、上原のアイデンティティーと対峙するものが無くなったことと相手がとてつもなく大きい新しい社会という共同体だからである。上原は対決姿勢ではなく、今までの己の方針に従い、衰退していくことであろう。

お母さま・直治・上原を「滅び」という面で見てきた。それぞれの人物についてテキストの言説からみた。しかし、この三人の人物はかず子によって表されている。かず子にとって三人がどのような意味を持ち、どのように取り込んでかず子の論理を作り上げているのかを見ていく必要がある。後章でこの視点で論じる。

第四章　かず子という人物

第一節　かず子の語る（書く）行為に関する『斜陽』先行研究
～高田知波・島村輝・榊原理智・中村三春の論から～

これまでの『斜陽』先行研究において、かず子の成長や革命の意義について多く論じられてきた。歴史的な面や経済的な面からかず子が進んでいった過程を見ていく方法や道徳革命に焦点を当てる方法である。また、かず子が置かれた歴史的状況下において、社会に対して挑戦するような信念を貫く強さを持ち得ることができた女性の話として捉える論が出されてきた。

しかし、このテキストにおける「かず子」は結果的に自己の信念を貫いたが、かず子の思考は論理的であるのかという点については疑問が残る。かず子の行動は端から見ていると社会的にしっかりしているとはいえず、かず子の思考も緻密な計画性というよりも発想的なところがある。かず子の論理は社会において通用するものでなく、かず子内部で生成され、消費されている。

つまり、かず子の論理は独りよがり的な性格が強く、かず子の尺度によるものである。かず子が論理を作り出していく過程において、一貫した論理があるのかどうか、また、かず子の論理がどのように作られていくのか見ていきたい。

かず子は貴族一家の一員ではあるが、「ほんもの」の貴族ではないことを認識している。一方で一般的な社会性を備えた人物かというとそこには不安がある。かず子という人物は、貴族と民衆の間で浮遊する存在である。かず子は民衆にベクトルを持っていこうとしているが、思うようにならないと感じる時がある。しかし、民衆の側から見ればかず子の行動は庶民とは違うと感じられるものである。

『斜陽』におけるかず子は一般的な社会観念から見ると外れているところがあり、かず子の思考も変遷していて、論理も一貫しているとは言えない。

そこで、かず子という人物とともに『斜陽』テキストで語るかず子に視点を置き、かず子の論理の生成の仕方と論理の提示され方について見ていきたい。

このテキストは様々な種類のテキストから複雑な構成となっている。それぞれの断片からかず子の論理を読者は得ていくことになる。

かず子は『斜陽』の語り手であり、手記の書き手でもある。一章末の「恋、と書いたら、あと、書けなくなった。」とあることで読者はかず子が語り手であると同時に書き手であることを知り得る。この部分はストーリー展開上テキストの空所として機能していくが、かず子が語る行為（書く行為）を行っていることがかず子の論理の作られ方と作品全体においてどのように機能しているのかに目を向けていきたい。

そこで、かず子の語る（書く）行為についての論究として、高田知波・島村輝・榊原理智・中村三春の四氏の論がある。ここでは、紙面の都合上、高田知波氏の論を基に『斜陽』のテキスト構成について示す。

『斜陽』のテキスト構成

『斜陽』は、「かず子の手記」・「直治の夕顔日誌」・「上原への手紙」・「直治の遺書」というテキストから構成されている。高田知波[二六]の論を基に整理する。

『斜陽』のテキストを次の（A）～（D）と分類し、各章の構成も表わしている。

（A）かず子の手記
（B）かず子の書簡
（C）かず子の手記の中に引用された直治の日記「夕顔日誌」の一部

二六　高田知波『『斜陽』論―ふたつの「斜陽」・変貌する語り手」（『国文学』一九九一年四月）

（D）かず子の手記に引用された直治の遺書

全八章の内訳は、一、二章が（A）、三章が（A）と（C）、四章が（B）、五、六章が（A）、七章が（A）と（D）、八章が（A）と（B）という構成になっている。

（A）と（C）では受信者が想定されておらず、（B）と（D）は受信者が特定されている。

多様なテキストを用いて「書く」ことと「語る」ことを行っているかず子が作品において、どのような位置にあるのだろうか。

出来事の時間と語りの時間について、高田氏[二七]は、〈「斜陽」の特色は、この《出来事》の時間とかず子の《語り》の時間とが、単純な進行形でもなければ単純な回想でもないダイアレスティックな関係を形成しているところにある〉とし、

かず子の手記が日録の形式をとっていないことは明らかであるが、同時に、すべての出来事が終わった時点でまとめてそれを叙述している回顧録でもない。

とする。

語りの時間については、須田喜代次[二八]の先行研究において、次のようなことを論じている。

〈作品の叙述を追う限り、二章を書くかず子の執筆時間は、三、四章と同じく昭和二十一年の夏ということになるはず〉。

〈作中のかず子は、二章から三章へと同じ視点に立って語っている〉。

〈自然の情以外の何ものでもないはずだ。それは倫理以前のものである。そして、倫理を越えたものである。いわば正しい情とでも言うべきもの〉。

ここで、『斜陽』の語りの時間と出来事の時間を確認する。

一章は語りの時間は昭和二十一年四月のある日「スウプ」の日である。そこで語られる出来事は、「スウプ」の日のこと・「スウプ」の日の四、五日前のこと・「スウプ」の日の午後のこと・昭和二十年十二月のはじめのこと・昭和二十年十二月から昭和二十一年四月までの回想のことである。

確認であるが、一章はかず子の手記であり、かず子が書いている。

二章は語りの時間は昭和二十一年の初夏と考えられる。出来事は昭和二十一年四月の蛇の卵から十日後のこと・戦時中のこと・昭和二十一年初夏のことである。しかし、章末の「思うと、その日あたりが、私たちの幸福の最後の残り火の光が輝いた頃で、それから、直治が南方から帰って来て、私たちの本当の地獄がはじまった」は過去のことを振り返るニュアンスがある。

三章は昭和二十一年の直治の帰還から十日ほど後になる。出来事は直治の帰還の十日ほど後のこと・二十年前の頸巻きのこと・直治が帰還した日のこと・夕顔日誌・昭和十五年の上原との出会いのことである。三章はかず子の手記の中に直治の「夕顔日誌」が取り込まれている。

一章から三章では、語りの時間が昭和二十一年四月から初夏までと時間が動いている。かず子の手

二七　高田知波（同二六）

二八　須田喜代次『『斜陽』論ノート―朝を迎えるかず子を中心に』（『近代文学論１１』一九七九・一一）

記には過去のことが組み込まれている。

ここで、高田氏の〈手記における《語り》の現在を示す指標〉を見たい。

一章から三章までを次のように挙げている。

一章　昭和二十一年四月「スウプ」の日

二章　「スウプ」の日から五、六日後

「思ふと、その日あたりが、私たちの幸福の最後の残り火の光が輝いた頃で、それから、直治が南方から帰つて来て、私たちの本当の地獄がはじまつた」という、「けふ」を過去化するセンテンスが置かれているが、これはあとから書き加えられた後日記的部分として手記の時間の重層的性格を示すものと考える」。

三章　直治の帰還から十日ほど後、かず子がセエタを編んでいる冒頭場面が「けふ」

一章部分執筆の時点では「恋」と書いたところでそのあとを書くことができず、そのことを自覚していたかず子が、その翌月には「ひめごと」の存在を初めて「お母さま」に語ったその日に手記の二章部分を執筆し、さらに弟の日記を盗み見るという行為を経た日の手記の中でついに「ひめごと」の内容を詳述することができているという、語り手の変貌をあとづけることができる。

こうした《出来事》の場における体験と《語り》の場における執筆行為とが相互に作用しあった「不良」へのエネルギーの高揚に支えられて、かず子は間もなく、六年間音信のなかった上原に宛てて書簡を書き送るという、四月時点では考えられもしなかった対他的行動に踏み切ることができているのである。

〈三通の書簡の間にも生きた時間が流れている〉。

〈かず子は「お母さま」が死んだとたんに初めて「戦闘、開始」しているのではなく、返信のない書簡というエクリチュール空間の中で彼女の内面変革が急速に進行していた〉。

ここで確認したいのは、二章では「思ふと、その日あたりが、私たちの幸福の最後の残り火の光が輝いた頃で、それから、直治が南方から帰つて来て、私たちの本当の地獄がはじまつた」が後日記的と考えられることである。三章では《《出来事》の場における体験と《語り》の場における執筆行為とが相互に作用〉することで語り手が変貌していることである。加えて返信が無い中で書簡を書くことを通してかず子の内面が変化していくことである。

五章以降についても高田氏の〈手記における《語り》の現在を示す指標〉を見ていく。

五章・六章・七章では、《《語り》の現在を明示する表現は出てこない。したがって三章までと五章以降では時間の関係構造が変化している〉とする。しかし、〈少なくとも五章冒頭の「ことしの夏」という表現は、五章部分が昭和二十一年のうちに書かれていることを示しており、五章以降においても《出来事》と《語り》のダイアレスティックな関係は消えていない〉ことを挙げている。

そして、高田氏は後半部のかず子の方向性を次のようなものであるとする。

そしてこの「斜陽」の後半部は、前半部において「港の外」への脱出の決意を「不良」という言葉で認識してきた彼女が、そうした自分の方向性を「道徳革命」という言葉で意味づけていく過程だと言ってよい。

また、「道徳革命」については、〈「道徳革命」という表現が出てくるのは最終章になってからだが、それに先行して、五章におけるローザ・ルクセンブルクと六章における聖書とが「お母さま」の死をはさんで強引に結合されるという着想の過程がある〉とし、〈「道徳革命」の内容の曖昧さや展望の希薄さが「斜陽」の主題を〝滅び〟に一元化する説の論拠になっていることは周知の通りであるが、《出来事》と《語り》の相互作用という観点からすれば、「道徳革命」の実体はほとんど問題ではなく、かず子が自己表現としての「革命」という言葉を手に入れたという点にこそ、意味の中心があるのである〉とする。

ここで押さえておきたいのは、《出来事》と《語り》の相互作用という観点からすれば、「道徳革命」の実体はほとんど問題ではなく、かず子が自己表現としての「革命」という言葉を手に入れたという点にこそ、意味の中心があるのである〉点である。かず子は出来事と「語り」（書く）を通して、自己の論理を生成していく。ここにおいては、かず子は自己の行為を「道徳革命」という言葉で意味づけをしている。かず子は連想的に「道徳革命」という言葉で論理を作りあげている。

さらに、高田氏は〈「お母さま」の死から八章の上原宛ての書簡執筆にいたるまでの時間における《出来事》の中心は、かず子の「恋の成就」と直治の自殺であ〉り、〈上原を訪ねたかず子は、その夜のうちに上原と結ばれるのだが、この《出来事》を再現するかず子の《語り》は、連発される「恋」という言葉とその実体との乖離がはなはだしいという特色を持っている〉とし、

かず子によって叙述された「恋の成就」の経過は意図的に〝反・恋愛小説〟が目指されているのではないかと思われるほどであるが、そこに透視できるのは、かず子が本当に求めていたものは生身の上原でも「赤ちゃん」でもなく、「革命」実践者として自己表現するための根拠にほかならなかったという作品の仕掛けである。

とする。

かず子の最後の書簡においては、〈その直前の七章に引用された直治の遺書―自己の変容を求めながら変容できずに自殺を選んだ青年の最後のエクリチュール―の〝死〟の言葉とのコントラストによって、それが〝生〟の言葉であることを構造的に照らし出している〉ことを示しているとし、八章のトーンの違いを〈八章における「道徳革命」という表現の発見を軸にした書簡部分の高揚したトーンと、章頭に付された短いコメント部分の沈んだトーンとの落差は、「最後の手紙」の言葉をかず子の到着点として絶対化させない機能を果たしている〉とする。

八章が、四章の書簡のテキストの提示のされかたと違う点について、〈夏の書簡と違って、この最終書簡がかず子の手記自体の中に再現されているという設定になっている点である。つまり自分が書いた手紙を手記の中に再生させるというかず子の言語行為によって、八章における二つの言葉が往還関係を形成しており、そこに「昭和二十二年」時点でのかず子の生の実相があるという構造になっている〉としている。

八章冒頭の手記部分はトーンが沈んでいる。時間的に考えると上原への最終書簡が先にあり、それを後に手記に内包している。書簡におけるかず子は強いかず子であるが、手記の部分ではその強さがトーンの違いからも感じられない。かず子は語る行為（書く行為）によって自己変革をめざしてきたが、八章においてはそれができないところが示される。高田氏の言う〈「最後の手紙」の言葉をかず子

の到着点として絶対化させない〉ことである。

高田氏は語り手であるかず子の「語る行為」（書く行為）として、「語り」の方から見ているのに対し、島村輝[二九]は「書き手」であるかず子という方向から見る。

島村氏の論[三〇]は、書かれた時期を推定しながら論点を提示している。それを見ていく。

まず、一章では、「恋、と書いたら、あと、書けなくなった。」という記述を〈スープの一件があったその日のうちに、「書く」ことをしていた〉とし、「語る」ことと「書く」ことの違いに目を向けている。

「語る」ことと「書く」こととの違い、それはそこに表現された「ことば」が、かたちとしてとどまり、後に誰かによって読まれる可能性を持つかどうか、という点にある。「書く」ことによって、人は記述の内容（物語内容）とともに、記述の行為そのもののなされた痕跡（物語行為）をも、読む者（もちろんその中には自分自身も含まれるかもしれない）に伝えることができるわけである。

第一章の末尾に記された一行は、かず子が、この物語の時間のはじめから、「書く」ということに自覚的であったことをはっきりと示している。そしてこの記述はまた、「書く」という行為そのものがこのテクストにおいて果たしている役割の大きさを読者にほのめかしてもいるのではないか。

かず子の「書けなくなった」という言葉により、書き手であるかず子が提示される。「書く」主体としてのかず子がある。

二章の末尾については、〈ずっと時間が経って、「本当の地獄」を味わった後であるかのようになっている〉とし、これは明らかに記述の混乱と見る。混乱の理由として次の二つの場合を提示している。

〈直治の生存とかず子の奉公の話があった日のことを後に思い出しながら書いてるうちに、思わずその場にいるように感じて「けふ」と書いてしまったというケース。〉

〈第一章と同様に「けふ」のうちにその事件を一応書いてしまっていたのだが、それを後になって読み直し、書き直したために「けふ」が「その日」ということになってしまったというケース。〉

そして、この部分については次のように論じている。

〈この第二章の部分は、第一章とは違って、なんらかのかたちでずっと後になってから書かれた（あるいは手を加えられた）ものだという証拠を歴然と残している〉

その時期はこのテクストの物語内容となる事件がすべて決着をみた後の時点ということになり、そうだとするならばこれ以上の記述もすべて、物語の内容と同時進行ではなく、事件がすべて決着をみた後（第二章の記述の時点以後）に書かれた（あるいは手を加えられたものだという

二九　島村輝「《書くこと》への意志」（『太宰治』洋々社一九九二・六）
三〇　島村輝（同右）

ことになる。）

また、三章では、直治の手記がかず子によってかず子の手記に写しとられているとし、かず子は自己の手記を「斜陽」に写し取っているとする。その時期について〈このテクストの物語内容となる事件がすべて決着をみた後の時点ということになる〉とし、「斜陽」は〈「書く」行為の痕跡を何重にも写し取り、組み換えることによって成り立っている〉とする。

四章はかず子の書簡であるが、これについては、

この章は手紙の写しであるから、なんの問題もないように見えるかもしれないが、手紙そのものと、それを手記に写し取ったものとでは、やはり性格が違ってくる。それは、誰に読まれることを想定しているか、という点である。

とし、かず子が自己の書簡を自己の手記に写し取っていて、手紙そのものと手記に写し取られたものでは差異があることを論じている。手紙は宛名人に読まれ、手記は書いた人が後で読むためのものであるとし、よって、手記に書き写された手紙は手記を書いたかず子が後で読むためのものであることになる。

五章は〈記述のうえでの問題は少ない〉とし、六章以降は、それまでと〈記述のスタイルが多少違っている〉と述べる。

〈それまでの章が、物語の内容となる時間と、その内容を初めて記述している時間とを同時進行のようにみせるような曖昧なスタイルが選ばれていたのに対して、六～八章はこの三章をひとかたまりとして、すべての事件が終わった後に書かれているということが明らかなようなスタイルに傾いている〉。

島村氏の第六章から第九章までの内容を記述する行為の時間についての論を整理すると、時系列にまず直治の手によって遺書の書かれた時があり、次にかず子が上原に別れの手紙を書いた時（昭和二十二年二月七日）、そして、全ての事件の決着がついた時点で「斜陽」というテクストの一部として第六章が書かれ、第七章の記述でかず子が直治の遺書を写し取り、さらにかつて自分の書いた上原宛の手紙の内容を、第八章として写し取るというようになる。

島村氏は以上のことから〈「斜陽」というテクストは、すべてが終わったあとの「告白」として、直線的に記述されたのではなく、かず子自身の時々の手記や手紙、直治のノート稿・遺書などを何重にも繰り返して写し取り、時間を錯綜させて構成した、複雑な時間構造をもった記述によって成り立っている〉とし、書き手であるかず子を浮かび上がらせている。

島村氏は書き手であるかず子が自らの手記や書簡、直治の日誌の言葉を写し取りながら「斜陽」というテクストの完成に向かう「《書くこと》への意志」が何を示しているのか、次のように論じている。

〈「斜陽」のテクストの二つのレベル〉を挙げている。

「夕顔日誌」や直治の遺書、かず子の上原宛ての書簡のように、自分や特定の他者に向かって書かれたことばの層。

そうしたことばをとりこみつつ、その時々に、かず子の手記として書かれた、断章としてのこ

とばの層。

その中で、〈重要な役割を果たしているのは、かず子によって写し取られた、「夕顔日誌」や遺書などの、直治のことば〉とする。

「夕顔日誌」も「遺書」も〈苦しみのさなかで、表現やコミュニケーションを求めた、直治のぎりぎりのあがきとしてのことばであ〉り、〈直治にとってみれば「夕顔日誌」も遺書も、ともに不特定の他者に読まれることを想定したものではないし、まして活字化され、刊行されることなど思いもよらない状況で書かれたもの〉である。〈それを記述したときの直治の姿の痕跡としての身体性を備えて、ノートや紙の上に記されていた〉。〈そうした身体性は、「夕顔日誌」や遺書を眼前にしたときのかず子には、誰にもましてくっきりと感じることができたと想像〉できるとする。

〈身体性という点で、この作品の登場人物中できわだっているのは、いうまでもなくかず子と直治の母親〉とする。スープのシーン・食事の作法・おしっこの仕方は身体的パフォーマンスと見る。その姿から、かず子や直治は母の〈本当の貴族としてのしぐさ、身体性を真似ることができない〉と認識する。

母のように本物の貴族になれず、また民衆の中にも入れない〈直治にとって、「夕顔日誌」のような手記を記すことが、いわば自分の生きることの明かしであったわけであり、そうした《書くこと》への意志が、馴染めない世の中から去っていくこと＝死を遠ざけていた〉。

直治が本当の貴族として振る舞えるのは、ほんの僅かの人の目にしか触れない手記の、手跡という、きわめて限定された場所のみであった。直治は《書くこと》を選び、《書くこと》に敗れた。彼が最後に書き写したことばが遺書であり、その遺書を書き上げて死んでいくということも、まさしく、書いている間だけ引き延ばされた死というものを暗示しているのではないだろうか。

かず子が直治の言葉を書き写していくことについて、次のように述べている。

そうした事情を共有するかず子には、直治の手跡に表現された身体性（文体や筆の乱れなど）は切実なものであったろう。かず子は「夕顔日誌」や遺書の、直治の身体性の痕跡である文字を、自ら一つずつ写し取る。そのことによって、彼女は直治の思いを直接に感じとると同時に、そのことばを自らの手で記すことによって、そこに彼女自身の身体性を重ねていくのである。かず子によって書き写された直治の手記や遺書の手跡には、直治とかず子の二重の身体性が刻印されているということができるだろう。

第六章までの、かず子の記した手記は、〈その書かれた時点で、直接には自分自身のために書かれたものだった〉とし、〈直治と同じく、かず子もまた、発表を想定しない、《書くこと》への意志によって、支えられてきたといえるとしている。また、島村氏はかず子も〈《書くこと》への意志によって、死（滅び）を引き延ばした〉という見方をする。

かず子も手記を書くというレベルにおいては、直治と同じである。しかし、かず子は「斜陽」を書く作家としてのレベルがある。

〈部分的に書き継がれた手記が、一貫したテクストにまとめあげられ、組み込まれた時、それはその時々の手記とは違った意味を持たざるを得ない〉。かず子が『斜陽』というテクストに手記などを組み込み、まとめていることは手記を書くレベルではなく、『斜陽』の書き手のレベルになっているとする。

かず子が『斜陽』という物語を作り出す意味を次のように述べている。

様々な断片を書き写し、つなぎあわせ、順序を並べかえて再構成し、初めと終わりをもった一貫したテクストにまとめあげる作業をつうじて、それぞれの手記の記述された時の痕跡は、他の部分と関連づけられ、整理されて一つの「斜陽」という物語のなかに統合されてしまう。かず子は物語を構築することで、その作業をしている時点から、過去の自らの生を意味付けることができるが、それはある意味で、その時々のことばの生々しさを消してしまうことにもなる。こうしてまとめあげられたかず子の手記は、その手跡から構成意図にいたるまで、すべてかず子の統御のもとにあるものとなったといえるのである。

かず子は『斜陽』というテクストを作ることで、かず子は〈過去の自らの生を意味付ける〉。二つのレベルの外側として〈「まとめあげられたかず子の手記」の層〉を見る。

ここでかず子は、あきらかに一つの《物語》をつくることに成功した。すべてが過ぎ去った時点で、過去のその時々の記述を秩序づけ、そこに意味を与える。そのようにして、自分自身をも繰り返し繰り返し物語化すること。何度もの写し取りによってまとめあげられたかず子の手記の手稿は、その身体性をすみずみにまで染みわたらせた、かず子の《書くこと》である。

榊原理智[三]は語り手に注目する。

〈語り手としてのかず子と語られている対象としてのかず子に二分〉して見ると、〈これは一人称の回想的手記の最も単純化された構造モデル〉であり、この場合は、〈語り手はいくらかの時間を経て過去の自分を対象化して語っているのであるから、語り手が現在、対象が過去ということになる〉とする。

しかし、『斜陽』は〈章ごとに語り手の時間位置が異なる〉ため、〈単純な回想的手記の形をとって〉いないとする。

また、〈単一地点から振り返られた手記が、複数つなげられた形なのか、といえば決してそうではない。同じ執筆時に書かれたと思われる章の中でも、語り手が執筆している間に流れていく時間がある〉とする。

そして、次のように論じている。

> 母の食事作法に関する直治の言葉の記憶、母のおしっこの挿話、自分の病気の記憶などはいつのできごとかもはっきりせず、またそれが朝食時に呼び起こされている断片なのかそれとも執筆時に現われてきたものなのかも断定できない。はっきりしているのは、語られた後にはどの断片も元の文脈から引き離され、新しい語りの中に盛り込まれて、語りを微妙にそれ以前のものと差異化していくような運動として存在している。

榊原氏は『斜陽』の語りをそれ以前のものから絶えず差異化していく運動としている。差異化について榊原氏は、語るときはそれまでの先行思考に支えられているが、次の発話行為に移るときは、その直前に語ったことはすでに先行思考に組み込まれ、先行思考はそれ以前のものと微妙に異なるとする。

> 『斜陽』ではこのような連続的な差異化運動が可視的になっている。差異化運動とそれに要した時間を、言葉が語られた現場へ投射してみれば、これはかず子の語る行為と語りに要した時間

三　榊原理智「語る行為の小説」（『日本文学』一九九七・三）

である。つまり『斜陽』の語りの中には、かず子の語る行為と行為の行われている時間が再―現前されているのである。ここに注目することで、『斜陽』は「語る行為」についてのテクストという新しい様相を帯びてくる。

そのように『斜陽』を見ると、次のようになると論じている。

ある出来事を語る語りそのものが、その次の瞬間には対象化され出来事として記述され、その記述が次の語りを誘発していくようなテクストでは、語りと出来事との境界線は消滅せざるを得ないのである。

語りと出来事が溶解してしまえば、出来事の〈主体〉として想定されている主人公も、出来事を記述する擬人化された〈主体〉として想定されている語り手も、同時に消滅する。その発話行為そのものによって不断に変容していく〈語り手〉を、言説のある一点における発話主体として想定することは可能であっても、ナラトロジーが依拠したような均質な統一体としての〈語り手〉は、発話行為それ自体によって成立し得なくなる。

つまり、『斜陽』はかず子が語り手であるが、その時々のかず子にとっての語りであり、かず子の語りは一貫していない。そのため、「物語言説」と「物語内容」は分けられないということである。

かず子の上原へ宛てた手紙に目を向ける。手紙は上原に宛てたものであるが、手紙を通してかず子は自己の論理を作り上げ、規定していく。その規定は最初の規定で終わることなく、次々と更新されていく。かず子は手紙を通しても、自己を作り出している。

一通目は、「女大学」という価値基準を持ち出しながら、自分たちの家族、そして自己の生活苦による生死について語る。しかし、生活苦が問題ではないと次に語る。

でも、くるしいのは、こんな事ではありません。私はただ、私自身の生命が、こんな日常生活の中で、芭蕉の葉が散らないで腐って行くように、立ちつくしてままおのずから腐って行くのをありありと予感せられるのが、おそろしいのです。とても、たまらないのです。だから私は、「女大学」にそむいても、いまの生活からのがれ出たいのです。（四章）

さらに、その直後に「私が前から、或るお方に恋をしていて」と上原に対する感情を表す。この「女大学」という価値基準や生活苦による生死の問題、そして恋の感情と次々とかず子によって繰り出されることについて、榊原氏は「複数の基準を複合的に作動させることによって、かず子はなんとか「上原」に語りかけようとしている。」とする。

二通目ではかず子の縁談の話を持ち出し、「物質的なもの」ではなく「精神的なもの」を求めていることを表す。かず子は次に「あなたの赤ちゃんがほしい」と述べ、愛人としての考えを示す。その愛人も、上原の妻を目指すことを否定し、上原の仕事を第一とし、自己の考えが間違っていないとする。

この語りについて榊原氏は、〈経済援助を排除して性愛を強調し、結婚も要求しないことで、「上原」が一般的な既婚の男性として持っていると思われる倫理的障害を取り除き、あからさまに性的好奇心に訴えている〉とする。

三通目は、お母さまの「札つきなら、かえって安全でいいじゃないの。」「札のついていない不良が、こわいんです。」という言葉を引用し、上原の「不良性」の肯定化を図る。上原の肯定化は、上原と関係を持とうするかず子の論理を肯定するためであり、かず子は次のように語る。

私、不良が好きなの。それも、札つきの不良が、すきなの。そうして私も、札つきの不良になりたいの。そうするよりほかに、私の生きかたが、無いような気がするの。（四章）

上原の肯定化からかず子の肯定化をしている。そして、かず子は自己の「不良性」を肯定化することで、「世間」が「不良」とする論理を作り上げる。

このことについて、榊原氏は〈「世間」を「札のついていないもっとも危険な不良」と呼ぶことによって、不良／不良でないという二項対立を札付きの不良／札のついていない不良へとずらした〉。〈「世間」という実体化された敵を悪として立てることで、「かず子」と「上原」を世間からの〈逸脱者〉ではなく、その改善者すなわち〈革命者〉として位置づけることが可能〉であるとする。

かず子は「不良」という価値基準を持ち出して、上原やかず子自身の肯定化から、「世間」の「不良性」へと論理の矛先を変えていく。かず子は上原を持ち出して、「世間」と対峙する論理を作り出すかず子へと変化している。

榊原氏は「恋」と「世間」が対比させられることについて次のように述べる。

〈どのような一対であっても、愛し合っていることに優位性を与える「恋」という価値基準は、この「世間」と対比させられたとき、道徳のみならず社会全般にわたる、きわめて政治的な急進性を帯びる〉。

〈みずからの言説の中で作りあげた「かず子」と「上原」との単独的な関係性を普遍化して「革命」と名付け、その急進性を意図的に取り出すことによって、かず子は「恋」をスローガンにしたてた〉。

このように見ていくと、かず子は絶えず変化し、思考はずれていく。そのため、かず子に一貫性は無い。かず子の論理や思考に一貫性を求めることはできず、一貫性のないかず子が表れている。かず子の語る行為に目を向けた場合、『斜陽』は「語ることで変化することを表している物語」ということができる。榊原氏は、〈語る行為についてのテクストとして見たとき、ある地（時）点におけるかず子を特権的な枠組みとして物語を再構成するような読者を、『斜陽』は拒んでいるのだとしか言いようがない〉とする。

中村三春[三]はかず子の書く行為が手記だけではなく、『斜陽』という物語に及んでいることを論じている。〈手記というドキュメント形式と連繋して、読者に対する強力な説得のレトリックとなる〉とする。

中村氏はかず子の語りや直治の言葉の引用にある「ほんもの」に着目し、「ほんもの」がかず子のレトリックによって作り出されるとする。

お母さまの「ほんもの」さに対して、かず子や直治は「高等御乞食」と呼ばれる偽物の貴族である。お母さまの「ほんもの」さは〈常人が行えば野卑としか見えない〉ことを野卑ではなくこなす能力にある。〈母は、貴族なるものとその没落を、爛熟の両義性において代表させられる〉とする。

かず子の語りによる、お母さまの「ほんもの」の貴族性は、文化的に高いということではなく、高貴と野卑の差別化とする。お母さまは〈歴史的に存在した、実体としての貴族とは何の関わりもない、文体における貴族である。それは言葉によって構築された虚構の貴族でしかない〉とする。

三　中村三春「斜陽のデカダンスと〝革命〟」（『国文学』一九九九・六）

母を高貴な側に置き、貴族コミュニティという設定について、「それは、そのコミュニティの境界線上の戯れを物語として滲出させるため以外ではない。貴族なるものは、ある（安住すべき、唾棄すべき）共同体と、その実体としての消滅を呈示するための装置である。虚構の貴族の代表としての母の死が、このコミュニティの喪失を表している。あるコミュニティを否定し、別のコミュニティを打ち立てることが、すなわち「革命」だからである。」とする。

また、かず子が私生児の母となることについては、

〈私生児の母は革命的と言うべきかも知れない。現代でもなお同じである。ただし、それはかず子にとっては、ジェンダー的弱者のスタンスを維持しつつ対抗文化的信念を満足させる究極の選択だった。〉

と「ジェンダー的弱者」という立場を作ることで革命的な意味を強めているとする。さらに、かず子にとっては、それまでのコミュニティを喪失し、新たな〈私生児とその母という一つのコミュニティ〉を実体化し、そのために必要な便宜として上原があったとする。そのため、上原の「人格のくだらなさ」は問題にならない。

このように『斜陽』では、レトリックを通して「ほんもの」と「にせもの」（常人／貴族）といった差異化を行い、虚構のコミュニティを生み出すことについて論じている。

第二節　かず子の思考変遷と連想性

『斜陽』におけるかず子は、作品内の登場人物、手記や手紙の執筆者、『斜陽』の語り手という三つの役割を持っていると考えられる。

作品構造的に見ると、内側に作品内の登場人物としてのかず子・手記や手紙の執筆者としてのかず子、外側に『斜陽』を語る（書く）かず子となる。しかし、手記や手紙の中に自分であるかず子が登場し、手記や手紙を書くかず子も存在しているため複雑である。語るかず子と語られるかず子も別々ではない。そこで、作品の構成という視点から部分ごとに考察していく。

では、この『斜陽』を語る（書く）かず子がどのように作品内の登場人物としてのかず子・手記や手紙の執筆者としてのかず子を語る（書く）のか。また、どのようなかず子を語る（書く）のかを考える。

作品内の登場人物としてかず子を見ると、ある一点における思考や言葉でもって、その時々の彼女のあり方を定義づけることは困難である。それは、かず子の思考は一点に留まることなく常に変化しているためである。その思考は一貫性をもっているとは考えにくい。先に言うと、ある一点における固定したかず子の姿ではなく、常に変化していく彼女を描いている作品と言える。かず子の思考は一点に留まることなく、次々へと連鎖していく。

『斜陽』を語る（書く）かず子という逆の視点で見ても、一つの帰着地に収斂させようとはしない。このかず子も留まることなくさらに次の連鎖をする感じである。登場人物のかず子・手記や手紙の執筆者のかず子は『斜陽』を語る（書く）かず子によるものであるからである。

『斜陽』を語る（書く）かず子は様々な素材を取り込み、写し取り、提示している。そして、思考が連鎖しながら常に変化している。

一章に見る『斜陽』の語りの特性

『斜陽』の冒頭を成す一章に注目したい。かず子の語り（書く行為）によって展開されていくが、かず子によって、話題が絶えず移り変わる。かず子の次々と連想していく様が窺われる。この連想性は、理屈によるものではなく、気まぐれな揺れを持つかず子像を作り出している。

では、一章においてどのようにかず子の連想が展開されていくのかを見ていく。

「朝、食堂でスウプを一さじ、吸ってお母さまが、」の冒頭から始まる。一章の書いている内容の現在は「朝」である。ある朝のことが起点である。お母さまのスウプをいただく様子をヒラリという言葉で形容した後、直治の言葉を引用する。「弟の直治がいつか、お酒を飲みながら、姉の私に向ってこう言った事がある。」と始まり、直治の爵位についての言及から、ほんものの貴族はお母さまということが示される。これは、直治のお母さまの貴族性についての認識であるが、直治の言葉から、かず子は、お母さまのほんものの貴族性を再認識していることが考えられる。また、語る（書く）かず子は、お母さまのほんものさを示す。かず子にとっては、お母さまとの差異を認識するところであり、ほんもののお母さまに対し、かず子と直治が同じ側（ほんものでない）とくくりだされる。

お母さまの食事の仕方が礼法から外れているが、それがおいしいいただき方と思うことから、骨つきのチキンの食べ方に話題が続き、その食べ方がエロチックととらえる。自分はほんものの貴族ではないと出しながら、貴族一家の一人であることへのジレンマがある。一般的な考え方からすれば、お母さまの食べ方は文化的ではない。しかし、そのような身振りを野蛮と感じさせないでこなしてしまうお母さまが示される。

おむすびを手で食べたいという思いがありながら、躊躇してしまうことの後に「いつか、西片町のおうちの奥庭で、」とお母さまの庭でのおしっこのことに続く。お母さまの真似はできないということに加え、お母さまを「可愛らしい」という認識が示される。

「けさのスウプの事から、ずいぶん脱線しちゃったけれど、」とあるように、お母さまのスウプのいただき方の様子から、このような事柄が連鎖し、そこにかず子の内面も表出される。語る（書く）かず子の思考は矢継ぎ早に連鎖をしている。スウプのことを最初に語ろうとしたのだが、なかなかスウプの話に行かないのである。また、「ずいぶん脱線しちゃったけれど」という語りは、読者との距離を縮めさせる。おしっこからルイ王朝の貴婦人のことを提示し、ルイ王朝の貴婦人とお母さまの共通性が示されるが、そこからさらにお母さまがほんものの貴族であることをくくり出す。

「さて、けさは、」と場面の現在は「今朝」であることを確認しながら、話を戻す。お母さまがスウプをいただく時に「あ、」と声をあげたことから、かず子の朝ごはんの箸の進まないこと、そしてかず子の五年前の病気のことへと続く。詳しいことはここで語られず、お母さまが自分のことを心配していることに一旦話題を向けた後に「あ。」という言葉が出た理由として、かず子の六年前の離婚、それがはずかしい過去という認識、そして、お母さまにも何かあるという疑念が示される。お母さまの言葉から直治へと話題が向けられて、かず子は「悪漢は長生きする。綺麗なひとは早く死ぬ。」という論理を持ち出したが、それが、お母さまに適用されたらと考え困惑する。

ここまでのかず子の連想をまとめてみたい。お母さまのスウプの時に発した「あ。」という声から爵位・お母さまの食事の仕方・お母さまのおしっこ・ルイ王朝の貴婦人と連鎖される。この一連の連鎖は、お母さまの持つ「ほんもの」さを提示する。話を今朝に戻し、お母さまの食事の様子からかず子自身の朝ごはんの箸が進まないことへとつながる。お母さまの朝食からかず子自身の朝食についての連想である。かず子の朝食のことから、病気のことを思い出し離婚のことへと連鎖する。そして、かず子が発する「あ、」が冒頭のお母さまの「あ。」とつながる。かず子自身ははずかしい過去によるという認識であるが、お母さまにもそのような恥ずかしい過去があるのかと疑念を持つ。直治のことから「悪漢は長生きする。綺麗なひとは早く死ぬ。」と連鎖していくが、ここにおいても、お母さまがかず子たちとは違う存在ということが示されている。前半のお母さまのスウプの件からのお母さまがかず子たちとは違うという括りだしと後半の「悪漢は長生きする。綺麗なひとは早く死ぬ。」による括り

だしは、お母さまがかず子たちとは違うという認識を示すことを提示している。しかしながら、この流れは論理性を感じさせるところがない。

話は一旦区切られて、「蛇の話をしようかしら。その四、五日前の午後に、」となる。書いている内容の現在は「今朝」の四、五日前である。蛇の件では、十年前に父が亡くなる際の蛇のことから、お母さまが蛇に対して畏怖の情を持っていることと自分の胸の奥にお母さまの命をちぢめる小蛇が一匹入り込んでいるようなことが提示される。

「そうして、その日、私はお庭で蛇を見た。」「今朝」の日の午前のことである。かず子はその蛇が「女蛇だ」「美しい蛇」だと思い込む。女蛇は、卵を焼いたことから母蛇とつながる。「美しい蛇」はこれまでの記述から、「美しい」存在として、お母さまと重ねられる。この時点におけるかず子のベクトルは、お母さまに向けられている。そして、「私は、ああ、お母さまのお顔は、さっきのあの悲しい蛇に、どこか似ていらっしゃる」と思い、「私の胸の中に住む蝮みたいにごろごろして醜い蛇が、この悲しみが深くて美しい母蛇を、いつか、食い殺してしまうのではなかろうか」と思う。ここでは、お母さまが美しいということに加え、その悲しみが深いという認識を持っている。

かず子はこれまではお母さまとかず子たちの差異性を示して語ってきたが、「悪漢は長生きする。綺麗なひとは早く死ぬ。」という言葉から、蛇の話へとつながり、お母さまの美しさと悲しみ、死について連想する。かず子の思考は次々と連想しながら、少しずつ別の方向へずれていくといえる。

「私たちが、東京の西方町のお家を捨て、伊豆のこの、ちょっと支那ふうの山荘に引越して来たのは、日本が無条件降伏したとしの、十二月のはじめであった。」と昭和二十年十二月のことになる。スウプの場面が昭和二一年の春であるから、数か月前のことになる。ここでは、時世の変化に伴うかず子の家の経済状況の悪化、引越までのいきさつが示される。

経済状況の悪化についてかず子は、「ああ、お金が無くなるという事は、なんというおそろしい、みじめな、救いの無い地獄だろう」と思い、「人生の厳粛」の感を覚える。「また、私たちの人生は、西片町のお家を出た時に、もう終わった」と思う。お母さまは発熱の回復後、「神さまが私たちをお殺しになって、それから昨日までの私と違う私にして、よみがえらせて下さった」と口にする。しかし、かず子はそのことに対して疑念を持ち、「ああ、何も一つも包みかくさず、はっきり書きたい。この山荘の安穏は、全部いつわりの、見せかけに過ぎないと、私はひそかに思う時さえあるのだ。これが私たち親子が神さまからいただいた短い休息の期間であったとしても、すでにこの平和には、何か不吉な、暗い影が忍び寄って来ているような気がしてならない。」と感じる。かず子は、胸の中に蝮が宿り、お母さまを犠牲に太っていくように思う。

そして、一章の末尾では、「恋、と書いたら、あと、書けなくなった。」という一文によりかず子自身と「恋」の問題について窺わせると同時に、読者レベルではこれまでテキストがかず子の手によることが提示される。

生計を立てる術を持たないかず子たちにとって、お金が無いということは死活問題である。お母さまの死に対する意識の連鎖を保ちながら、蛇の件でのかず子内部にいる蝮の存在も連鎖している。お母さまは「神さまが私たちをお殺しになって、それから昨日までの私と違う私にして、よみがえらせて下さった」と言うが、かず子にはそうは思えない。かず子は現実の状況はまだ続いていて、「すでにこの平和には、何か不吉な、暗い影が忍び寄って来ているような気がしてならない。」という認識を持つ。これまで「ほんもの」についてお母さまとかず子たちの差異について語ってきたことが、ここでは、お母さまとかず子のこれから向かう先についての暗示につながっていく。

ここまで、語るかず子のみであったが、「ああ、何も一つも包みかくさず、はっきり書きたい。」「恋、

と書いたら、あと、書けなくなった。」と表記があることにより、一章の語り手であるかず子が手記の書き手であることが示される。

連想的に語るかず子により、かず子の気まぐれさや揺れが表れている。次々と連想されていくところに強力な論理性は感じられないが、多くの話題を用いながらずらしていく。かず子の連想により、多くのかず子の脳裏にあることをまき散らしているが、それらは完全に別のことではなく、つながりを持っている。強力な論理ではなく、様々な事象に移ろいながらもつながっているという連想性が示される。これは、かず子の特性を示している。

かず子がこのような文体を用いることは、かず子の特性を表す点だけでなく、『斜陽』のテクストの戦略と受け取ることができる。

二章及び三章の語りの特徴

二章の語り

二章の語りには、一章ほどの連想は見られない。二章の内容を確認すると、火事から畑仕事、そして力仕事ということから戦時中の話へと移っている。戦時中のことについて語った後、「戦争の事は、語るのも聞くのもいや、などと言いながら、つい自分の「貴重なる体験談」など語ってしまったが、しかし、私の戦争の記憶の中で、少しでも語りたいと思うのは、ざっとこれくらいの事（後略）」とある。かず子は語りたいことについて語った後に、自分の語りをふりかえる部分である。

その後、お母さまとのやりとりが語られていく。その中に直治や奉公の話題が登場する。お母さまに対する言葉に対して、「かえって別の言葉が出てしまった」「あらぬ事を口走った」とあるようにかず子の素直で部分や制御できない部分が示される。

三章の語り

三章は編み物をしている場面であるが、二十年前のことを持ち出してお母さまへの思いにつなげている。「子供が無いからよ。」と「自分でも全く思いがけなかった言葉が、口から出た。」というように、二章と同じく、かず子の言葉は自分の制御できない部分がここでも示されている。

直治の「夕顔日誌」は写し取られ、語られている。しかし、直治がかず子に宛てた薬代の工面の手紙は、そのまま写し取られたのではなく、かず子が手紙の概略を示しているだけである。

第三節　飛躍性を持つかず子の思考

作品冒頭部における、かず子の思考の連鎖性が顕著であることは前述の通りである。

ここでは、かず子の思考の飛躍性に目を向けていく。

かず子の思考は思うがままに生産されて生み出されていく。そして、その思考は必ずしも根拠がしっかりしているとはいえない。だが、かず子はこの行為により、自分自身の意味付けを行っている。

一章では、「ほんもの」であることから、お母さまをかず子と直治とは違う「ほんものの貴族」としてくくりだしている。

じっさい華族なんてものの大部分は、高等御乞食とでもいったようなものなんだ。しんの貴族は、あんな岩島みたいな下手な気取りかたなんか、しやしないよ。おれたちの一族でも、ほんものの貴族は、まあ、ママくらいのものだろう。あれは、ほんものだよ。かなわねえところがある。（一章）

直治のこの言葉を引用した上でお母さまの「ほんもの」性に話が向かっていく。直治の言葉が引用されていることについて、次のことが考えられる。

まずは、かず子が直治の言葉から、お母さまの「ほんもの」の貴族性を気付かされたこと。

次に、直治のお母さまの「ほんもの」の貴族性についての認識を示すと同時にかず子も直治と同じ立場であること。かず子一家の中で、お母さまだけが「ほんもの」でかず子と直治は「ほんもの」でない貴族という枠が創出されている。これは、かず子がお母さまと同じ性質ではないことを示し、お母さまと同じコミュニティにいることの違和感として示される。

そして、直治の言葉にある、お母さまの「ほんもの」の貴族性が、次のお母さまのスウプのいただき方で実証する形になっている。お母さまのいただき方が貴族的であることは、かず子の認識によるものである。かず子の思考が創出される際に、直治の言葉から、お母さまの「ほんもの」性という思考の中心が提示され、お母さまのスウプの場面が具体的な事例として展開させていくところはかず子の語り（書く）の戦略であるといえる。

話をかず子の思考に戻すと、かず子は貴族一家として「ほんもの」でないと自ら貴族でない側に位置づけている。その「ほんもの」性として持ち出されているのは、お母さまの食事のいただき方や庭での放尿である。それらは一般的な貴族的作法とはほど遠い。だが、お母さまのこの行為は野卑的であるが、本能的な行為である。マナーにある社会性を排除した、人間の本能的な行為を上品にやってのけるお母さまを自分とは別の存在としてくくり出す。自分とお母さまを差異化しようとするくくり出しがここで始まっている。

それは所謂正式礼法にかなったいただき方では無いかも知れないけれども、私の目には、とても可愛らしく、それこそほんものみたいに見える。（一章）

そんな野蛮な仕草も、お母さまがなさると、可愛らしいばかりか、へんにエロチックにさえ見えるのだから、さすがにほんものは違ったものである。（一章）

けさのスウプの事から、ずいぶん脱線しちゃったけれど、こないだ或る本を読んで、ルイ王朝の頃の貴婦人

たちは、宮殿のお庭や、それから廊下の隅などで、平気でおしっこをしていたという事を知り、その無心さが、本当に可愛らしく、私のお母さまなども、そのようなほんものの貴婦人の最後のひとりなのではなかろうかと考えた。（一章）

このくくり出しの過程において、自分たちが本能的なことをしたら「高等御乞食」となることやルイ王朝のことを持ち出してくる。「高等御乞食」は直治の言葉を用いている。また、ルイ王朝を持ち出してお母さまの貴族性を定義するところは、かず子の思考の方法として飛躍的な性格を持っていると考えられる。

くくり出しにより、かず子はお母さまの側から外側へと出て行くことになっていく。それは、お母さまと同じ貴族的素性を持っていないことなどから、かず子がお母さまと同じような生き方ができないことを意識し、お母さまを中心とした家庭と社会的な貴族階級からの脱出を図ろうとする意識によるものと考える。

二章では、かず子の中に蛇が入り込む。かず子はお母さまと同じ枠の中から、逸脱していく意識を蛇が入り込むと表現している。蛇については、父の死に際のことと蛇の卵を焼いたことと関連している。蛇と火事は別々のことであるが、お母さまを不幸にする点ではつながる。つまり、お母さまを不幸にする、またはお母さまに背くことを蛇を使って意味づける。

また、蛇が中に入り込むことは、田舎娘ということにもつなげる。これは、蛇からバイタリティー

を示している。蛇のことから、お母さまが不幸になることや田舎娘という自己変革につなげていく、かず子の思考連鎖は独特のものといえる。

三章では、かず子が直治の夕顔日誌を読み、「不良」という観念を手に入れる。そして、「不良とは、優しさのことではないかしら」という飛躍した思考をする。夕顔日誌を読むことが、かず子に自分の過去を想起させ、「不良」という観念を受け取らせる役割を果たす。このことが、かず子をお母さまの世界から外側へと踏み出させる。そして四章では、手紙を送りつけるという行動へと移っていく。

四章では、かず子が上原へ手紙を送りつけるという行動が示されている。かず子は上原へ手紙を出すことで、他者への強い働きかけの行動を実行した。手紙は自己の内面を告白するメディアである一方で、相手を動かすものでもある。真実と共に嘘も用いて表現することが可能である。手紙の真偽は別として、かず子は自己の一方的な思い込みで考える。手紙の内容の真偽は別として、手紙を投函したことは、世間の良識に反する行為を実行したことになる。夕顔日誌で得た「不良」という観念を実践したことになる。

手紙の内容に目を向けると、かず子は手紙の中で「恋」を一方的に作り上げる。一通目では、「どうか、あのお方にあなたから聞いてみて下さい。」と第三者に相談する形を取りながら、上原に対して責任を求める。第三者に相談する形を取りながら、自分の思いを届けるところはかず子の手紙における戦略である。二通目では、上原に対して、「本当は常識家なんでしょう。」とし、世間的には不良とされている人を常識家と位置づけ、その一方でかず子自身も「不良」の側に置き、自己を正当化していく。三通目では、お母さまによる不良肯定と受け取れる言葉から、かず子は力を得る。かず子は「このような手紙を、もし嘲笑するひとがあったら、そのひとは女の生きて行く努力を嘲笑するひと」と述べ、「憩える帆は、例外なく汚い。」と女性全体に目を向けている。しかし、両者の理屈には一貫性がなく、また次の「困った女。」と個人レベルに話を持っていき、自己の理論を一旦引かせる。かず子の論理は一貫していない。三通の手紙でかず子は上原に呼びかけることを通して自己を作り上げている。上原という相手を置き、そこに呼びかけるということを手紙を書く行為の中で行い、自己を作り上げている。書くことで直治の言葉や過去のことを回想しながら、内面の思考を整理している。それは論理的でなく、飛躍があるが、変革を目指すという方向は示されている。

第五章　聖母子

第一節　「マリヤ」「聖母子」について

『斜陽』では登場人物に「マリヤ」や「聖母子」を見る論がある。中でも「マリヤ」や「聖母子」は誰を示すのかという問題が存在している。

ここでは、「マリヤ」や「聖母子」が誰に重ねて見られているかについて考えたい。

「マリヤ」という表現が出てくるのは、五章末のお母さまが亡くなる場面である。

それから、三時間ばかりして、お母さまは亡くなったのだ。秋のしずかな黄昏、看護婦さんに脈をとられて、直治と私と、たった二人の肉親に見守られて、日本の最後の貴婦人だった美しいお母さまが。

お死顔は、殆んど、変らなかった。お父上の時は、さっと、お顔の色が変ったけれども、お母さまのお顔の色は、ちっとも変らずに、呼吸だけが絶えた。その呼吸の絶えたのも、いつと、はっきりわからぬ位であった。お顔のむくみも、前日あたりからとれていて、頬が蠟のようにすべすべしていて、薄い唇が幽かにゆがんで微笑みを含んでいるようにも見えて、生きているお母さまより、なまめかしかった。私は、ピエタのマリヤに似ていると思った。（五章）

また、八章の上原宛ての手紙の中では「マリヤ」とともに「聖母子」という表現が登場する。

私は、勝ったと思っています。

マリヤがたとい夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあったら、それは聖母子になるのでございます。（八章）

まず、先行研究において「マリヤ」や「聖母子」を誰に見ているのかを整理する。

佐藤泰正は、「「斜陽」は二人の「マリア」（あるいはふたつの「聖母子」）の物語とよぶことが出来るかもしれない。ひとつは言うまでもなくかず子とその子であり、いまひとつはかず子の母と直治である」[三三]とする。江種満子は、上原の妻に聖母子像が描かれている[三四]とする。木村りり子は「マリヤ」はお母さまと上原の妻とする[三五]。青木京子は「三つの〈聖母子〉物語」として「お母さま」・上原の妻・かず子を挙げている[三六]。

かず子はお母さまの亡くなった姿を見て「ピエタのマリヤに似ている」と思う。お母さまにマリヤの姿を見る。また、「マリヤが、たとい夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあったら、それは聖母子になるのでございます。」（八章）と述べている。自分自身をマリヤに重ねている。どちらもかず子によって「マリヤ」に重ねられているが、その合理的な論理が本文で示されていない。そのため、先行研究で多様な論が示されている。

三三　佐藤泰正「〈斜陽〉における太宰治―危機における美意識」（『太宰治論』　翰林書房）（『国文学』７０・６）

三四　江種満子「『斜陽』の女性―かず子を中心に―」（『解釈と鑑賞』　８１・１０）

三五　木村りり子「『斜陽』の中の母とマリヤ」（「東京女子大学日本文学」九六　二〇〇一年九月三〇日）

三六　青木京子「『斜陽』とキリスト教美術―三つの〈聖母子〉物語」（「キリスト教文芸」二二　二〇〇六年四月二五日）

かず子は上原の家に行った時に上原の妻に出会い、「あの奥さまはたしかに珍らしくいいお方」と思う。上原の妻については直治の遺書にもある。

僕は、その日その時の、そのひとの瞳に、くるしい恋をしちゃったのです。

高貴、とでも言ったらいいのかしら。僕の周囲の貴族の中には、ママはとにかく、あんな無警戒な「正直」な眼の表情の出来る人は、ひとりもいなかった事だけは断言できます。

東京の冬の夕空は水色に澄んで、奥さんはお嬢さんを抱いてアパートの窓縁に、何事も無さそうにして腰をかけ、奥さんの端正なプロフィルが、水色の遠い夕空をバックにして、あのルネッサンスの頃のプロフィル画のようにあざやかに輪郭が区切られ浮んで、僕にそっと毛布をかけて下さった親切は、それは何の色気でも無く、慾でも無く、ああ、ヒュウマニティという言葉はこんな時にこそ使用されて蘇生する言葉なのではなかろうか（七章）

青木京子は直治の遺書に表れる上原の妻について、キリスト教美術の点から分析する[三七]。そこに表れているのは、上原の妻の「純粋無垢」「戦時下の抑圧された女性像」であり、「一六世紀・ルネッサンス時代のレオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロの〈聖母子〉像を想定」しているとする。それは「かず子の未来の〈聖母子〉像と対置されるものとして造形されている」と指摘する。

江種満子はかず子が聖母子化することの論理を挙げている[三八]。かず子が上原の愛人として生きていくことについて「母の顔に「ピエタのマリア」を見出すことは、かず子の母へおよび世間への裏切りが、少くとも母によってだけはゆるされる」ことで、「かず子が裏切りを浄化されるため」とする。さらに、直治の遺書の中に「「ひめごと」を記すことによって上原の妻の存在をクローズアップし、そのイメージを聖母として定着」し、「上原夫人の聖母子化を描くことによってはじめて、かず子の裏切りが、裏切りなどというひけ目っぽい陰気さから解き放たれ」るとする。かず子の論理を肯定するものとして「聖母子」が使われている。

かず子は自分の子を上原の妻に直治の子として抱かせたいことを上原への手紙に書く。かず子の子としてでなく、直治の子として抱かせる意味を考えていく。

大森郁之助は次のように述べる[三九]。

ただ上原の妻に抱かせるだけなら、「捨てられ、忘れかけられ（上原に）た女の唯一の幽かないやがらせ」として、単純で判りやすかろう。だが、直治の子と称すれば上原自身は妻の面前で免責されたことになり、通常の単純ないやがらせとしては無意味な細工という以上に意味の減殺である。

かず子が上原の妻の前で直治の子というように「直治」というリアリティのある言葉を用いてまで上原の子でないことを示すことは、かず子がこれ以上上原を求めないことの意味が強い。〈いやがらせ〉は上原の妻ではなく、上原に向かう。大森郁之助は直治の恋の対象が上原の妻であることから「恋の成就の擬態」と考えることもできるが、かず子がことさら上原の妻を選ぶ点に不明があるとする。

木村りり子は「マリヤの聖性は処女性と母性に由来する」。お母さまと上原の妻が母で少女である点

三七　青木京子「『斜陽』とキリスト教美術―三つの〈聖母子〉物語」（「キリスト教文芸」二二　二〇〇六年四月二五日）

三八　江種満子「『斜陽』の女性―かず子を中心に―」（『解釈と鑑賞』　８１・１０）

三九　大森郁之助『斜陽』結尾の混乱―直治の恋人の設定をめぐって―」（『札幌大学女子短期大学部紀要　８７・２）

で重なり、二人はマリヤであるとする。直治の子として抱かせることについて次のように述べている[四〇]。

直治と私生児とは、直治が初めて血の束縛から逃れた人生を送れる人間になったことを意味するのではないか。作者は直治を復活させるのである。直治の悲劇は、スガちゃんに抱かれる事で昇華する。直治の悲劇の終りを告げるために、かず子はマリヤであるスガちゃんに、自らの子供を直治の私生児として抱かせ、直治をイエスとするのである。

上原の妻をマリヤとすることで、直治が上原の妻の子になり、直治が苦悩した貴族からの解放ということである。

かず子はお母さまや上原の妻にマリヤを重ね、お母さまや上原の妻を聖なるものとして位置付ける。この位置付けはかず子の論理を補強するためであると考える。かず子のベクトルの先は、神聖さがあるところではない。神聖さを自己の論理の肯定に利用していると考える。かず子はお母さまとは違う母を目指している。かず子は「聖母子」を使いながら自己の浄化や昇華を図り、キリスト教の聖母とは違う自分の価値観による独自のマリヤを作り上げているのではないか。

石井洋二郎[四一]は「二組の聖母子」として、かず子と子・上原の妻とかず子の子を挙げている。石井氏は、かず子が未婚の母を選択することについて、「上原の不良的な身体から流し込まれた異質な血との混淆によって、貴族階級の再生産にみずから終止符を打つことを目的とした「道徳革命」の一形式」と見る。

私には、はじめからあなたの人格をとか責任とかをあてにする気持はありませんでした。私のひとすぢの恋の冒険の成就だけが問題でした。さうして、私のその思ひが完成せられて、もういまでは私の胸のうちは、森の中の沼のやうに静かでございます。

私は、勝つたと思つています。

マリヤが、たとい夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあつたら、それは聖母子になるのでございます。

私には、古い道徳を平気で無視して、よい子を得たという満足があるのでございます。（八章）

石井氏はこの部分に聖母子の比喩があることについて、「かず子は今やみずからをマリヤになぞらえ、自分の妊娠を一種の処女懐胎とみなしている。というより、彼女の身体は法律上の父親をもたない私生児を懐胎することで、逆に失われた処女性を取り戻す」とする。

さらに、かず子が自分の子を上原の妻に直治の子として抱かせることについては、「かず子の子供を直治の子供と信じて抱きあげる、上原の妻という代理母」として、法律上の父親を持たない私生児を抱く上原の妻もマリヤとする。これについては、「かず子の作為によって描きだされるもうひとつの聖母子像である」とする。

石井氏の「かず子の作為によって描きだされるもうひとつの聖母子像である」という点に注目したい。かず子は様々な事象を利用し、その時々に応じて、自己の論理に利用している。

四〇　木村りり子『斜陽』の中の母とマリヤ」（「東京女子大学日本文学」九六　二〇〇一年九月三〇日）

四一　石井洋二郎『身体小説論―漱石・谷崎・太宰』（一九九八年十二月　藤原書店）

かず子の聖書の使い方について見ていきたい。

ああ、こうして書いてみると、いかにも私たちは、いつかお母さまのおっしゃったように、いちど死んで、違う私たちになってよみがえったようでもあるが、しかし、イエスさまのような復活は、所詮、人間には出来ないのであろうか。（一章）

私は急に楽しくなって、ふふんと笑った。機にかなひて語る言は銀の彫刻物に金の林檎を嵌めたるが如し、という聖書の箴言を思い出し、こんな優しいお母さまを持っている自分の幸福を、つくづく神さまに感謝した。（二章）

それから、三時間ばかりして、お母さまは亡くなったのだ。秋のしずかな黄昏、看護婦さんに脈をとられて、直治と私と、たった二人の肉親に見守られて、日本の最後の貴婦人だった美しいお母さまが。

お死顔は、殆んど、変らなかった。お父上の時は、さっと、お顔の色が変ったけれども、お母さまのお顔の色は、ちっとも変らずに、呼吸だけが絶えた。その呼吸の絶えたのも、いつと、はっきりわからぬ位であった。お顔のむくみも、前日あたりからとれていて、頬が蠟のようにすべすべしていて、薄い唇が幽かにゆがんで微笑みを含んでいるようにも見えて、生きているお母さまより、なまめかしかった。私は、ピエタのマリヤに似ていると思った。（五章）

戦闘、開始。

いつまでも、悲しみに沈んでもおられなかった。私には、是非とも、戦いとらなければならぬものがあった。新しい倫理。いいえ、そう言っても偽善めく。恋。それだけだ。ローザが新しい経済学にたよらなければ生きておられなかったように、私はいま、恋一つにすがらなければ、生きて行けないのだ。イエスが、この世の宗教家、道徳家、学者、権威者の偽善をあばき、神の真の愛情というものを少しも躊躇するところなくありのままに人々に告げあらわさんがために、その十二弟子をも諸方に派遣なさろうとするに当って、弟子たちに教え聞かせたお言葉は、私のこの場合にも全然、無関係でないように思われた。

「帯のなかに金・銀または銭を持つな。旅の嚢も、二枚の下衣も、鞋も、杖も持つな。視よ、我なんじらを遣すは、羊を豺狼のなかに入るるが如し。この故に蛇のごとく慧く、鴿のごとく素直なれ。人々に心せよ、それは汝らを衆議所に付し、会堂にて鞭たん。また汝等わが故によりて、司たち王たちの前に曳かれん。かれら汝らを付さば、如何なにを言わんと思い煩うな、言うべき事は、その時さずけらるべし。これ言うものは汝等にあらず、其の中にありて言いたまう汝らの父の霊なり。又なんじら我が名のために凡ての人に憎まれん。されど終まで耐え忍ぶものは救わるべし。この町にて、責めらるる時は、かの町に逃れよ。誠に汝らに告ぐ、なんじらイスラエルの町々を巡り尽さぬうちに人の子は来るべし。

身を殺して霊魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と霊魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。われ地に平和を投ぜんために来れりと思うな、平和にあらず、反って剣を投ぜん為に来れり。それ我が来れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑嫜より分たん為なり。人の仇は、その家の者なるべし。我よりも父または母を愛する者は、我に相応しからず。我よりも息子または娘を愛するものは、我に相応しからず。又おのが十字架をとりて我に従わぬ者は、我に相応しからず。生命を得る者は、これを失い、我がために生命を失う者は、これを得べし。」

戦闘、開始。

もし、私が恋ゆえに、イエスのこの教えをそっくりそのまま必ず守ることを誓ったら、イエスさまはお叱りになるかしら。なぜ、「恋」がわるくて、「愛」がいいのか、私にはわからない。同じもののような気がしてならない。何だかわからぬ愛のために、恋のために、その悲しさのため

に、身と霊魂とをゲヘナにて滅し得る者、ああ、私は自分こそ、それだと言い張りたいのだ。（六章）

私は、勝ったと思っています。

マリヤがたとい夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあったら、それは聖母子になるのでございます。（八章）

これらが聖書の引用としてあげられるが、かず子の引用の仕方について次のように考える。

かず子は聖書の教えを守るという意味ではなく、自分の都合に合うように用いている。それは、自分の考えを補強し、次のステップにするためである。自分の都合に合わせて引用するため、引用される内容に一貫性はない。また、引用される内容とかず子自身を完全には重ねてはいない。

かず子が「マリヤ」と「聖母子」をどのように引用しているのかについて考えたい。

マリヤがたとい夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあったら、それは聖母子になるのでございます。（八章）

かず子は自身をマリヤに重ねて考えている。父のない子と母という状況を重ねている。ここであえてマリヤを持ち出すのは、私生児と母ということに対して、価値を付与するためである。一般的に肯定的に受け入れがたいことに対して、価値を付与し、かず子は論理を正当化していく。かず子はこのようにして、自己の論理を補強し、力強さを得ている。「マリヤに輝く誇りがあったら、聖母子になる」という論理は、私生児と母ということをマリヤとは無関係にかず子が作り出す論理である。

私には、古い道徳を平気で無視して、よい子を得たという満足があるのでございます。（八章）

「マリヤがたとい夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあったら、それは聖母子になるのでございます。」という、聖書におけるマリヤと違う使い方は「古い道徳」の打破とつながる。かず子が受胎する子の父は、上原であり、上原は社会的な評価として肯定的価値を持ち合わせていない。かず子は社会的な評価として輝く誇りを上原から得ない。かず子は世俗的で反道徳的ところを上原に求めていた。そのため、かず子は自己の行動を正当化させるために自分で価値をつける。かず子は「マリヤ」という表現を用いることで、自分の状況と論理に世俗的価値を付ける。

かず子は、反道徳的なものとして聖書を使う。聖書を自分の論理に合わせて使い、世俗的になることを目指す。

こいしいひとの子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます。（八章）

「こいしいひとの子を生み、育てる事」は、かず子が更級日記の少女ではない、自分の強さを感じていることであろう。

あなたの人格のくだらなさを、私はこないだも或るひとから、さまざま承りましたが、でも、私にこんな強さを与えて下さったのは、あなたです。私の胸に、革命の虹をかけて下さったのは、あなたです。生きる目標を与えて下さったのは、あなたです。

私はあなたを誇りにしていますし、また、生れる子供にも、あなたを誇りにさせようと思っています。（八章）

かず子にとっては、「革命の虹」をかけた、つまり恋に気付かせ、こいしいひとの子を生み、育てる事を可能にさせたのが上原であり、そのことにおいて上原を誇りとしている。

しかし、かず子のこの行動はかず子にとって大きな意味のことであり、一般社会においては特別大きな意味のことではない。あくまでも、かず子にとっての道徳革命である。

かず子が、貴族ではなく、一個人としての生き方を模索する上で、きっかけが上原であり、単独で道を切り開く上で必要としたのは、自分の論理を補強するための様々なものであったと考えることができる。

かず子がこのように、行動を起こしていくことは必然であった。母はいづれ老い去っていく。これまで自分を育んでくれた、爵位などの貴族制度からも切り離される。弟は薬物中毒。かず子は、個人として、生きて行く道を自ら作っていく必要があった。かず子が自らの道を作っていく上で、対峙させたものが道徳である。より世俗的ところに本質を求め、道徳に反するものに焦点を当てていく。

かず子は、私生児を産む汚らわしい失策を「マリア」として聖化し、私生児と母という汚らわしい立ち位置と対峙している。

かず子が上原の妻に、自分の子を直治の子と言って、抱かせたいのはなぜであろうか。

石井氏[四二]は次のように述べている。

ここに提示されているのは、かず子の作為によって描き出されるもうひとつの聖母子像である。「スガちゃん」への恋情を秘めたままみずからの命を絶った「直治といふあの小さい犠牲者」に代わって、彼女は自分の子供を媒介として弟の思いを遂げさせようとするのだ。かず子の子供を直治の子供と信じて抱きあげる、上原の妻という代理母―このとき彼女は、かず子とともにもうひとりのマリヤになる。いや、すでにこの世にない「お母さま」を入れれば、マリヤは三人いると言うべきかもしれない。

ここでも、かず子によって上原の妻もマリヤとして描き出されるとする。直治の子供として、上原の妻に抱かせることは、直治の恋の成就として、直治が自分の子供を「スガちゃん」に抱かせたいであろうという、かず子の思いである。直治は上原の妻に恋をしながらも、それを叶えることができなかった。自分にある貴族意識と上原の妻という叶わぬ恋と闘い、自ら滅びを選んだ弟への思いである。かず子は直治と同じような境遇に立ちながらも、貴族意識を直治ほど持っておらず、また、独自の論理で上手く、成否は別として一つの結果にたどり着くことができた。

石井氏の言うように上原の妻をマリヤと見ることは、かず子がマリヤとして自己の論理に肯定的価値を付加したことと同じと考える。直治の子を抱く上原の妻は、その瞬間に夫のない子を抱く母としてマリヤになぞらえられる。上原の妻をマリヤとすることで、直治の恋した人の肯定的価値が付加され、直治の上原の妻に対する恋情や直治の行動にも価値があったとすることができるのである。

かず子が直治の思いを叶えるために、上原の妻に直治の子と言って抱かせることで処女懐胎となる。この場合も、上原の妻をマリヤとするところは、日常的に考えられないことを聖母子を使って論理づけるかず子の方法である。

四二　石井洋二郎『身体小説論―漱石・谷崎・太宰』（一九九八年十二月　藤原書店）

第二節　かず子のマリヤ意識

かず子は、自分自身をマリヤに重ね、上原の妻もマリヤに重ねる。かず子がどのようしてマリヤを持ち出すのか、その思考を探っていきたい。

かず子の思考は連想的で一貫したものではない。だが、かず子がマリヤを持ち出すことに至ることを探る手がかりがいくつか示されている。

かず子は、上原を追って、上原の自宅を訪れた際、上原の妻に鼻緒の替えをいただく。上原の妻のうしろには、十二、三歳の娘もいた。かず子は、この時、上原の下へ向かう一心であったが、「わびしさが猛然と身のまわりに押し寄せて来る気配に堪えかね、お座敷に駆け上がって、まっくら闇の中で奥さまのお手を掴んで泣こうかしらと、ぐらぐら烈しく動揺」する。この時は、上原への思いが強く、上原の妻のやさしさ、娘と不憫な状況下でも堪えしのぐ姿を掻き消すことができた。しかし、この時の思いは、かず子の心中から抹消はされず、無意識的に残っていたのではないか。

かず子は、上原と再会し、一夜を明かした際、次のように感じている。

> 犠牲者の顔。貴い犠牲者。
> 私のひと。私の虹。マイ、チャイルド。にくいひと。ずるいひと。
> この世にまたと無いくらいに、とても、とても美しい顔のように思われ、恋があらたによみがえって来たようで胸がときめき、そのひとの髪を撫でながら、私のほうからキスをした。
> かなしい、かなしい恋の成就。（六章）

かず子は、上原と再会し、恋が一度冷めてしまうのだが、上原の疲れはてている顔を見て、思いが変化してくる。かず子は、上原に犠牲者の顔を感じるが、ここで注目したいのは、上原に対してとも受け取れる「マイ、チャイルド」である。上原の子を欲しいと願っていたかず子であるため、上原の子の意味と解釈できるが、かず子が上原の姿を見て、まるで子供のように感じたとも考えられる。かず子は、上原の疲れ果てた姿を目にし、上原に対するやさしさを持ったことを感じたのではないだろうか。このやさしさは、母性的なものに近いと考える。手を差し伸べるかず子の中に、自分とマリヤを重ねるところがあったのではないか。

かず子は様々な場面でマリヤを持ち出し、論理づけている。それぞれのマリヤの使い方は異なるが、かず子のマリヤの意識を感じさせる。

五章の末尾で、かず子はお母さまの姿を「ピエタのマリヤ」に似ていると思う。かず子の意識として、美しさや哀れな姿に対して「マリヤ」が出される。

かず子はお母さま・上原の妻・自身をマリヤで価値づける。かず子がマリヤとするのは、美しさ、気品、気高さ、哀れな状況と母性である。

お母さまのように純真無垢、上原の妻のように慈悲的という内面の美しさの点でお母さま・上原の妻に共通している部分と考えられる。また、哀れな状況と母性という点では、上原の妻とかず子が共通する。かず子の場合は、自分でそういう状況を作り上げ、論理づけている。

かず子が八章で「マリヤが、たとい夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあったら、それは聖母子になるのでございます。」とするところは、上原の妻の姿があり、上原を子供のように感じたことといったことを経て、自分をマリヤと重ねたのではないか。

かず子が見い出す価値は、哀れな状況下でも、哀れと感じずに誇りを持って生きるということである。かず子は世俗的なところを求めて価値を付け、論理づけ肯定していく。

「聖母子」という言葉を用いて、価値づけ、力強さを得ようとする。そして、自分の次へのステップへ向かおうとしていることが窺われる。

かず子のマリヤ意識は様々な場面にあり、そこにあるかず子の取り出し方は同じではない。しかし、かず子のマリヤ意識が内在していることが感じられる。

第六章　『斜陽』と『斜陽日記』の比較

第一節　『斜陽』と『斜陽日記』の比較からの語るかず子と書くかず子

『斜陽』は私（かず子）によって語られる。そして、一章の「ああ、何も一つも包みかくさず、はっきり書きたい。」「恋、と書いたら、あと、書けなくなった。」という言葉から、書くかず子の存在を提示させられる。『斜陽』には語る行為と書く行為が複雑に融合して存在している。

小森陽一[四三]は『斜陽日記』[四四]解説において、下曽我の山荘に移った直後、病に倒れて入院した母が回復した後の記述に書いている現在からの感想が挿入されている部分を挙げて次のように述べている。

「二年の月日」あるいは、「二人きりで過ごした二年間」という記述には、母の死によって区切られ、限定された時間意識がはっきりとあらわれている。「神さまが、二年の月日をおめぐみ下さったのではないかしら？」としか「思えない」、記述する「私」は、明確に事後的で回想的な位置に身を置いている。しかも、「下曽我の三年間」とあるのだから、母の死後、山荘に娘が一人残された年月も、この回顧する時間に組み込まれている。その意味で、『斜陽日記』における「私」という一人称は、日記体の一人称と、回想的な手記を統括する一人称との間でゆらいでいる。

小森氏が挙げているのは『斜陽日記』（三一Ｐ～三三Ｐ）の部分である。

あの日、私たちは、あんなことを話していたけど、ほんとは、あの最初の病気の時、お母さまは、亡くなる運命だったのではなかろうか？　お母さまは、それを、それと識らずに予感して、あんなに、ぐずぐずしていらっしゃったのではないかしら？　下曾我に於ける死の予感。再びかえれない山のトンネルへ這入って行くような気持……。

だけどお母さまは助かった。女の姉妹もなく、親身の伯母さまもない母と娘のために、心ゆくまで別れを惜しむことが出来るように、神さまが、二年の月日をおめぐみ下さったのではないかしら？　私には、そうとしか思えない。下曾我の三年間は、全く、そのために、あったような気がするのだけれど。

二人きりで過した二年間。それは、広い城壁をめぐらしたお城のなかに、二人きりでいるようなものであった。しかも、そのお城は、暗い陰気な、シェクスピアのお城のような城ではない。明るい、愉しいお城。雅叙園みたいに、少しどうかしていて、たいへん陽気なお城である。それに庭の眺めは絵のように美しく、箱根の彼方の西方浄土は、夢のような薔薇いろだった。

『斜陽日記』では、「私」の「下曽我の三年間」、つまりお母さまと二人きりで過ごした二年間とお母さまの死後の時間のことを含めて回想している。小森氏の言う、「日記体の一人称と、回想的な手記を統括する一人称」がここで示されている。

『斜陽』では一章後半部分に回顧する部分がある。「日記体の一人称と、回想的な手記を統括する一人称との間でゆらいでいる」ところとして重なる。

それから、きょうまで、私たち二人きりの山荘生活が、まあ、どうやら事も無く、安穏につづいて来たのだ。部落の人たちも私たちに親切にしてくれた。ここへ引越して来たのは、去年の十二月、それから、一月、二月、三月、四月のきょうまで、私たちはお食事のお支度の他は、たい

四三　小森陽一『斜陽日記』「解説」（『斜陽日記』小学館文庫　一九九八年六月）

四四　太田静子『斜陽日記』（小学館文庫　一九九八年六月）

ていお縁側で編物をしたり、支那間で本を読んだり、お茶をいただいたり、ほとんど世の中と離れてしまったような生活をしていたのである。二月には梅が咲き、この部落全体が梅の花で埋まった。そうして三月になっても、風のないおだやかな日が多かったので、満開の梅は少しも衰えず、三月の末まで美しく咲きつづけた。朝も昼も、夕方も、夜も、梅の花は、溜息の出るほど美しかった。そうしてお縁側の硝子戸をあげると、いつでも花の匂いがお部屋にすっと流れて来た。三月の終りには、夕方になると、きっと風が出て、私が夕暮の食堂でお茶碗を並べていると、窓から梅の花びらが吹き込んで来て、お茶碗の中にはいって濡れた。四月になって、私とお母さまがお縁側で編物をしながら、二人の話題は、たいてい畑作りの計画であった。お母さまもお手伝いしたいとおっしゃる。ああ、こうして書いてみると、いかにも私たちは、いつかお母さまのおっしゃったように、いちど死んで、違う私たちになってよみがえったようでもあるが、しかし、イエスさまのような復活は、所詮、人間には出来ないのではなかろうか。お母さまは、あんなふうにおっしゃったけれども、それでもやはり、スウプを一さじ吸っては、直治を思い、あ、とお叫びになる。そうして私の過去の傷痕も、実は、ちっともなおっていはしないのである。

ああ、何も一つも包みかくさず、はっきり書きたい。この山荘の安穏は、全部いつわりの、見せかけに過ぎないと、私はひそかに思う時さえあるのだ。これが私たち親子が神さまからいただいた短い休息の期間であったとしても、もうすでにこの平和には、何か不吉な、暗い影が忍び寄って来ているような気がしてならない。お母さまは、幸福をお装いになりながらも、日に日に衰え、そうして私の胸には蝮が宿り、お母さまを犠牲にしてまで太り、自分でおさえてもおさえても太り、ああ、これがただ季節のせいだけのものであってくれたらよい、私にはこの頃、こんな生活が、とてもたまらなくなる事があるのだ。蛇の卵を焼くなどというはしたない事をしたのも、そのような私のいらいらした思いのあらわれの一つだったのに違いないのだ。そうしてただ、お母さまの悲しみを深くさせ、衰弱させるばかりなのだ。

恋、と書いたら、あと、書けなくなった。（「斜陽」一章）

回想的な部分は、「それから、きょうまで、私たち二人きりの山荘生活が、まあ、どうやら事も無く、安穏につづいて来たのだ。」というところである。去年の十二月から四月のきょうまでについての回顧である。『斜陽日記』では、「神さまが、二年の月日をおめぐみ下さったのではないかしら？」と回顧しているのは「私」であるが、『斜陽』で回顧しているのは、お母さまである。かず子の場合、お母さまの言葉を使いながら、お母さまとは対立する自分自身の思考を作り出している。

お母さまもお手伝いしたいとおっしゃる。ああ、こうして書いてみると、いかにも私たちは、いつかお母さまのおっしゃったように、いちど死んで、違う私たちになってよみがえったようでもあるが、しかし、イエスさまのような復活は、所詮、人間には出来ないのではなかろうか。（一章）

右は日記的な性格と回想的な性格がともに存在する部分である。

また、『斜陽』の場合には「こうして書いていると」「恋、と書いたら、あと、書けなくなった。」とある。このかず子の語る（書く）行為を日記的と回想的ということで考えると、かず子の書くという行為の中には回顧するという行為が含まれている。この部分の『斜陽日記』と『斜陽』を比較すると、『斜陽』は書く行為が示されている。

第二節　『斜陽』と『斜陽日記』の対応

『斜陽』は『斜陽日記』を基にして描かれていると言われる。渋谷紀子氏[四五]は「太宰の『斜陽』は、太田静子の『斜陽日記』に題材を取ってパロディー化した作品というよりも、太田静子との共同作品としての小説『斜陽』と、見た方が真実に近い」とし、設定及び情景が重なる箇所と異なる箇所を挙げている。渋谷氏は、項目を表として示し、「蛇」については文を示して比較している。

このような先行研究を基にして、『斜陽』と『斜陽日記』がどのように対応しているのかについて、全ての対応を示す。『斜陽日記』がどの程度活用されているかについては、相馬正一「太宰治「女生徒」成立の背景―有明日記との相関をめぐって―」[四六]を参考にした。

活用程度は相馬正一「太宰治「女生徒」成立の背景―有明日記との相関をめぐって―」において、「◎印は殆んど全面的に依拠、○印は半分ほど活用、△印は一部分だけ活用、×印は全く依拠無し」を参考にした。）

『斜陽』『斜陽日記』対応一覧表

活用程度は◎は殆んど全面的に依拠、○は半分ほど活用、△はトピックとしての活用。

章	内容	「斜陽」 頁	「斜陽」 部分	「斜陽日記」 頁	「斜陽日記」 部分	活用程度・補足
一	「あ。」	七〇	朝、食堂でスウプを一さじ、～「あ。」と幽かな叫び声をお挙げになった。	七四	「ああ。」と叫んだ。昼間、お母さまが、御堂の扉の前でなされたように。	△ 「斜陽」では「あ。」、「斜陽日記」では「ああ。」。
	私の朝ごはん	七四～七五	私は小さい時から、朝ごほんがおいしくなく、～首を振った。	一六一	少女時代から朝の御飯がおいしくなくて、～と仰つしゃた。	△ 私が小さい時から朝ごはんがおいしくないことが同じ。
	「あ。」	七五～七六	「あ。」と私が言った。～あ、という幽かな叫び声が出るものなのだ。	七四	「ああ。」と叫んだ。昼間、お母さまが、御堂の扉の前でなされたように。	△ 「斜陽」では「あ。」、「斜陽日記」では「ああ。」。
	直治の消息	七六	お母さまは、もう直治には逢えないと覚悟している、	五〇	「私、覚悟なんてするのいやだわ。通には又、逢えると思っているんですもの。」	△ お母さまと私が戦地の弟とまた逢えるかどうか案じていることが同じ。
	蛇の話	七八～八三	蛇の話をしようかしら。～理由のわからない身悶えをした。	六九～七四	十一月も半ば過ぎた或る日、～理由の分らない身悶えをした。	◎ 「斜陽日記」は冒頭で「私は一つ悪いことをした」と前置きされている。
	山荘引越し打診	八三～八四	私たちが、東京の西片町のお家を捨て、～とてもたまらなく淋しそうに笑っておっしゃった。	九	銀座へ通い始めて一月もたった頃、～眼のさめる思いがした。	△ 叔父さまの勧めは同じ。「斜陽」はお母さまが経済的に苦しさから叔父さまに言われるまま移住するのに対し、「斜陽日記」はお母さまがお金もないのに移住に積極的にみせる点は違う。

四五　渋谷紀子「太宰治『斜陽』の女性」（『日本文学ノート　第三十一巻』宮城学院女子大学日本文学会　一九九六年）

四六　相馬正一「太宰治「女生徒」成立の背景―有明日記との相関をめぐって―」（『太宰治研究７』和泉書院　二〇〇〇年二月）

引越し準備	八六～八八	それから毎日、～私は石のように凝っていた。	二三～二五	翌る日直ぐ、～眼をひらいて考えていた。	◎	「斜陽日記」は子供達がお母さまのことを「ラネーフスカヤ夫人」と呼んでいる。
山荘到着とお母さま発熱	八九～九二	玄関にはいってみると、～ひとまずその日に帰京なされた。	二六～二八	山荘へ着くと、～それも効かなかった。	◎	「お乳の先に水平線」という件は「斜陽日記」一七七頁「ああ、静かな午前。晴れた、暖かい日。私は胸の高さに光っている海を見ていた。」とある。
お母さま発熱回復と雪	九三	あくる日、～硝子戸越しに伊豆の雪を眺めた。	二九～三〇	その日は珍らしく雪が降っていた。～三人は子供のようにうきうきしていた。	△	「斜陽」医者往診。「斜陽日記」入院。
西片町回顧とかずず子再生感・梅	九四～九五	「こうして坐っていると、以前の事が、皆ゆめだったような気がする。～お茶碗の中にはいって濡れた。	三〇～三一	朝食後、～もう生きていられない気がして。」	◎	「斜陽」ではお母さまが「神さまが私をいちどお殺しになって、それから昨日までの私と違う私にして、よみがえらせて下さつた」と言う。
			三五	梅の花は、～静かに御堂へ流れて来た。	◎	
火事	九六～一〇四	蛇の卵の事があってから、～しっかりしなければならぬ。	一〇二～一一〇	その夜、～そうしたら忽ち家中火の海となってしまったに違いない。	◎	「斜陽日記」は空襲警報中。
ヨイトマケ	一〇五～一一〇	戦局がそろそろ絶望になって来た頃、～べつに苦痛を感じない女になった。	八九～九四	勤労奉仕は、～苦しい仕事をした。	◎	「斜陽日記」は私が勤労奉仕に行きたくない様子が具体的。「斜陽」は私がヨイトマケにより丈夫になり畑仕事にも苦痛を感じない女になる。
下品な女の意識	一一一	あの頃から、～太って行くような心地がしてならない。	六	私は、ふと、～けものになったら、生きられない。	△	「斜陽」は「粗野な下品な女」、「斜陽日記」は「けものになって生きてみたい」。
季節の花と死	一一一～一一二	「夏の花が好きなひとは、～二人、笑った。	四八	「お母さまは、菊が一番お好きでしょう。」「やっぱり、お母さまは、秋死ぬのかしら。」	△	「斜陽」は夏の花。「斜陽日記」は秋の花。
女中奉公話と弟への嫉妬	一一四～一一八	「御奉公って、女中の事？」～特殊な気持になって行った。	一五三～一五七	夕方、畑から帰って来ると、～長いことつっ立って泣いていた。	○	「斜陽」は女中奉公が契機「斜陽日記」は弟の夜着をほしたままにしておいたのが契機。「斜陽」は或る人が恋しい気持が表出。
お母さまの「裏切られた」	一一九～一二〇	「あなたが、山木さまのお家から出て、～どうにもならぬ事だし、……」	四六	「あなたが家へ帰って来た時、～もう、結婚していらして。」	◎	
胸苦しい波	一二一～一二二	どうしても、～編物をつづけてゆく事が出来なくなった。	七六	むしろ、～全身の力が手の指の先からふっと抜けてしまうような心地がした。	○	不安な感情を表している部分は共通しているが、用いられている場面が異なる。「斜陽」は編物をしている時。「斜陽日記」はお母さまが蛇の夢を見た時。
編物と色の調和	一二二～一二三	このごろは雨が陰気に降りつづいて、～「お母さま。」と思わず言った。	三八～四〇	私は毎日午後になると～ガラス戸のなかにいらっしゃるのに。」	◎	空と毛糸の調和を「斜陽」ではモネー、「斜陽日記」ではルノアルやロオランサンとする。

薔薇	一二四～一二五	お屋敷のお縁側のすぐ前の薔薇。～頬が焼けるみたいに熱くなった。	五二～五四	藤の花のつぎに薔薇が咲いた。～少しやんちゃを妹だと思った。
直治の帰還	一二五～一二六	直治は、十日ほど前に、～そこへ直治が帰還して来たのだ。	一四九～一五〇	月末に武が復員して来た。～ほっとした顔つきになっていた。
お母さまの舌の病気とマスク	一二五～一二六	その二、三日前からお母さまは、～私はいらいらしていた。	五六～五八	お母さまの舌の病気は、～と仰っしゃった。
	一二八～一二九	あくる朝、～お母さまが嘘をついていらっしゃるように思われてならないのだ。		
山木とのこと	一二〇	「恋中だなんて、ひどい事を。山木さまのほうで、ただそう邪推なさっていただけなのよ。」	四六～四八	「x さんが、お怒りになったのは、静子は聖純だった昔にかえったのだ。
	一四三～一四四	「私には、恋人があるの。」～それっきりになってしまったのだ。		
四				
女大学	一四七	あなたに、御相談してみたい事があるのです。～お指図をお願いするつもりなのです。	四四	御父上は、～「凡女子に愛し過して、恋に育てぬれば。」
	一四八	私はただ、私自身の生命が、～「女大学」にそむいても、いまの生活からのがれ出たいのです。	四五	「女大学」を～手にとるのがこわかったのである。
かず子とおじいさんとの縁談	一五一	そのお方のお名前は、～私をもらいにこの山荘にやって来ました。	一一九～二一	エさんは五十過ぎた独身の文士である。～幸福になれないと思うのであった。
	一五二	その師匠さんが、～私も、無理な話だと思っていたわ。」		
縁談話と恋の心・乙女の匂い	一五二～一五四	その頃、師匠さんは軽井沢の別荘のほうにいらしたので、～女の生活が、やっぱり、あるんですのね。	一二九～三〇	翌日の午後エさんがいらっしゃった。～私はびっくりして、お母さまを眺めた。

○	薔薇を持ってきてくれたのは「斜陽」は叔父さま、「斜陽日記」では工学博士。私の年齢「斜陽」は二九歳、「斜陽日記」三二歳。「斜陽日記」では私が薔薇を姉妹に例えるところがある。	
△	「斜陽」では直治が家の趣味の悪さを帰宅直後に指摘。「斜陽日記」の武に比べると言堂に不良性が見られる。	
○	「斜陽日記」ではお母さまが自分は舌の病気で死ぬのではないかと言う。	
○	マスクを勧めたのは「斜陽」は直治、「斜陽日記」は私。	
◎		
△	「斜陽」はかず子の語りが多い。「斜陽日記」は静子と母の会話である。「斜陽」は夫婦軋轢をドレスの生地を間違って裁断と表現。「斜陽日記」では私が当時を回想した後、聖純だった昔にかえったとする。	
△	「斜陽日記」では「女大学」は父の教えとして提示されている。	
△	見合いの相手が「斜陽」は六〇過ぎのおじいさん、「斜陽日記」は五〇過ぎの文士。	
△	私の断る意志やお母さまの考えは共通。「斜陽日記」では私の「恋のこころ」の必要性を示す。	
◎	「斜陽」は私が子供を欲しいことや子供を育てるためのお金が求めることを言う。乙女の匂いが残っているのは「斜陽」二九、「斜陽日記」三三。「斜陽日記」では私があの方に逢いたくなる。	

桜の園	一五五～一五六	私は笑いました。～世間話を少ししてお帰りになってしまいました。	三五	家へ帰って、～だまって、うつむいて。	△
霧雨・ミルク・べったり	一五九～一六一	きょうも雨降りになりました。～……殴るわよ。	一三〇～一三二	その夜は、うつくしい月夜であったが、～楽しそうに笑い合った。	◎
五					
お母さまの咳と熱	一六七～一六八	一夜、ひどいお咳が出て、～水薬と散薬をくださる。	一三三～一三四	あの朝、お母さまは本当に元気そうだった。～この日は朝からはげしい雨が降っていた。	◎
			一三四	お母さまの熱は、～そのうち下りますとばかり仰っしゃった。	◎
お母さまが浸潤	一六八～一七〇	直治は相変わらずの東京出張で、～そうしてお母さまのお熱が下るとよい。	一三五～一三六	それから一日おいて、～浸潤を起しているだけなんですもの。大丈夫よ。」	○
お母さまは結核	一七〇～一七四	和田の叔父さまにお葉書を差し上げてから、～心の中で三宅さまのご診断を強く打ち消した。	一三六～一四〇	一週間ばかりして、兄上がいらしゃった。～こんなに心配しなくても、いいような気がする。	◎
HOTEL SWITZERLAND	一七四～一七八	十月になって～ローザはマルキシズムに、悲しくひたむきの恋をしている。	一四一～一四六	私は立って、～このローザの恋が、私のころをとらえてしまった。	◎
更級日記	一七九～一八一	あれは、十二年前の冬だった。～どこやらデカタンと紙一重のなまめかしさがあった。	一四六～一四九	あれは、十五年前の冬だった。～ローザが革命に恋したことを考えて、そうして眠った。	◎
お母さまの手のむくみ	一八二	そうして或る朝、～私は眼をそらし、床の間の花籠をにらんでいた。	一六五～一六六	お母さまの右の手のむくみを発見したのは、～と云って、顔をあげた。	◎
お母さまの手のむくみを直治に告げる	一八三～一八八	涕が出そうで、～と言いながら、滅茶苦茶にこぶしで眼をこすった。	一六七～一六八	夕方、武が会社から帰って来て、～と言うと武も、こぶしで眼をこすっていた。	○
お母さまの口の荒れ	一八四	翌日、手の腫れは、～蜜柑のジュースも、口が荒れて、しみて、飲めないとおっしゃった。	一六八	翌日、手の腫は、～お蜜柑のジュースも、口が荒れて、飲めない、と仰っしゃった。	◎

「斜陽」は私が見合い相手のおじいさんとのやりとりで「桜の園」を思い出す。「斜陽日記」は私が「桜の園」を読み、梅園からドラマを書くことを考える。この時に私が「滅び行く、日本の、「さくらの園」。」と言っていることに注目したい。

「斜陽日記」では、見合いについて私がお母さまに嫁に行けと言われたら行く、お母さまも私が嫁に行くといったら反対しなかったと言う。「斜陽」では上原のことにも言及し、お母さまの札つきの不良なら安心という言葉に私はうれしく思う。

「斜陽」では花の話、直治でもお母さまの生きるたのみの柱になっていることにつらく思うことが続いて書かれる。

「斜陽」一二年前の冬。「斜陽日記」一五年前。「斜陽」では私がお母さまの態度にデカダンと紙一重のなまめかしさを感じる。

看護婦を置く	一八四～一八五	「毎日いそがしくて、疲れるでしょう。～それから直治に眼くばせして立ち上っ	一七二	三日の夕方、～「看護婦さんをやとって頂戴。」と仰っしゃった。	◎
蛇の夢	一八七～一八九	しばらくして、小さいお声で、～ただお母さまのお傍にいようと思った。	七五～七六	翌朝披璃戸をあげると、～全身の力が手の指の先からふっと抜けてしまうような心地がした。	△
			一六八～一六九	二十八日の朝～ただお母さまのお傍にいようと思った。	○
お母さまの枕元で編物	一八九	そうしてその翌る日から、～つい涕で編目が見えなくなった。	一六九	午後は、枕元で、編物をした。～涕で編目が見えなくなった。	◎
陛下の写真	一九〇	お母さまは、こうして寝ていらっしゃると、～と仰っしゃった。	一七五	食事は、もう、全然通らなかった。～私は、新聞を、お母さまの顔の上にかざしてあげた。	△
お母さまはいま幸福	一九〇	私は、お母さまはいま幸福なのではないかしら、～たしかにいま、幸福なのである。	一七七	「お母さま、私、いままで、ずいぶんわがままだったのね。」～不思議な薄明りの気持。	△
かず子の生きることの意識と蛇の姿	一九〇～一九二	静かな、秋の午前。～何か自分が油断ならぬ悪がしこい生きものに変って行くような気分になった。	一七五～一七六	暖かい陽が、縁側に射してきた。～亡くなるのではないかしらと考えた。	◎
			一七八	お母さまがいよいよ亡くなるということがきまると、～それこそ天上の幸福に通	○
お母さまの最期	一九二～一九五	その日のお昼すぎ、～私は、『ピエタのマリアに似ていると思った。	一七八～一八二	お昼過ぎ、～いつまでもお母さまの横顔を眺めていた。	◎

看護婦を置く					
蛇の夢	蛇の夢の内容が「斜陽」は縁側の沓脱石の上の赤い縞の女の蛇、「斜陽日記」は蛇が私の胸の上を這う。		「斜陽」ではお母さまの夢の話を聞いて実際に蛇を見てお父さまの時と同じで、「斜陽日記」では私も蛇の夢を見て、悲しみの底を突き抜けた心の平安を感じる。		
お母さまの枕元で編物					
陛下の写真		「斜陽」では陛下の写真についてお母さまと私が言及している。お母さまは陛下の姿を「お老けになった。」と見る。戦前との変化に負の思いを抱く。私は陛下が解放され「お喜びになっている」と思っている。お母さまと私の陛下に対する見方から時代の見方に差異があると考えられる。			
お母さまはいま幸福		「斜陽」はお母さまが陛下の写真を見て「泣きたくても、もう涕が出なくなったのよ。」に対して、私がお母さまはいま幸福と思う。陛下の写真の直後である。「斜陽日記」は陛下の写真の後、私が自分のわがままについて話しお母さまが「泣きたくても、もう、涕が出なくなった。」と言い、お母さまがいま幸福と思う。「斜陽」は陛下の存在が際立つ。「斜陽日記」はお母さまの悲しみの底を突き抜けた幸福感に私が関連しているようにもさせていると見る。			
かず子の生きることの意識と蛇の姿		「斜陽日記」ではお母さまの死は私の思いをしとげるためだと考える。お母さまは私の犠牲者という意識。			
		「斜陽日記」では私が生の美しさにも言及。			
お母さまの最期		「斜陽」では私がお母さまを「日本で最後の貴婦人」「ピエタのマリアに似ている」と思う。			

第三節　『斜陽』と『斜陽日記』の差異

『斜陽』が『斜陽日記』のエピソードの重なる部分は、一章～五章である。内容の活用程度については、前述の通りである。

『斜陽日記』が時系列に書かれ、『斜陽』は『斜陽日記』のエピソードを部分的に利用して構成している。『斜陽日記』の時系列通りの活用でもない。

『斜陽日記』が時系列通りで日記に近い形であり、『斜陽』より「書く意識」が出ている。

『斜陽』との差異から、かず子の語る（書く）ことについて考えたい。

出戻ってきたことについての場面

『斜陽』と『斜陽日記』の前半部はほぼ同じである。

『斜陽』（二章）

「あなたが、山木さまのお家から出て、西片町のお家へ帰って来た時、お母さまは何もあなたをとがめるような事は言わなかったつもりだけど、でも、たった一ことだけ、（お母さまはあなたに裏切られました）って言ったわね。おぼえている？　そしたら、あなたは泣き出しちゃって、……私も裏切ったなんてひどい言葉を使ってわるかったと思ったけど、……」

けれども、私はあの時、お母さまにそう言われて、何だか有難くて、うれし泣きに泣いたのだ。

「お母さまがね、あの時、裏切られたって言ったのは、あなたが山木さまのお家を出て来た事じゃなかったの。山木さまから、かず子は実は、細田と恋仲だったのです、と言われた時なの。そう言われた時には、本当に、私は顔色が変る思いでした。だって、細田さまには、あのずっと前から、奥さまもお子さまもあって、どんなにこちらがお慕いしたって、どうにもならぬ事だし、……」

「恋仲だなんて、ひどい事を。山木さまのほうで、ただそう邪推なさっていただけなのよ。」

「そうかしら。あなたは、まさか、あの細田さまを、まだ思いつづけているのじゃないでしょうね。行くところって、どこ？」

「細田さまのところなんかじゃないわ。」

「そう、そんなら、どこ？」

「お母さま、私ね、こないだ考えた事だけれども、人間が他の動物と、まるっきり違っている点は、何だろう、言葉も智慧も、思考も、社会の秩序も、それぞれ程度の差はあっても、他の動物だって皆持っているでしょう？　信仰も持っているかも知れないわ。人間は、万物の霊長だなんて威張っているけど、ちっとも他の動物と本質的なちがいが無いみたいでしょう？　ところがね、お母さま、たった一つあったの。おわかりにならないでしょう。他の生き物には絶対無くて、人間にだけあるもの。それはね、ひめごと、というものよ。いかが？」（一一九P～一二〇P）

『斜陽日記』

「あなたが家へ帰って来た時、お母さまは、あなたをとがめるようなことは、何も言わなかったつもりだけど、でも、たったひと言だけ、（お母さまは裏切られました）って言いました。おぼえている？　そしたら、あなたは、泣き出してしまって……お母さまは裏切ったなんてひどい言葉を使って悪かったと思ったけれど……」

けれども、私はあの時、お母さまにそう言われて、何んだか有難くて、うれし泣きに泣いたのだった。「お母さまがね、あの時、裏切られたって言ったのは、あなたがKさんのお家を出て来たことじゃなかったの。Kさんから(静子はMを愛しているのです)と言われた時なの。そう言われた時には、本当に、私は顔色が変る思いでした。Mさんのことはよく知っていたけれど、Mさんだって、もう、結婚していらして。」（四六P）

前夫についての場面

『斜陽』（三章）

「私には、恋人があるの。」

或る日、私は、夫からおこごとをいただいて淋しくなって、ふっとそう言った。

「知っています。細田でしょう？　どうしても、思い切る事が出来ないのですか？」

私は黙っていた。

その問題が、何か気まずい事の起る度毎に、私たち夫婦の間に持ち出されるようになった。もうこれは、だめなんだ、と私は思った。ドレスの生地を間違って裁断した時みたいに、もうその生地は縫い合わせる事も出来ず、全部捨てて、また別の新しい生地の裁断にとりかからなければならぬ。

「まさか、その、おなかの子は。」

と或る夜、夫に言われた時には、私はあまりおそろしくて、がたがた震えた。いま思うと、私も夫も、若かったので。私は、恋も知らなかった。愛、さえわからなかった。私は、細田さまのおかきになる絵に夢中になって、あんなお方の奥さまになったら、どんなに、まあ美しい日常生活を営むことが出来るのでしょう、あんなよい趣味のお方と結婚するのでなければ、結婚なんて無意味だわ、と私は誰にでも言いふらしていたので、そのために、みんなに誤解されて、それでも私は、恋も愛もわからず、平気で細田さまを好きだという事を公言し、取消そうともしなかったので、へんにもつれて、その頃、私のおなかで眠っていた小さい赤ちゃんまで、夫の疑惑の的になったりして、誰ひとり離婚などあらわに言い出したお方もいなかったのに、いつのまにやら周囲が白々しくなっていって、私は附き添いのお関さんと一緒に里のお母さまのところに帰って、それから、赤ちゃんが死んで生れて、私は病気になって寝込んで、もう、山木との間は、それっきりになってしまったのだ。（一四三P～一四四P）

『斜陽日記』

「Kさんが、お怒りになったのは、あたりまえでしたの。静子は、どうして、Mのことが忘れられなかったのかしら。こんなことを言っても信じていただけないと思うけれど、静子はKさんと別れるつもりで、Kさんの所へ嫁ったのではありません。叔父さまのお通夜のよるだって、Mさんもいらしていたけれど、お話なんか、ひとこともいたしませんでした。それをKさんが邪推をきって、……満里子をMさんの子供だなんて、」

「だけどMさんを愛していたと言えば、それはお疑いになるのは、当りまえです。」

「Kさんは人一倍、自我の強いかただったのです。」

「あなたは、Mさんを愛している、つて正直な告白をしたのでしょう？　お母さまには分るわ。あなたが、お通夜のよるMさんにお逢いしても、子供のような気特でいたということ。あんな告白をしながら、Mさんと逢っても、知らん顔でいたということ。静子には、まだ分っていなかったのよ。だけど、Kさんがお疑いになったのは、当然なのですよ。Kさんでなくても、誰だって疑います。誰の前でも、平気で、Mさんを愛していたなんて、」

「平気でKさんを苦しめて、静子、いけない女でしたのね。だけどKさんも若かったのよ。」

「……あの時、お父さまが生きていらしたら、とてもKさんと別れることは出来なかったでしょう。そうしてKさんと結婚生活をつづけて、一層Kさんを苦しめ、私も苦しんで、病気になって、いまごろは、きっと、死んでいたでしょう。」

みんな静子がいけなかったのだ。満里子が死んで、Kさんと別れて、それから半歳して、始めてMのおもかげが薄れて行ったのだ。いけない女の静子はいけない女だった。だけど、もう、みんな、過ぎ去ってしまって、静子は聖純だった昔にかえったのだ。（四六P～四八P）

『斜陽日記』では、出戻ってきた部分と前夫の部分が続いて表されているが、『斜陽』の場合は、出戻ってきた部分は、お母さまに対して口述する場面であり、前夫の部分は、上原に初めて出会った後のタクシーに乗っているときの回想の場面である。『斜陽日記』とは違い、部分の使われ方の順番が逆である。出戻ったことについての部分では、『斜陽』で「ひめごと」について、かず子が直接言及している。

前夫についての部分では、『斜陽日記』で「いけない女の静子はいけない女だった。だけど、もう、みんな、過ぎ去ってしまって、静子は聖純だった昔にかえったのだ。」と静子が過去のことして整理している。ここで、着目したいのは、「静子は清純だった昔にかえったのだ」というところである。静子がこれまでの過去を省み、自己浄化したということと夫も子もいない状態に戻ったということを考える。つまり、静子にとって身の上も心も昔に戻ったということである。静子が清純という言葉を使っていることから、浄化がなされ、再生されたと考える。

一方で、『斜陽』のかず子は、昔に戻る、元に戻るという思考がない。かず子は過去のことを持ち出すが、省みることはしない。むしろ、過去のことを使いながら、「ひめごと」というものを提示している。「ひめごと」も、他の動物との違いを持ち出し、万物の霊長としての人間が持つものとして、価値を高めている。

『斜陽』の語りが、高田氏の言う[四七]「《出来事》の時間とかず子の《語り》の時間とが、単純な進行形でもなければ単純な回想でもないダイアレスティックな関係を形成している」。対して、『斜陽日記』は、すべてが回想というわけでないが、「斜陽」と比較した場合、より回想的である。

『斜陽日記』の冒頭部は、

「告白」の作品は、とうとう書けなかったけれど、その代り、「過ぎし時」という日記のような作品を書いて、「もう文学はあきらめてもかまわない。」という気持になっていた。戦争が始まって二年目の春だった。私達には何も識らされなかった。けれど、その頃はすでに、ミッドウェー海戦の済んだあとで、戦局は救いがたいまでに悪化していたのである。(『斜陽日記』五P)

と始まり、戦中の話へと展開されていく。『斜陽日記』はこの冒頭から、お母さまの死までである。

『斜陽日記』という「日記」が題に用いられているが、当時の現在について日録しているのではなく、ある定点からのその時々のことを記録した感が強い。『斜陽』の方が現在性なところがあり、それはかず子がいかに自己の論理を形成していくかという過程があるからと考える。

お母さまが亡くなる手前の部分を見てみたい。

『斜陽』(五章)

「世間は、わからない。」

とお母さまはお顔を向うむきにして、ひとりごとのように小さい声でおっしゃる。

「私には、わからない。わかっているひとなんか、無いんじゃないの？　いつまで経っても、みんな子供です。なんにも、わかってやしないのです。」

けれども、私は生きて行かなければならないのだ。子供かも知れないけれども、しかし、甘えてばかりもおられなくなった。私はこれから世間と争って行かなければならないのだ。ああ、お母さまのように、人と争わず、憎まずうらまず、美しく悲しく生涯を終る事の出来る人は、もうお母さまが最後で、これからの世の中には存在し得ないのではなかろうか。死んで行くひとは美

四七　高田知波「『斜陽』論―ふたつの「斜陽」・変貌する語り手」(『国文学』一九九一年四月)

しい。生きるという事。生き残るという事。それは、たいへん醜くて、血の匂いのする、きたならしい事のような気もする。私は、みごもって、穴を掘る蛇の姿を畳の上に思い描いてみた。けれども、私には、あきらめ切れないものがあるのだ。あさましくてもよい、私は生き残って、思う事をしとげるために世間と争って行こう。お母さまのいよいよ亡くなるという事がきまると、私のロマンチシズムや感傷が次第に消えて、何か自分が油断ならぬ悪がしこい生きものに変って行くような気分になった。

『斜陽日記』

「世間は、わからない。」

とひとり言のように、小いさい声で仰っしゃった。

「私にはわからない。わかっている人なんかないんじゃないの？　いつまでたってもみんな子供です。」

けれども、私は生きて行かなければならない。私は子供かも知れない。けれども、ひとりで生きて行かなければならない。世間と争ってでも生きて行かねばならない。お母さまのように、人と争わず、憎ます、うらまず、美しく、悲しく、生涯を終ることの出来る人は、もうお母さまが最後で、これからの世のなかには存在し得ないのではないだろうか。死んで行くひとは美しい。生きるということ、それは、たいへん醜くて、血の匂いがするきたならしいことのような気がするけれど、女が生きることがみごもって穴を掘る女蛇の姿であるならば、私もそのように生きて生きたい。私は、私の思いを、しとげるために生きて行く！（一七六P）

お母さまがいよいよ亡くなるということがきまると、私のロマンチシズムや感傷が次第に消えて、何か自分が油断のならぬ悪がしこい生なものに変って行くような気分になった。私はみごもって穴を掘る女蛇の姿を、畳の上に思い描いた。それは天上の幸福とはまるきり違うものであっても、私はそのように生きて、人に負けないように生きて行こうと思った。お母さま、満里子、死んで行く。美しい。けれども、血の匂いのする生も美しいのだ。それこそ天上の幸福に通うものなのではないだろうか？（一七八P）

『斜陽』では、かず子が「私はこれから世間と争って行かなければならないのだ。」と語っているの対し、『斜陽日記』では、静子が「世間と争ってでも生きて行かねばならない。」と語っている。かず子が「世間と争って」と対社会的な面を出している。静子は、「世間と争ってでも」と個人の問題のように感じられる。

静子は、「女が生きることがみごもって穴を掘る女蛇の姿であるならば、私もそのように生きて生きたい。私は、私の思いを、しとげるために生きて行く！」と強く宣言している。これは、『斜陽』にはない部分である。静子は出来事と自分の思いをストレートに表現している。対して、『斜陽』は、その部分はカットされ、かず子の感じ方で終わっている。

では、『斜陽』のかず子が意志や行動力がないかというとそういうわけではない。『斜陽日記』はお母さまの死後以降の静子についてわからない。この時点において考えると、静子は強く宣言をしているものの、具体的にどのように生きるのかは示されない。

『斜陽』のかず子の場合、これらのエピソードが実際の行動に移すために機能している。かず子が向かっていく際の内面的な障害の外堀を徐々に埋めていくものである。そして、六章で行動に移していく。

この場面において『斜陽』のかず子の語りは、『斜陽日記』の静子と比べて、はっきりと自己表明はしない。それは、かず子像と静子像の違いとかず子に目指す先の具体像があるからでないか。

つまり、静子のように、はっきりと明示することで、強い静子像となる。静子が見据えているであ

ろう世間像には現実性があると推測される。これは、かず子とは異なる。かず子は、様々なものを取り入れながら、自己の論理を形成していく。しかし、この論理には社会的にも現実的にも、受け入れられにくいものである。かず子のこの語り方は、「気もする」「気分になった」というように、かず子の感覚レベルでの認識を示す。

しかし、かず子のこの感じたことは徐々に内面を固めているものである。徐々に内面をかためていく過程ではあるが、かず子は対社会ということを思考に持ちつつ、かず子の論理に一貫性はないが、かず子は補強、肯定しながら、自己の論理を生成していると言える。

結論

旧来の研究では、かず子の成長や道徳革命の意義について議論が多くなされ、彼女を信念を貫く女性としてとらえる論がなされてきた。

しかし、『斜陽』におけるかず子は、作品内の登場人物、手記や手紙の執筆者、『斜陽』の語り手という三つの役割を持っていると考えられる。そして、かず子はそれぞれの役割を担い、過去と現在を往還しながら『斜陽』を語っていく。

『斜陽』はかず子が様々な役割や行為をするかず子を提示しながら、その中でかず子が変化していく作品と言える。

作品内の登場人物としてのかず子を見ると、ある一点における思考や言葉でもって、その時々の彼女のあり方を定義づけることは困難である。それは、かず子の思考は一点に留まることなく常に変化しているためである。その思考は一貫性をもっていない。かず子の思考は一点に留まることなく、次々へと連鎖性を持つ。ある一点における固定したかず子の姿ではなく、常に変化していく彼女を描いている作品と言える。

『斜陽』を語る（書く）かず子は様々な素材を取り込み、写し取り、提示している。そして、思考が連鎖しながら常に変化している。

連想的に語るかず子により、かず子の気まぐれさや揺れが表れている。次々と連想されていくところに強力な論理性は感じられないが、多くの話題を用いながらずらしていく。かず子の連想により、多くのかず子の脳裏にあることをまき散らしているが、それらは完全に別のことではなく、つながりを持っている。強力な論理ではなく、様々な事象に移ろいながらもつながっているという連想性が示される。これは、かず子の特性である。

手紙の内容に目を向けると、かず子は手紙の中で「恋」を一方的に作り上げる。世間的には不良とされている人を常識家と位置づけ、その一方でかず子自身も「不良」の側に置き、自己を正当化していく。かず子の論理に正当性はなく、一方的である。そして、三通の手紙でかず子は、上原に呼びかけることを通して自己を作り上げている。上原という相手を置き、そこに呼びかけるということを手紙を書く行為の中で行い、自己を作り上げる。書くことで直治の言葉や過去のことを回想しながら、内面の思考を整理している。それは論理的でなく、飛躍があるが、変革を目指すという方向は示されている。

『斜陽』の下敷きとなった『斜陽日記』と比較から、かず子の対社会という意識の存在が明らかとなった。かず子は一個人としての枠組みの中での思考よりも、対象を置き、それと対峙させることで自己を表出していく。

かず子は『斜陽日記』の静子とは異なり、現実的や常識的な枠で思考しない。かず子は、様々なものを取り入れながら、自己の論理を形成していく。しかし、この論理には社会的にも現実的にも、受け入れられにくいものである。かず子の語り方には、「気もする」「気分になった」というように、かず子の感覚レベルでの認識を示すところがある。

しかし、曖昧とも言えるようなかず子のこの感じたことは徐々に内面に蓄積され、かず子は対社会という思考を強めていく。論理に一貫性はないが、かず子は事象を使い補強、肯定しながら、自己の論理を生成している。

このようなかず子の有り様は、戦後という混沌とした社会の中における、これまでの地位、通説や信条に懐疑性が生じる可能性であり、自己の論理を確立することでアイデンティティーの保持を模索する様である。これを提示する『斜陽』という小説は、戦後という時代状況のみならず、先が不透明な状況下において、アイデンティティーを模索する様をかず子の有り様を用いて強く投影する意味をもっている。その意味において、『斜陽』は時代を経ても評価される作品であると考える。

おわりに

『斜陽』について、第二章「研究史」、第三章「作品の周縁と主題としての「滅び」」、第四章「かず子という人物」、第五章「聖母子」、第六章「『斜陽』と『斜陽日記』の比較」と論じた。

第二章「研究史」では、これまでの研究において参考とされてきた中から主要論文を取り上げて、先行研究を整理し、本論文の礎とさせていただいた。『斜陽』の先行研究は太宰の他作品と比較して、多い。『斜陽』について、多角的なアプローチがなされてきたことを物語っている。

第三章では作品の周縁と主題としての「滅び」について確認をした。

『斜陽』の先行研究が多くなされてきたことは、『斜陽』の持つ力によるものである。発表当時の高い人気は、当時の時代状況や作品に内包されている「貴族」「恋」「道徳革命」などのコンテンツによるところがあると言える。また、作品の評価についても、そういった作品内部と周縁部の効果から、主題として「滅び」の方向となっていったことも合点できるものである。

また、『斜陽』は太宰がこれまでに用いてきた様々な手法から作り上げられている。「女性独白体」という「語り」の方法、他の手記を利用する方法、書簡を用いる方法である。太宰自身のことでは、生家の没落の様、『桜の園』、太田静子との関係が作品に作用を与えている。

第四章では、「語り」という視点から、かず子の論理に焦点を当て、かず子という人物を洗い出した。

かず子の論理は社会において通用するものでなく、かず子内部で生成され、消費されている。

つまり、かず子の論理は独りよがり的な性格が強く、かず子の尺度によるものである。かず子が論理を作り出していく過程において、一貫した論理があるものではない。また、かず子は様々な事象を取り込み、自己の論理を生成している。

『斜陽』は出来事の時間とかず子の語る時間が回想だけでなく、進行形だけでもないという関係から成り立っている。かず子は絶えず変化し、思考もずれていく。そのため、かず子の思考や論理に一貫性はない。そこから、一貫性のないかず子というものが浮かび上がってくる。かず子の「語り」に着目した場合、『斜陽』は「かず子が語ることで変化することを表している物語」である。

第五章では、これまで「聖母子」を誰に重ねているかということについて論じられてきたが、かず子は「聖母子」や「マリヤ」を用いて自己の論理を肯定させていることを明らかにした。

第六章は、『斜陽』と『斜陽日記』を比較して『斜陽』の特色を考察した。『斜陽』に『斜陽日記』によるところが多分に存在するが、『斜陽』のかず子が「世間と争って」と対社会的な面を出していることが浮かび上がる。かず子が対社会ということを思考に入れながら、論理に一貫性はないものの補強、肯定しながら、論理を生成していると言える。

本論が出来上がるまで、多くの方々に研究を支えていただきました。

指導については、仁平先生にご多用な中、指導時間を作っていただき、明解で丁寧な指導をいただきました。また、国語科の先生方には、研究に関することや幅広い国語の分野について、そして、国語科教育について、深い学識を教授いただきました。

近代文学の魅力、太宰の魅力、作品との向き合い方、丁寧に読むことの大切さ、論文を書くに当たっての事前指導など、文学研究の礎をこれまでに近代文学の先生方に教授いただきました。

公私にわたって、研究者としての姿を示唆してくださりました。

本論が完成しましたが、研究者としてはこれからが始まりです。先生方に教えていただいたことを宝とし、研究をしていきたいと存じます。今後も、ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

本研究にあたり、関係諸機関の支援、職場の皆様に多大な支援をいただきました。

そして、家族がいつでも支えてくれました。

これまで支えてくれた多くの方々に心より感謝申し上げます。

テキスト

太宰　治『斜陽』（『太宰治全集９』筑摩書房　一九八九年五月）

引用文献

第一章

「太宰治年譜　岸睦子編」（『太宰治大事典』勉誠出版　平成十七年一月十日）

山内祥史「解題」『太宰治全集第九巻』（筑摩書房　一九九〇年十月二十五日）

中村隆英『昭和史Ⅱ』（東洋経済新報社　一九九三年四月三十日発行）

野原一夫「「斜陽」と「斜陽日記」」『新潮』九十五巻第七号（新潮社　一九九八年七月一日発行）

高田知波「『斜陽』論―ふたつの「斜陽」・変貌する語り手」（『国文学』一九九一年四月）

齊藤理生「太陽と言葉―『斜陽』試論」（『太宰治スタディーズ』第一号　太宰治スタディーズの会　二〇〇六年六月）

『太宰治全集１２』（筑摩書房　一九九九年四月二十五日）

鳥居邦明『『斜陽』』（『作品論太宰治』双文社出版　昭和四十九年六月二十日）

第二章

須田章「太宰治・斜陽」（『東北文学』一九四七・一一）

香川明「文芸時評『斜陽』その他」（『若草』一九四七・一二）

手塚富雄「作品から浮いた思想　概念の苦悶が何の苦悶ぞ！」（『日本読書新聞』一九四七・一二）

小原元「斜陽の挽歌　解体に瀕する太宰治」（『新日本文学』一九四八・一）

伊藤整「『斜陽』と『処女懐胎』」（『人間』一九四八・二）

神西清「斜陽の問題」（『新潮』一九四八・二）

亀井勝一郎「作家論ノート　太宰治編」（『文学界』一九四八・六）

扇畑忠雄「人間への脱出―太宰治『斜陽』について―」（『ペン』一九四八・七）

豊島与志雄「解説」（『太宰治全集』第十四巻　八雲書店　一九四八・一〇）

長谷川泉「「斜陽」とモデル」（『解釈と鑑賞』一九五〇・七）

亀井勝一郎「解説」（『太宰治作品集』第５巻　創芸社　一九五一・五）

奥野健男「作品研究「斜陽」小論」（『近代文学』一九五三・六）

長谷川泉「斜陽（太宰治）―現代文の鑑賞・その九―」（『解釈と鑑賞』一九五三・一二）

臼井吉見「太宰治論」（『展望』一九五四・七）

小山清「名作鑑賞「斜陽」」（『文芸』一九五五・六）

ドナルド・キーン「日本と太宰治と「斜陽」」（『文芸』一九五六・一二）

三枝康高『太宰治とその生涯』（現代社　一九五八・九）

田中保隆「「斜陽」の基底」（『解釈と鑑賞』一九六〇・三）

鳥居邦明「斜陽―太宰治―」（『国文学』一九六三・九）

小笠原克「斜陽―その運命への素描―」（『国文学』一九六七・一一）

柳富子「「斜陽」について―太宰治のチェーホフ受容を中心に―」（『比較文学年誌』一九六九・三）

佐藤泰正「〈斜陽〉における太宰治―危機における美意識」（『太宰治論』　翰林書房）（『国文学』一九七〇・六）

東郷克美「太宰治とチェーホフ―『斜陽』の成立を中心に」（『解釈と鑑賞』一九七二・一〇）

浦田義和「『斜陽』論―母・娘の葛藤および〝子〟の位置」（『太宰治　制度・自由・悲劇』　法政大学出版局　一九八六・三）（『熊本大学国語国文学９』一九七三・一二）

鳥居邦明「『斜陽』」（『作品論太宰治』双文社出版　一九七四・六）

東郷克美「死に行く『母』の系譜―敗戦後の太宰治」（『太宰治の世界』　（『太宰治という物語』

筑摩書房　二〇〇一・三）　冬樹社　一九七七・五）
三好行雄・梶木剛・東郷克美・渡部芳紀「共同討議『斜陽』をめぐって」（『国文学』一九七九・七）
渡部芳紀「『斜陽』試論」（『近代小説の読み方2』『太宰治　心の王者』　洋々社　一九八四・五）
有斐閣　一九七九・九）
須田喜代次「『斜陽』論ノート―朝を迎えるかず子を中心に」（『近代文学論１１』一九七九・一一）
江種満子「『斜陽』の女性―かず子を中心に―」（『解釈と鑑賞』　一九八一・一〇）
社本武「『斜陽』と『斜陽日記』―私小説の変貌―」（『信州白樺』　一九八二・一〇）
瀬戸内晴美・前田愛「『斜陽』と太宰治」（月刊カドカワ　一九八三・九）
大森郁之助「『斜陽』結尾の混乱―直治の恋人の設定をめぐって―」（『札幌大学女子短期大学部紀
　要』一九八七・二）
千葉宣一「『斜陽』試論―『斜陽日記』の剽窃をめぐる問題」（『解釈と鑑賞』一九八八・六）
高田知波「『斜陽』論」（『国文学』一九九一・四）
島村輝「《書くこと》への意志」（『太宰治』洋々社　一九九二・六）
榊原理智「語る行為の小説」（『日本文学』　一九九七・三）
相馬正一「『斜陽日記』のオリジナリティー」（『国文学』一九九九・六）
中村三春「斜陽のデカダンスと〝革命〟」（『国文学』一九九九・六）
安藤宏「文献学の中の太宰治」（『国文学』一九九九・六）
安藤宏「太宰治における〝滅びの力学〟」（『解釈と鑑賞』二〇〇一・四）
山崎正純「『斜陽』」（『国文学』二〇〇二・一二）
第三章
歴史学研究会『日本同時代史１　敗戦と占領』（青木書店　一九九〇年九月一日発行）
中村隆英『昭和史Ⅱ』（東洋経済新報社　一九九三年四月三十日発行）
鴨下信一『誰も「戦後」を覚えていない』（文春新書　二〇〇五年十月二十日発行）
小田部勇次『華族　近代日本貴族の虚像と実像』（中公新書　二〇〇六年三月二十五日発行）
浅見雅男『華族たちの近代』（中公文庫　二〇〇七年三月二十五日発行）
田中保隆「「斜陽」の基底」（『解釈と鑑賞』一九六〇・三）
石井洋二郎『身体小説論―漱石・谷崎・太宰』（一九九八年一二月　藤原書店）
小原元「斜陽の挽歌　解体に瀕する太宰治」（『新日本文学』一九四八年一月）
亀井勝一郎「作家論ノート　太宰治編」（『文学界』一九四八年六月）
亀井勝一郎「解説」（『太宰治作品集』第５巻　創芸社　一九五一年五月）
奥野健男「作品研究「斜陽」小論」（『近代文学』一九五三年六月）
柳富子「「斜陽」について―太宰治のチェーホフ受容を中心に―」（『比較文学年誌』一九六九・三）
安藤宏「太宰治における〝滅び〟の力学―『斜陽』を中心に」（『国文学　解釈と鑑賞八三九号　二
　〇〇一年四月』
第四章
高田知波「『斜陽』論―ふたつの「斜陽」・変貌する語り手」（『国文学』一九九一年四月）
須田喜代次「『斜陽』論ノート―朝を迎えるかず子を中心に」（『近代文学論１１』一九七九・一一）
島村輝「《書くこと》への意志」（『太宰治』洋々社一九九二・六）
榊原理智「語る行為の小説」（『日本文学』　一九九七・三）
中村三春「斜陽のデカダンスと〝革命〟」（『国文学』一九九九・六）
第五章
佐藤泰正「〈斜陽〉における太宰治―危機における美意識」（『太宰治論』　翰林書房）（『国文学』
　７０・６）
江種満子「『斜陽』の女性―かず子を中心に―」（『解釈と鑑賞』　８１・１０）
木村りり子「『斜陽』の中の母とマリヤ」（「東京女子大学日本文学」九六　二〇〇一年九月三〇日）

青木京子「『斜陽』とキリスト教美術―三つの〈聖母子〉物語」（「キリスト教文芸」二二　二〇〇六年四月二五日）
石井洋二郎『身体小説論―漱石・谷崎・太宰』（一九九八年十二月　藤原書店）
第六章
小森陽一『斜陽日記』「解説」（『斜陽日記』小学館文庫　一九九八年六月）
渋谷紀子「太宰治『斜陽』の女性」（『日本文学ノート　第三十一巻』宮城学院女子大学日本文学会　一九九六年）
相馬正一「太宰治「女生徒」成立の背景―有明日記との相関をめぐって―」（『太宰治研究７』和泉書院　二〇〇〇年二月）
高田知波『『斜陽』論―ふたつの「斜陽」・変貌する語り手」（『国文学』一九九一年四月）

参考文献

No.	論文題名 //論文執筆者名 //掲載誌名	発表年
1	太宰治『斜陽』研究史：一九四〇年代～—近代的〈主体〉の確立 //岡村知子 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
2	太宰治『斜陽』研究史：一九九〇年代～—同時代言説へ、そしてテクストへ //吉岡真緒 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
3	太宰治『斜陽』研究史：一九八〇年代～—時代／実証 //小沢純 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
4	太宰治『斜陽』についての一考察—〈真／偽〉を超えて //万所志保 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
5	太宰治「斜陽」論—物語の転換と余白 //吉岡真緒 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
6	『斜陽』のざわめく周縁—〈太田静子〉のイメージ化 //井原あや //太宰治スタディーズ	2006/6/19
7	《傾斜》する記憶—『斜陽日記』／『斜陽』試論 //小沢純 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
8	「斜陽」における〈破壊〉と〈犠牲〉—太宰治の倫理性 //永吉寿子 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
9	虹と水平線 //大国真希 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
10	『斜陽』と〈道徳革命〉—「教育勅語」・「家族制度をめぐって」 //青木京子 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
11	太宰治『斜陽』研究史：一九六〇年代～—伝記的〈事実〉と〈作品論〉の生成 //松田忍 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
12	太宰治『斜陽』研究史：一九五〇年代～—〈太宰的〉の形成 //井原あや //太宰治スタディーズ	2006/6/19
13	太宰治「斜陽」論—問題系としての戦後ロマン主義 //岡村知子 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
14	太宰治『斜陽』研究史：一九七〇年代～—〈滅び〉〈復活〉〈母〉 //永吉寿子 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
15	明滅する〈自由〉—太宰治『斜陽』を解読する //松本和也 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
16	太陽と言葉—『斜陽』試論 //斎藤理生 //太宰治スタディーズ	2006/6/19
17	『斜陽』論—かず子の「美（かな）しい」朝 //姜辰根 //中央大学国文	2005/3/25
18	研究ノート　太宰治と絵画—『斜陽』を中心として //青木京子 //昭和文学研究	2003/3/1
19	特集　太宰治—文化・国家・個人　そしてメディア（文化・国家・個人）〈貴族〉としての〈天皇〉—『斜陽』と『サド侯爵夫人』 //柴田勝二 //国文学	2002/12/10
20	特集　太宰治—文化・国家・個人　そしてメディア（新しいテクスト読みから）「斜陽」—敗戦後思想と〈革命〉のエスキス //山崎正純 //国文学	2002/12/10
21	『斜陽』の中の母とマリヤ //木村りり子 //東京女子大学日本文学	2001/9/30
22	特集・二十一世紀旗手　太宰治　太宰治における〝滅び〟の力学—『斜陽』を中心に //安藤宏 //解釈と鑑賞	2001/4/1
23	太宰治『斜陽』論—かず子と「蛇」をめぐって //孫才喜 //日本研究（国際日本文化研究センター）	1999/6/30
24	特集・変貌する太宰治—没後五十周年　作品別同時代評価の問題点 //安藤宏 //国文学	1999/6/10
25	特集・変貌する太宰治—没後五十周年　［資料］『斜陽日記』のオリジナリティー—創作「相模曾我日記」の活字化 //相馬正一 //国文学	1999/6/10

26	特集・変貌する太宰治—没後五十周年　検証・〈女性〉の独白体 「斜陽」のデカダンスと〝革命〟—属領化するレトリック //中村三春 //国文学	1999/6/10
27	特集・変貌する太宰治—没後五十周年　文献学の中の太宰治—新公開資料（草稿）の意味するもの //安藤宏 //国文学	1999/6/10
28	「斜陽」と「斜陽日記」 //野原一夫 //新潮	1998/7/1
29	太宰治と横光利一—その周辺のことども //保昌正夫 //解釈と鑑賞	1998/6/1
30	語る行為の小説—『斜陽』の消滅する〈語り手〉 //榊原理智 //日本文学	1997/3/1
31	『斜陽』 //和田季絵 //解釈と鑑賞	1996/6/1
32	あかるい太宰、くらい太宰（3）—『斜陽』 //吉本隆明 //ちくま	1994/3/1
33	太宰治『斜陽』論 //臼井優子 //愛知大学国文学	1993/12/1
34	「斜陽」論—ふたつの「斜陽」・変貌する語り手 //高田知波 //国文学	1991/4/1
36	「斜陽」結尾の混乱－直治の恋人の設定をめぐって //大森郁之助 //札幌大学女子短期大学部紀要	1987/2/1
37	太宰治の描いた女性－「斜陽」を中心に //小峰朋子 //日本文学論叢（茨城キリスト教短期大学）	1986/3/1
38	『斜陽』と『斜陽日記』－私小説の変貌－ //社本武 //信州白樺	1982/10/1
39	「斜陽」の女性—かず子を中心に— //江種満子 //解釈と鑑賞	1981/10/1
40	〈共同討議〉「斜陽」をめぐって //三好行雄 //国文学	1979/7/1
41	「斜陽」論ノート—朝を迎えるかず子を中心に— //須田喜代次 //近代文学論	1979/11/1
42	太宰治におけるロマンチシズム—「魚服記」より「斜陽」まで— //佐藤泰正 //解釈と鑑賞	1977/12/1
43	太宰治とチェーホフ—「斜陽」の成立を中心に— //東郷克美 //解釈と鑑賞	1972/10/1
44	〈斜陽〉における太宰治 //佐藤泰正 //国文学	1970/6/1
45	「斜陽」について—太宰治のチェーホフ受容を中心に— //柳富子 //比較文学年誌	1969/3/1
46	斜陽の問題 //神西清 //太宰治	1964/6/1
47	「斜陽」の基底 //田中保隆 //国文学解釈と鑑賞	1960/3/1
48	『斜陽』小論 //奥野健男 //近代文学	1953/6/1
49	斜陽（太宰治）—現代文の鑑賞・その九— //長谷川泉 //国文学解釈と鑑賞	1953/12/1
50	「斜陽」とモデル //長谷川泉 //国文学解釈と鑑賞	1950/7/1
51	虚構論—斜陽について— //島本恵也 //国文学解釈と鑑賞	1948/12/1